
光の国の物語 -車輪の戦士たち-

まぐらのねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の国の物語 - 車輪の戦士たち -

【Nコード】

N0056F

【作者名】

まくらのねむこ

【あらすじ】

闇に滅ぼされた光の国。十年たった今、光の封印は解かれ、亜麻色の髪の女剣士ルシアを軸に使命を帯びた者たちが集う。からみあう過去、運命に翻弄される恋人たちの運命は…

ブローグ・闇の侵攻（前書き）

はじめまして。

「まぐらのねむこ」と申します。

以前、お芝居のために書いた脚本を小説に書き直してみようと思いました。

ひとりでも多くの方にお読みいただけたら嬉しいです。

なお、この作品は「アルファポリス ファンタジー大賞」にエントリーしています。

応援していただけたら、幸せです！

プロローグ・闇の侵攻

いまやあたりは、轟々（ごうごう）と鳴る炎の音に包まれていた。そしてそのすぐあとからは、恐怖を背負った闇が迫っている――。

ブライトキングダム

光の国の聖なる森は暗黒のうちに沈み去り、ブライト王の居城だけがかるうじて光のなかに浮いていた。

が、闇の軍勢はすでに城をくまなく取り囲んでいる。

王国を守護する光の妖精たちにももはや、王を救い出すすべは見出せないのだった。

いよいよ城の一角から無数の黒い影がすべるように忍び込むと、そこから闇が広がり始めた。

闇の戦士は暗黒の剣をふるい、迎え撃つ光の戦士を次々に打ち負かしていく。

暗黒の剣は遣い手の戦気を帯びて、地獄の炎を放つ。光の森の木と同じように黒く干からびた骸^{むくろ}となり果てた光の戦士たちを踏み越えて、彼らは侵入を続けた。

その混乱の間を、ひととき大きな、闇よりもなお黒い影が堂々と進みゆく。

重いマントがひるがえり、胸の上に三日月形の銀光が鈍く宿った。

ダークキングダム

彼こそはダーク王――闇の王国を統べる暗黒の王者なのである。

彼はまっすぐに玉座の間へと入っていくと、中央に立ち尽くしじ

つと耳を澄ませる。

鉄仮面に覆われたその異様な顔をぐつと上げると、血走った眼で^{まなこ}玉座を凝視した。

どこかで泣く赤ん坊の声がかすかに聞こえている。

木の葉がざわめくほどの音であったが、ダーク王の耳は確実にそれをとらえていた。

なおもじつと動かずにいたが、突如玉座めがけて突進すると、手にしていた巨大な暗黒魔剣^{ダーク・ソード}を振り上げ玉座を真二つに切裂いた。

すると、なんと、玉座の下に下へと伸びる階段があらわれたではないか。

ダーク王はその階段をすべるように降りていった。

そうしてついに、追い詰められたブライト王と、その王妃に対面したのである。

王妃はまだ若く、美しく、その腕には生まれたばかりの赤ん坊を抱いていた。

火のついたように泣く乳飲み子をかばうように抱き締め、しかしその顔は蒼白であった。

彼女の前に立ちはだかり、ブライト王は声を荒げた。

「ダーク王、なぜだ。なぜ我が国を攻撃する?! あなたにはあなたの国があるではないか!」

闇がダーク王の背後で波のように持ち上がった。

「教えてやろう、ブライト王よ。なぜならおれは、弟のおまえが憎いからだ。おまえには妖精の加護があり、おれにはただ闇があるだけだ。おれも光が欲しい、だからおまえの王国をもらう——光の国、ブライトキングダムをな」

「ダーク王!!」

王妃アルタミラが悲痛に叫んだその瞬間、ダーク王の背後の闇が渦を巻き、彼の漆黒の髪を、暗黒のマントを、高く巻き上げた。

「兵を引いてくれ、ダーク王！ わたしを殺したければ殺すがいい、だが王妃と王女の命は……」

そのとき、ザッ！ と鈍い音がして、ブライト王の首が飛んだ。

「！」

彼の首のない胴体ががっくりとひざまずき、前に倒れて瞬時に炭色に干からびていくのを、王妃は瞳を見開いたまま声もなく見つめた。

だがダーク王の魔眼が、じりじりと自分の腕の中のものに迫っているのを知ったとき、彼女は凍りついて息を呑んだ。

魔剣から放たれた火が、部屋のあちこちを燃やし始めている。

ダーク王は真っ黒な全身から強いオーラを放ちつつ、地を這うような不気味さで言った。

「王妃よ。妖精の加護はもう終わりだ。今度はおれが受ける番だ。その子を入質にすれば妖精たちも言うことを聞くだろう」

「……ライレーン!!」

恐れる前に、死はやってきた。

ライレーン王女を抱き締め、身をかわして逃げようとした王妃の

背を暗黒魔剣^{ダーク・ソード}がひと撫ですると、王妃もまた地に伏し焼け焦げた枝となった。

1・魔女バールの水晶

「ベルナデットーっ！」

ここはグラダナルの村はずれの森の中。

細い木の枝にびっしりと覆われた奇妙な小屋に住む年老いた魔女、バールの癩癩炸裂かんしゃくの叫び声が、今日も響いた。

近くの木の上からひよいと降り立ったのは、妖精ベルナデットである。

ふっくらと膨らんだ、ホタルブクロを思わせる袖から伸びている白い腕に大切そうに抱えているのは、彼女に不似合いな大きな酒壺だった。

「ベルナデット、待ちや！ ベルナデット！」

「ここまでおいで——バール婆さん」

妖精は、ラベンダー色の綿菓子のような髪と背中の透明な小さな羽根を震わせながら、バールに向かってあっかんべをしてみせると、酒壺を抱きなおしてすたこら逃げ出した。

「ば……婆さんとはなんじゃ！ わしは大魔女じゃぞ！ おまえごととき妖精に馬鹿にされてたまるかつ。わしのハチミツ酒、返せっ」

「いいじゃない。バールのけちんぼ」

「だれが、けちじゃと？ そのハチミツはな、苦労して集めた熊ん蜂のミツなんじゃ。おまえになど、やれんわい」

「だって、これ、おいしいんだもん」

バールが文句を言う側から、ベルナデットは舌なめずりしつつ、

酒壺のふたを開けようとしている。

「やめやつ、このいたずら妖精……おおっ！」

と、そのとき、ボールは胸を押さえると、その場にばったり倒れ伏した。

「ど、どうしたの?! バール」

「し……心臓発作じゃ……く、苦しい……」

「バール! 大丈夫? しっかりして」

……とベルナデットがボールの側へ戻った瞬間――

「ほつれ、捕まえた!」

「あつ。騙したな!」

じだばたあがくが、後の祭り。「ほっほー」と、ボールは得意そうに笑った。

「まったくもって、悪い子じゃ! 十年前、ブライトキングダムが滅んだとき、おまえたち妖精を助けたのは誰だと思っておる? この婆じゃぞ。もちつと感謝せい!」

そして、「ぱこっ」とベルナデットの頭を叩く。

「あたっ! ……だつてえ。わたしはそのあとに生まれたんだもん」
「そうじゃったな。光の国から逃れてきた光が、葉の上の朝露に宿って生まれたのじゃったな。じゃがおまえが光の国の妖精の末裔まっえいであることにかわりはない」

いまやベルナデットは、ボール秘蔵のハチミツ酒を飲みそこなつて半泣きの態である。

口を尖らせ、ぶつぶつと文句を言った。
「もう。いつもそれを言うんだから。聞き飽きちゃったわ」

そしてバールの肩越しに小屋を見やって、あつと息を呑んだ。

「バール！ 小屋が……光ってるわ！」

「なんじゃと？」

振り返ったバールの目にも、白銀の光を四方八方に放つ、我が小屋が映った。

「おおつ、水晶じゃ。水晶が光り出したのじゃ！」

言うなりバールは飛んで小屋に戻り、ベルナデットもその跡を追う。

すると小屋の中で、たくさんの書物や薬草に囲まれて、大きな水晶がたしかに白く光っていた。

二人がのぞき込むと、もやのような渦は、やがてたくさんの尖塔が空に向かってそびえたつ白亜の城を形作ったのだった。

「光の城……ブライトキングダムじゃ」

「あれが？ じゃ、あそこにいるのは……」

水晶は、城のバルコニーにたたずむブライト王とアルタミラ妃、そしてブライト王の腕の中のライレーン王女まではっきりと映し出していた。

バールは思わず感極まった声を上げ、両手で顔をおおつとさめざめと泣き出した。

「おおお……王様、王妃様。お懐かしや。ライレーン王女様、なんたる愛らしさ……お可哀相にのう」

2・光の天使ソワール

「ライレーン王女様？」

パールは鼻をずずつとかみ、

「そうじゃ。ダーク王に囚われている光の国の王女様じゃ」

「今も？ 囚われてるの？ どうして生きてるってわかるのよう？」

パールは今度は長い鼻を振り、強い目でベルナデットを見た。妖精は心なしに赤い顔をし、きよとんとしている。

パールは再び水晶に向かいつつ、

「おまえが生きているのがその証拠じゃよ。光の王女様が生きていらつしやる限り、光の妖精は生を与えられるのじゃ」

「えっ……ということは」

「そう。王女様が死んでしまったら、おまえも露となって消える」

「えっえー！！ そんなばなな——あつ、ねえ、あれはだれ？」

今水晶は、森の中で木の実を集めるひとりの少女を映していた。

無造作に束ねられた亜麻色の髪が背中で揺れている。

その少女の横顔には王妃アルタミラの面影があった。

「ルシータ様じゃ。アルタミラ王妃様の妹御での。剣の好きなのはねつかえりじゃったわい。彼女もどこかで生きのびているはずじゃ……」

……わしが魔法で救えた数少ない人間のひとりじゃよ」

「ふーん。その人間たちはなにをしてるのよう。さっさと王女様を救いなさいって！」

ベナデットの粗暴な言葉にパールは眉をしかめつつ、重々しい口調で説明を加えた。

「今はまだ時期ではない。闇の力が強いんじゃ。それに彼らに光の

国の記憶はないんじゃないよ。一族の記憶はわしが封印しておいた。あの恐ろしいダーク王に気づかれずに生活していくには、本人の記憶を消し去る必要があったでの」

「わーっ、バールって、ほんとに大魔女だったんら。しゅっごーい……パチパチパチ」

「あたりまえじゃ、わしは……」

そこでようやくバールは、はっと気がついた。

ベルナデットを見る。

妖精はたった今、最後のハチミツ酒をあおったところであつた。

バールは慌てて酒壺を取り上げ中をのぞき、さらに逆さにして壺を振った。

ない。

一滴も残っていない。

バールの顔が青く変わり、そして赤くなる――。

「ベルナデット！……わしのハチミツ酒、全部飲んだなあーっ！」

「はら、じえんぶ？ ごめんなしゃーい」

そのとき、水晶の中で星が強くきらめき、二人の目を射た。

あまりのまぶしさにベルナデットは引つ繰り返ると、奇声を上げながら床に転がって手足をばたばたさせた。

『バール、バールよ』

美しい女性の声が、水晶の中から聞こえてくる。

それは幾重にも重なって、部屋中に聖なる旋律を響かせているよ

うであつた。

『わたしは光の天使ソワールです。パールよ、今こそ封印を解くときがきました。』

光の封印を解きなさい。

わたしを信じて』

「光の天使ソワール？ 光の精霊の中で、もっとも気高いお方か？

——封印を、解く……ではいいいよ……」

水晶は光の雲母を散らしたように、ますます輝きを増している。

そのなかに、かすかにソワールの長い髪や知的な顔の輪郭が浮かび上がった。

ソワールの儼かな声ともいえぬ声は、さらに続いた。

『そうです。闇の王を討ち、ライレーン王女を取り戻すときがきたのです。』

光の力を集結するのです』

「おお……」

一瞬、パールのしわだらけの顔にも高揚した輝きが宿ったかのように見えた。

老齢の大魔女は、まるで少女のように頬を染めていた。

ようやく起き上がったベルナデットも、興味深げに水晶を見つめている。

『三つの光が集うでしょう。金と銀と——そしてもっとも明るい光が。』

さあ、光の魔女よ、封印を解きなさい』

その言葉とともに、水晶から光の雲母が飛び出した。

それらはまるで生き物のようになりながら高く上がると、星河のように連なつてバールの小屋から流れ出してゆく。

バールは魔法の杖を掲げ、口の中で何事が唱えらると、それから雲母を見送るように両手を広げた。

「——光の精霊に守られし光の封印よ、今より汝、解き放たれるがいい。

すべての光は宿主に還るのじゃ。

ある者はそれを夢と感じ、またある者はおのれの使命を思い出してかの地に還る^{かえ}じやろう……

聞け、記憶の番人よ。その者を連れ来たれ。

はるか遠方より光を取り戻す使命を帯びて来る者を、無事にここへ導いておくれ。

さあ今こそ扉が開く、記憶の門が。夜明けの光たちが集うときが来た——」

星はどんどんと水晶からあふれ出て、小屋を、森を、突風に巻き込みながら、空へ空へと上がっていった。

3・ルシータの帰還

「誰かがわたしを呼んでいる。誰？」

何かがわたしを呼び戻そうとしている。なぜ？

わたしは誰？ わたしは——ルシータ。

わたしが住んでいた国は滅ぼされた。愛する者たちが大勢殺された。

どうして？ どうして今まで忘れていたのだろうか？」

いてもたってもいられず、ルシータは旅の支度を始めていた。夢から覚めた瞬間のように、甦った記憶だけが目の前にある。今までの生活はうたかたと消え、ブライトキングダムで過ごした遠い昔の日々こそが、今のルシータには真実であった。

「帰らなければ、わたしの国へ。ブライトキングダムへ。姉さまのいた、あの城へ——だけど、どっちへ行けばいい？」

身支度を整え、荷物を肩にかけて外へ出ると、秋風に舞う木の葉がルシータ——今まではティオナというのが呼び名であったが——の視線をいざなった。

青く澄んだ空を、まるでたくさんの星が流れるように輝く一本の道が、北の地平へと伸びている。

「こっちな」

ルシータは直感で確信すると、北の小道を進み始めた。

「たしかこの先には、グラナダルの村があるはず」

「北への道は不吉だ」と、サイラスが口癖のように言っていたの
を思い出す。
グラナダル

なぜかは知らぬが、それでも二人は北へ行つたことは一度もない。

サイラスというのは、ルシータが記憶を失つてさまよっていたとき、いろいろと世話をしてくれた男である。

彼はもう若くなく、美しくもなく、剣が彼の生活のすべだった。つまり剣闘士だったのである。

サイラスは記憶のない、まだ十そこそこの彼女にティアナと名付け、剣の扱いを教えるようになった。

もともと機敏で剣をふるうことが好きだったルシータも、女剣闘士としての腕をめきめきと上げていった。

最初、二人はサイラスの貧しい小屋で一緒に住んでいたが、ルシータが十五歳になったとき、サイラスは近くに新しい小屋を建ててくれ、彼女は独立した。

だがそのサイラスも、去年の冬、死んだ。

悲しみを絶ち、知らない土地でやりなおそうと思いつつ、ずるずると居残ってしまった。

失われた故国の記憶が戻ったことは、ルシータの旅立ちの決心を容易にもし、また新たな希望をもくれたのだった。

とはいえ、光の国は滅ばされてしまった。

戻っても、誰も生き残ってはいない。

敬愛していた姉にも会えるわけではない。

「でも、誰かがわたしを呼ぶ声が聞こえる。だから行かなければ」

ルシータのマントの下で、佩^はいた剣がカチリと音を立てた。

きらめく星屑は、いつの間にか空からルシータの目の前に降りてきていて彼女を先導した。

不思議な聖なる力が自分を導いてくれているだけでなく、守護してくれていることも、ルシータは感じていた。

途中、森で見つけた泉の側に腰掛けると、持ってきた荷物の中からパンとチーズを取り出し休憩を取った。

透き通った泉の水を口に含むと、とても冷たくて美味しい。

木の上を、立派な尾をしたリスが二匹、せわしく走っていった。

そのうち、森の気に影響されたか、ルシータは幻を見たのである。木々の間を幸せそうに散歩する、恋人たちの影を。

（あれは、アルタミラ姉さま。そして彼は――）

名は思い出せない。けれど彼は光の戦士だ。

美しいアルタミラの豊かな黒髪が風に流れ、白いドレスの裾がふわふわと華奢な足首にまわりついている。

太陽の色の髪をした戦士はアルタミラに優しく寄り添い、やがて彼女の腰を引き寄せると、唇を合わせた――

4・よみがえった記憶

「こんにちは。あなた、ルシータ？」

そのとき、急に明るく声をかけられ、ルシータははっと我に返った。

幻を払うように一度目を閉じると、再び目を上げて目の前に飛び出してきた少女を見つめる。

ラベンダー色の綿菓子のような髪と、ふくらんだ花のような、やはり紫の袖の軽快な衣に身を包み、葉っぱで作った靴を履いた女の子だ。

その気配のなさをルシータはいぶかったが、彼女の背中に生えている透明な小さな羽根を見たとき、相手が人間ではなく妖精だということに気づき納得した。

「ええ、そうよ。あなたは？」

妖精は嬉しそうに言葉を返してきた。

「わたしはベルナデット。バールの使いなの。バールは光の国の元魔女よ。あなたを案内するわね」

こうしてルシータが無事バールの元へ到着したとき、秋の日はすっかり暮れていた。

絡まった細い枝の隙間から漏れるバールの小屋の灯りは、まるで森を照らす大きな照明で、またその上に、ルシータを案内してきたあの不思議な星屑が集まってきらめいている様は、たいそう幻想的

であつた。

ルシータが思うに、パールはおよそ魔女らしい風体をしているのであつた。

すなわち、灰色の長い髪に、たれさがつた鼻。小さな目に歯が一本しかない口。

お決まりの杖も持つていて、それで曲がつた腰を支えている。

ルシータはパールがマツシユルムのような扉の向こうからあらわれたときには、思わず吹き出しそうになつてしまった。

「ようこそ、ルシータ。お待ちしておりましたぞ。わしを覚えておいでかの？」

ルシータはにつこりと、だが残念そうに首を横に振つた。

「悪いけど、まだよく思い出せないわ。なにしろ、ルシータという名を取り戻したばかりだから。——わたしを呼んだのは、あなた？」

「

パールは小さな目をまん丸に見開いた。

「ほうほう、まるで男のように勇ましい。その格好……もしやドレスなど着たことがありますかの？　じゃが、マントも剣もよくお似合いじゃ。とてもアルタミラ様の妹御とは思えんがの」

「姉さまを知っているの？」

「わしは、ブライトキングダムを守護する魔女のひとりじゃからの。よく存じておりますとも」

そう言いながら、パールはルシータを中へと招き入れた。

部屋の中には生活のためのこまごましたものや魔法に関する妙ちきりんなものが、所狭しと置かれたり吊り下げられたり、さらにさまざまな匂いまでがしていたが、小さ目の暖炉には暖かい火が燃え

てルシータの心をほつとさせるようだった。

ルシータはすすめられるままにマントを脱いで大きな肘掛椅子に座る。

「あなたを導いたのは光の天使ですじゃ。わしはただ光の封印を解いたまで……。

しかし十年前、光の国からあなたを救い出し、記憶を封じておいたのは、このバールでございます。ダークキングダムの王に悟られないようにするために、記憶を消しておいたのです」

「ダークキングダムの王？」

「そうです。ブライトキングダムを滅ぼし、ブライト王とあなたのお姉さまであるアルタミラ妃を殺したダーク王ですじゃ」

「ダーク王！」

とたんにルシータの顔が嫌悪に歪んだ。

5・光の助け手

「思い出したわ、あの戦い——！」

「あの光と闇の戦いのさなか、わしは魔法でできる限りの人間と妖精たちを救おうとしたのですじゃ。妖精は妖精界へ返し、人々は記憶を抜いてあちこちの土地へ飛ばしました。

じゃが闇の力の強大さゆえに、わしひとりの力では、到底太刀打ちできなかったのです……。

あの恐ろしい運命の日、光が闇に滅ばされてからちょうど十年。ようやく光が復活するときが来たようですじゃ」

「バール、わたしは何をすればいい？　わたしにもできることが？　バールは力強くうなずいた。

「もちろん。ルシータ、あなたこそがソワールの言った『もっとも明るい光』——」

バールが暖炉に薪をくべると、パチパチと火の粉がはじけ、炎の勢が増した。

その炎の向こうに暗い影を見るように、バールは続けた。

「いまやダークキングダムは、世界に勢力を伸ばしつつある……。恐怖は無益な戦争によって日に日に広がり、悲しみがより深い悲しみを呼んでいるのです。

ダーク王が光の国の希望、ライレーン王女を奪い、光の妖精たちを暗闇に閉じ込めてしまったせいで、人々の幸福な思いは碎かれ、不安と絶望だけが残っていくのですじゃ」

「ライレーン！　ああ、ライレーン王女！」

突如、ルシータの胸に本物の痛みが突き刺さった。

姉に抱かれてむずがるライレーンの姿を思い出したのである。

肉親を思う気持ち、ずっと忘れていた家族への熱い思いが、逆に彼女を打ちのめした。

「ライレーンは生きているの？」

顔を覆った手の下から、ルシータは悲痛につぶやいた。

もし生きているなら、なにがなんでも助けなければならぬ。

彼女は大好きな姉の忘れ形見、自分の血を分けた姪なのだ。

「むろん生きていらっやいますぞ。精霊の与えた眠りによって、闇の王の魔力から、かろうじて身を守っておられる。

今こそダーク王を倒し、ライレーン王女を取り戻さねばなりません」

「でもどうやって？」

そのつもりではいても、いざ言葉に出して言われるとさすがに心臓が縮み上がる。

相手は光を滅ぼした魔王なのだ。

だがそんなルシータの心を見ぬいたように、パールは静かに言った。

「心配なさらずとも、あなたはひとりではありませんぞ。光の戦士

……彼らがついている」

「光の戦士？」

「そう。彼らとともに戦う。それがあなたの使命なのです」

そうしてパールは、すでにゆらゆらとした影を映している水晶に向かつて両手をかざした。

「その者たちは二人……体のどこかに車輪のあざがある。
名前は、『金の車輪』『銀の車輪』」

「『金の車輪』『銀の車輪』……」

「おそらく、その者たちにもまだおのれの使命がわかってはおらぬでしょうが、光の天使ソワールの導きによって、すみやかにそれを知ることとなりますよう。」

ルシータ、恐れることはないのじゃよ。あなたにもソワールの加護はある。

だからこの二人の戦士とともにダークキングダムの王と戦い、失われたブライトキングダムを取り戻してください」

そのとき、水晶の中にはつきりと二つの車輪が浮かび上がり、世にも美しい金と銀の光を放って回り出したのを、ルシータは見た。

6・面影

翌朝ルシータは、新たにパールからもらった剣を手に、ひとり物思いにふけていた。

朝もやが木々の梢にかかり、今日最初の太陽が、薄くレモン色の光を投げかけている。

「光の聖剣……か。この剣でダーク王を倒す」

手の中の聖剣は、重過ぎず軽過ぎず、まるで昔から使っている剣のようにしっくりとルシータの手になじんだ。

刃は細めで薄く、極めて鋭い。鞘や柄の部分には、まるで特別な宝剣のようにこまかな細工がなされ、宝石が埋め込まれている。

パールが言うには、宝石の光にも闇の勢力に大きなダメージを与える効力があるらしい。

鏡のような刃に自分の影が映り、ふとアルタミラの面影を重ねてみる。

ルシータと八つ違いの姉だったアルタミラ。

年は離れていても、二人はよく似た姉妹だと言われていた。

違うのは、髪の色と瞳の色。

アルタミラは黒く豊かな髪に海の色の子、ルシータは亜麻色のさわりとした艶やかな髪に深い森の子。

優しく、美しく、森が好きだった姉。

ブライトキングダム王妃にはふさわし過ぎるひとだった……。

「でも姉さまには恋人がいたわ。あのひとはどうしたんだろう。二

人はたしかに幸せそうだったのに」

ていねいに記憶を手繰っても、二人が別れた理由は見つからなかった。

それに今、戦士が生きているのかどうかも知りようがない。自分と同じように、悲しい記憶が戻っているのかどうかも。

「よく眠れたかい？」

そのときボールが起き出してきて、ルシータに声をかけた。

「ええ。ぐっすり」

にこやかに答えると剣をしまい、肝心なことを聞く。

「まず、どこへ行けばいい？」

「そうじゃな。まず、グラナダルの村を抜けて、街へ行くとよからう。街には剣士が多い。車輪の戦士は、あるいはその中にいるやもしれぬからのう」

「わかった」

「ベルナデットをつれていくかね？ あれは”魔”にはよく反応する。光の力が戻りつつあることを敵も承知じゃ。油断禁物、用心に越したことはない」

昨日、道案内をしてくれた妖精を思い出し、ルシータはぎこちなく微笑んだ。

（冗談じゃない。あんなおしゃべりな妖精——こっちが疲れちゃう。それにあの紫色は目立ち過ぎるでしょうが）

「悪いけどボール、できればひとりで捜したいの。大丈夫、危ない真似はしないから」

パールは肩をすくめただけで、それ以上何も言わなかった。

ルシータはくすんだ小豆色のマントを羽織りなすと、「じゃあ」とパールに手を挙げて歩み出す。

ひるがえるマントの裾に朝露がきらりと光り、パールは目を細めて、そのシワだらけの顔に笑みを浮かべた。

朝は気持ちよく晴れていたのに、村を抜ける頃にはいつの間にか空は灰色に変わっていた。

その雨を誘うような陰気な空気のせいか、街に入ったとたん異様な臭いが鼻につき、ルシータは顔をしかめた。

周囲を見ると、とにかく汚い。

浮浪者のような男どもが、ところかまわず痰唾を吐き、くだを撒き散らしているのだ。

おそらく路地には汚物が捨てられているだろう。

そんな臭いにも慣れっこなのか、大勢の男たちが道端や塀の上でボロにくるまつたまま平然と寝ていた。

歩いているのは野良犬くらいだ。

『うえーっ。きつたないわね。ひどいところ！』

「?!」

ベルナデットの声だ。——どこから？

『ごめんなさい、ついてきちゃった』

マントの裾のあたりが光ったと思うと、そこから半透明のベルナデットがあらわれた。

顔や髪、体の輪郭はぼんやりとわかるけれども、色がない。

『大丈夫、他の人には見えないわ。安心して』

「なっ、何なのよっ。これはっ」

はっと気がつくのと、近くで寝ていた男が怪訝そうに見ている。
野良犬が唸り出したので、ルシータは慌てて角を曲がった。

「もう、驚かさないでよ。……仕方ない。お願いだから、いい子にしてて頂戴」

『オツケー……あっ、さっそく何か感じるわ。あの窓』

斜め向かいに窓が見えた。

控え目に開けられたその窓からは、まだ昼もずいぶん前だというのに肉の焦げる臭いやテキーラ酒の強い香りが漂ってくる。

ルシータはその窓からそっと中をうかがい見た。

「ただの酒場じゃない。ベルナデット、何を感じるの？」

『わかんない。わかんないけど、ルシータ、何かあなたに関係することよ』

——また謎か。ルシータはため息をついた。

光に呼ばれたときから、ルシータにはわからないことだらけなのだ。

わかってるのは、考えても仕方がないということだけ。
ベルナデットを疑っても意味はない。

「じゃあ行くしかないわね」

言うなり、扉を開けて入っていった。

すると、狭い店中で一塊になって騒いでいた男たちが、ルシータ

の姿を見て一様に振り向き、じろじろと眺めた。

7・ 街（グラナダル）の男

『ルシート、気をつけて——結構嫌な感じ……』
「わかってる」

「よお、おネエちゃん。勇ましい格好をしてるじゃないか。おれたちと飲むか？」

こういう場合は無視に限る。

店の女が側に来て、男たちの冷やかしかわしながらルシートをテーブル席に案内した。

「あんた何にする？　ちようど鹿の肉が焼けたところだよ」
「いえ——パンと、^{クラレット}葡萄酒を一杯」

一人の男がルシートのテーブルにやってきて、赤い顔でにやつきながら席に着いた。

「なあ、オレ、あんたを知ってるぜ。女剣士ティアナだろう？　あんたには儲けさせてもらったよ。礼に一杯おごるぜ」

ルシートは目だけを上げて男を見る。

眉毛が濃く、髭は少し生やしているが、瞳の大きなまだ若い男だ。見覚えは、まったくない。

だが次に聞こえた声には聞き覚えがあった。

「ティアナだと？　こりやまた妙なところで会うじゃねえか」
「ディエゴ！」

それは死神ディエゴ、サイラスの宿敵だった剣闘士だった。サイラスは、ディエゴとの対戦で傷を負い、それが元で亡くなったのだ。

「おれの街に何しに来た？」

そのときルシータは、サイラスが「北は不吉だ」^{グラナダル}と言っていた意味がわかったと思った。

^{グラナダル}ここは、^{ディエゴ}死神の住む街だったのだ。

ルシータは、椅子を後へ倒す勢いで立ち上がりマントをさばくとしなやかに抜いた剣先をぴたりとディエゴに向けた。

当然その場は騒然となる。

誰もが女剣士の殺気を感じて、半身を引いていた。

「騒がないで！ わたしもこの男もれつきとした剣闘士よ！ さあ、ディエゴ。わたしと勝負するのね。逃げは許さない」

ひとりディエゴだけは、愉快そうに髭の下から白い歯を見せている。

「サイラスの敵討ちか。よせよ、怪我じゃすまねえぜ」

革の指なし手袋をした手を目の前でひらひらと振った。

「——覚悟！」

そのとき、剣を振り下ろそうとしたルシータの腕を、ぐっとつかんだ男がいた。

ルシータとて剣士だ。

まさに振り下ろそうとしていた腕の力は相当なはず。

だが男の手はそれをがっちりつかみ、止めたのである。

「くっ……！」

つかまれた腕は微動だにしない。

ルシータは相手をぎっと睨みつけ——

だがその目を見て魔力にかかったように、闘志は消えた。

「やめるんだ」 相手は静かに言った、「ここは闘技場ではない」

声と同じく、彼は容姿も繊細だった。

肩章つきの黒の衣装に身を包み、彫像を思わせる整った顔を、絹糸のごとき見事な赤毛がふちどっている。

長い睫毛の陰影が際立たせるのは、深い悲しみ——
ルシータは一瞬、それを感じた。

「ほう、これはこれは。ダークキングダムの子隊さんじゃねえか。ようこそ、こんなしけた酒場へ」

ディエゴが言うと、店の女が舌打ちし、「しけた、は余計だよ！ 死神ディエゴ！」と彼に向かって指を突き出す。

「ダークキングダムの兵士——？」
背後でベルナデットが悲鳴を上げたのがわかった。

彼はルシータの腕を放すと、また元のテーブルへと戻り、何事もなかったかのように杯を口に運んだ。

しばらくの間、店中が静まり返る。

誰も、彼がそこにいたことを知らなかったようだ。

「ディエゴ、勝負はお預けよ。首を洗って待つてなさい」

『ルシータ、だめだったら。ルシータ！』

妖精が止めるのも聞かず、ルシータは兵士の側へ行こうとする。
が、強い力で肩をつかまれた。

「邪魔しない約束でしょ、ベルナデット！」

「誰だつて？」

肩をつかんだのはディエゴだった。

半透明のベルナデットはその後ろではららと見ている。

「おい、おれはおまえが気に入ったぜ。どうだ？　一緒に飲みなおさなねえか？」

ルシータは思い切り睨みつけると、ディエゴの手を払った。

「気持ちわかる。だがサイラスだって覚悟はしてたはずだ、剣闘士の宿命だつてことはな」

「わかつてるわ」

イライラと、ルシータは言った。

「わたしだつて覚悟はしてる。だけど、あんたがサイラスを殺したつてことにはわりはない。だからわたしがおまえを殺すわ」

「生憎だが、おれは女との試合はしない。『死神ディエゴ』の名がすたるからな」

「じゃあ名を変えろといい、『臆病者ディエゴ』ってね」

捨てゼリフを吐いてブライトキングダム of 戦士の方を向いたルシータは、そこにすでに彼の姿がないのを見た。

「見失ったわ。あんたのせいよ！」

追うように酒場を飛び出したが、すでに兵士の影はない。

『だめえ、ルシータ！　闇の男なんか追っちゃあ！』

くるりと半透明のベルナデットを振り向くと、ルシータは声を荒げた。

「なぜ闇の気配に気づかなかったの？　全然役に立たないじゃない

「！」

「おい、さっきから誰に話してるんだ？」

見ると、にやにやとディエゴが扉からのぞいている。

「おまえがどこに行くか知らんが、いい暇つぶしになりそうだ——
おれもついていくな」

8・失態

「じょ……冗談じゃないわ！来るなっ」

言っなり全速力で駆け出した。

「おいっ、待てっ！」

誰が待つもんですか、とつぶやきつつ、広い通りを走り抜け、あとは狭い路地を縫うように行く。

橋の下まで来て、ようやく足を止めた。

辺りを見回したが、やはり寝転がっている浮浪者以外に歩いている者はいない。

それにしても、デイエゴは完全にまいたようだが、ベルナデットはちゃんといるのだろうか？

「まあいいか。いてもいなくても同じだし」

そのときルシータの右肩を誰かが叩いた。

驚いて振り返ると、そこにはなんと、先ほどの酒場で最初に声をかけてきた若い男が立っているではないか。

「あんた、足も速いなあ。けどオレをまくのは無理だったようだぜ」

「何の用？」

剣の柄に手をやると、男は慌てて言った。

「待てよ、さっきのダークキングダム of 兵隊に会わせてやる」

「何ですって？！」

ダークキングダム of 兵士よりも、先に『金の車輪』『銀の車輪』の二人を捜さなくては——そう思いつつ、あの赤毛の男に会いたい気持ちは強かった。

あえて、これが敵を探るチャンスかもしれないと考えたかった。

「オレの名は、ブラツキー。早足のブラツキーと呼ばれてる」

ブラツキーは握手しようと手を差し出したが、ルシータは握らなかった。素知らぬ振りをし、

「この街にはダークキングダム of 兵士がうろついているの？ ダークキングダムって、そんなに近い国だったかしら」

すると彼は首をすくめ、

「いや……ダークキングダムは、もっとずっと北だ。普通の人間は誰も行ったことがないほど、な。」

そもそもあの王国自体、伝説のようなものだ。あそこの民は、ほとんど王国からは出ない、いや出られない……。

けどここ数ヶ月、頻繁にあの国の兵隊を見るようになった。やつら、あちこちの村や町に行ってるみたいだぜ。

オレはやつらがこの街でたむろしている場所を知っているんだ」

ルシータは爪を噛んで考えた。

これは光の封印が解かれたことと関係しているのだろうか。

たしかバールも言っていた、光の力が戻りつつあることを敵も承知だと。

敵は敵で、光の勢力を探ろうとしているのかもしれない。

ブラツキーが案内してくれたのは、鍛冶屋の小屋だった。

壊れた剣や、古びた車輪などが散乱している。

「ここで待ってりゃいい。やつら、ここを根城にしているんだ。きつとあの赤毛の兵隊も戻ってくる」

結局ルシータは、鍛冶屋の向かいの路地に身を潜め、待つことにした。

ブラツキーが少しの間付き合おうと言って、どこからかテキーラを

持ってきたのを二人で飲んだ。

日の当たらない路地にじっとしている身にはありがたいことだ。

——だがこれが、とんだ落とし穴だったとは。

いつ意識を失ったか、わからない。

気がつけば、ルシータを呼ぶ心配そうなベルナデットの顔があった。

ちゃんと色がある。

「ベルナデット……？」

「ルシータ、大丈夫？」

目の前ではディエゴが、黒装束の兵士たちを相手に派手に暴れている。

ディエゴの雄叫びに混じって、剣が風を切る音と、肉を切裂く音が交互に唸りを上げていた。

ルシータ自身は手足や胴を縛られ、鍛冶屋の小屋の土間に転がされていたのである。

隣には、ブラツキーが光の聖剣を握り締めたまま、長々と伸びていた。

兵士たちをすべて倒すと、ディエゴは「大丈夫か」と聞きながら、ルシータの縄を切ってくれた。

そして、

「女剣士ティアナともあるう者が、だらしねえじゃないか。油断したな」

怒っているのか皮肉っているのかわからないような言い方をした。

それから隣のブラツキーに蹴りを入れると、

「そいつがおまえを騙したんだぜ。おまえを闇の兵士に売ろうとしやがったんだ」

吐き捨てるように言った。

まだ頭がぼうつとしていたが、ルシータはできるだけ機敏に身を起こすと、ブラツキーから光の聖剣を取り戻して自分の腰に佩^はき、
ディエゴがブラツキーを縛り上げるのを漠然と見ていた。

「こいつが、わたしを売ろうとしたって？」

「本人に聞いてみな」

ブラツキーの胸元を鷲掴み、二、三発平手を食わせる。
と、ブラツキーは気がついて、めそめそと泣き出した。

「許してくれえ……ダークキングダムに興味を持つ人間を密告すれば、いい金になるんだ。本当に悪かったよ……」

がんがんする頭を押さえつつ、ルシータは聞く。

「剣をどうするつもりだったの？」

「あいつら、その剣にだけは触れられないって……だからオレがもらったんだ。宝石がいっぱいついてるし……売りさばこうと思ってさ」

9・雷雨の中で

その答えにため息をつく、今度はベルナデットの方を向いた。
「で？ あんたはどうしてたわけ？」

妖精はもじもじしながら、ルシータとディエゴをちらちらと見る。
「——ルシータが走って行っちゃったとき、光る星があらわれたの。
それで、『このひとを連れて行きなさい』って、啓示が」

「ディエゴを？」

「おれも妖精なんぞ、初めて見たぜ。——とにかく、ここへ来たのはおれの思ひじゃないからな。だが、もしおれが来なかったら、今頃おまえはサイラスと再会してたかもしれない」

今度こそルシータは、頭の痛みをこらえきれず、両手で抱え込んだ。
「だ。」

何たる失態、よりもよって、ディエゴなんか命を助けてもらうとは。

「お礼は言っわ。借りもいつか、返す。でもこれでわたしがあんたを許したとは思わないで」

立ち上がり、兵士たちを一人一人見て回った。

六人の兵士が倒れていたが、その中にあの赤毛の兵士はいない。

「よかるう。なら今ここで、相手になるぞ」

ディエゴの声に、ルシータは振り向いた。

「借りは考えなくてもいい」

ターバンの下から、ディエゴの金の巻き毛が風になびいている。

堂々たる体躯。戦士の体だ。

もし、むさ苦しい髭がもう少し短く刈り込んであれば、きっと好ましい美男子なのだろう。

彼は再び剣を抜いた。

「さあティアナ、剣を抜け。かかって来い」

そのときだった。

一瞬にして空が濃い灰色になると、稲光が閃いた。

そして轟音が響くと同時に、激しい雨が降り始めた。

「さあ、抜け！」

全身を滝に打たれたように濡らしながら、ルシータは剣を抜いた。

正直、目もまともに開けられないほどの豪雨である。

それでも後へは引けない。

相手も同じ条件なのだから。

ルシータは自慢の俊足でディエゴの左脇に斬り込んだ。

だがそれは相手の剣に弾かれ——その衝撃は、女同士では感じ得ないほどだ。

腕への衝撃に、思わず声が出た。

力や技ではディエゴに勝てないとはわかっていた。

自分がディエゴに勝るものは、身の軽さと速さしかない。

再びかかっていったルシータは、息もつかせぬ早業を連続して繰り出し、攻めた。

だが相手は一度として受け損ねることがない。

ばかりか、こちらの力を利用することで自分の力は最小限に抑えている。

案の定、雨の中でルシータの体力は尽きてきた。
息が上がり、脚に震えが来た。

「どうした、それで終わりか！」

ついに死神ディエゴが最後の一撃を与えようとしたとき、そのとき、ルシータの眼にすさまじい炎が燃えた。

——待っていた！ まさにこの一瞬を！

そう、ルシータは自らを餌にして油断させたのである。

ディエゴの上からの一撃をぎりぎりのところですから何とかかわすと、体全体をディエゴの背中に乗せるようにして剣を突き下ろした。

地面に押さえ込まれたディエゴの頬をかすめ、光の聖剣が地に突き立つ。

「ルシータが勝った——！」

雷鳴が低く空を震わせる中、両者とも地に伏せたまま動かなかった。

が、ディエゴが右手の剣を捨てると、勝負は明確になった。

「おまえの勝ちだ、ティアナ。止めを差せ」

だがルシータはくると立ち上がると、

「これで貸し借りはなし」

そう言って、剣を鞘に収めた。

「ベルナデット、行きましょう。今度こそ、光の戦士を捜しに」

ディエゴは雨の中、地面の上に座ると肩で大きく息を継ぎ、ターバンと指なし手袋を脱いだ。

頭上に閃光が走る——と、何とそれは、ディエゴの剣目がけて落ちてきたではないか。

「きゃあああつ——！」

耳をつんざく大音響。

ルシータはベルナデットをかばい地に伏せたが、そのとき、美しい音楽のような、エコーする声を聞いた。

『この者に光の剣を与えます。金の光がこの者に集うよう——』

「ルシータ、今の声聞いた？ あれは天使ソワールよっ」

ベルナデットがルシータの腕の下で、叫びながらジタバタしている。

「天使ソワール？」

はっとして顔を上げると、ディエゴが昏倒しているのが見えた。思わず駆け寄り、体を揺する。

ディエゴは剣を捨てていたから、雷に撃たれたわけではない。

「ちょ……ディエゴ！ しっかりして！ ディエゴったら」

「ルシータ、天使ソワールが来てくれたわ……！ 光の剣を与えるって言ってた……」

「って、これ——」

二人は顔を見合わずにはいらなかった。

先ほどの鉄色のディエゴの剣が、今は黄金色に輝いている。

「これが光の剣……ということとは？」

「見て、ルシータ！ 彼の手！」
「え？」

ディエゴのむき出しの右手の甲――。

そこにはくつきりと、まさに『光の戦士』のあかしである車輪の
あざが浮かんでいた。

10・戦士の記憶(1)

落雷の後、激しい雨はぴたりとやみ、晴れ間とまではいかないけれども、明るい灰色の空が戻ってきた。

まだ呆然とするルシータの耳に、縄でぐるぐる巻きにされたブラツキーの哀れっぽい声が届き、「お詫びにどんなことでもする」と言う彼にディエゴを荷車に乗せて運ばせ、一行は村外れのバールの小屋まで戻ってきた。

その道々、ブラツキーはひとりでしゃべっていた。

「じつはあの鍛冶屋は、オレのおやじがやっていたんだ。オレも跡を継いだんだが、十年前、ブライトキングダムが滅ぼされてから、剣や槍といったまがましい武器を作る仕事しかこなくなった。

おやじはもつぱら、馬車や荷車の車輪を作っていたんでね。そういうものは作りなくなかったみたいだし、オレにも作らせなかったんだ。おかげで仕事はなくなってしまった」

ブラツキーの口からブライトキングダムの話が出たのには、ルシータもベルナデットも驚いたが、きっとこれは偶然ではないのだろうと、二人顔を見合わせて目配せしあったりした。

「今、お父様はどこに？」

「わからない。ある朝目が覚めたら、消えてた」

もうずいぶん前のことなのだろう。あまり落胆もなく彼は言った。「オレたちだけじゃない。街も、街の人間も変わったぜ。皆こそこそあこぎな真似をするようになったし――」

あんたも見ただろう、あの腐りきった街を。昔はもつと綺麗な街だった。窓辺には花があふれ、女も子供もみんな笑ってた。今じゃ

誰も笑わない。

……オレは思っただ。それは、ブライトキングダムがなくなったからだってな」

「ブライトキングダムを知ってるの？」

「ああ。ブライト王とアルタミラ妃の結婚式のと、グラナダルの騎士たちも大勢出席したからな。おやじの車輪が彼らの馬車を運んでいったんだ」

ブラツキーは、そう嬉しそうに言った。

ベルナデットが小声で、

「ルシータ、あなたが王妃様の妹だっけ白状しちゃいなさいよ」と言う。

だがルシータは首を横に振った。

「まだやめとく。そんな気分じゃないし」

小屋に着いたとき、パールはもうわかっていたようにさらりと言った。

「おお、この男が『金の車輪』かね？ 案外早く見つかったのう」
残念ながら、ディエゴのような大男をパールの小屋に入れるのは不可能だった。

荷車はそのまま彼のベッドになり、自然の枝葉が屋根や壁になった。

「寒さは多少、我慢してもらわにや」

と、パールが言ったとき、

「うおおおーっ！」

突如ディエゴが叫んで上半身を起こした。

「ディエゴ、しっかりして。大丈夫だから。ディエゴー！」

「ディエゴ？ —— 違う、おれはディエゴじゃない。そんな名じゃない、おれは……おれは」

ブラツキーは丸い目をより丸くし、

「大変だ。雷のせいで狂っちまった」

暴れ出すディエゴに備えて、木の後ろに姿を隠す。

逆に、杖を持ったバールが一步進み出て言った。

「……ブライトキングダム記憶が戻ったようじゃな」

バールの言葉にルシータははっとした。

ではディエゴも、かつてはブライトキングダムで暮らしていた光の住人なのか？

「おれは……おれの名は、レギオンだ。ブライトキングダムの戦士だった——」

「レギオン?!」

今度はルシータが大声を出し、側にいたベルナデットが引っ繰り返った。

「レギオン? レギオンですって?! ——もしかして、アルタミラ姉さまの恋人だった……」

ルシータも今、はつきりと思い出したのだ。

レギオンという名の光の戦士のことを。

あの森で見た戦士の幻影——彼こそが、レギオンその人であろうとは。

ブラツキーも木の陰でぶっ飛んでいた。

「アルタミラ姉さま、って……! あんた、あのアルタミラ王妃の妹かよ?!」

どうやら、次々と驚きの連鎖が起こっている。

ディエゴのそれも半端ではない。

突き刺すような視線でルシータの顔を見、それからぽかんと口を開けた。

「ルシータ……か？ 女剣士ティアナが？」

11・戦士の記憶(2)

ひとりで目覚め、徐々に現実を理解していった自分とは違い、デイエゴが狼狽しているのが一目瞭然だ。

大男の彼が、今は小さな子供にさえ映ってしまう。

それにしても、彼が自分^{ルシータ}の名を思い出してくれたことが、なんだか妙にこそばゆかった。

サイラスのことを思うと複雑な気持ちだったが、デイエゴはレギオンであり、確実に自分の過去とつながっていたのだ。

そしてもうひとつ思い出したこと——自分はレギオンに憧れていたのだ……。

剣が好きだったのは彼の影響であり、光を散りばめたような戦帷子を身に着けた女戦士になりたいと願っていたのだ。

まだ幼い少女が戦士と恋をしたいと願うならともかく、戦士になりたいと願うなんて、ずいぶん変わった女の子だったろう。けれども記憶を失っても、やはり自分は剣士になった。

偶然なんかじゃない。

デイエゴ——いやレギオンは、ふうーっと思を吐くと、また荷車に沈んだ。

「何てことだ……今ごろ記憶が戻るとは。ルシータ、なぜおまえがここにいるんだ。なぜおまえが女剣士ティアナに？」

「あなたと同じよ、レギオン。わたしも気づいたらここにいたの——わたしの役目は、ダーク王を倒し、ブライトキングダムを取り戻すこと」

そのとき初めて、レギオンは、ブライトキングダムが滅びたというこの意味を思い知った様子だった。

両手で顔を覆うと、しばらくは言葉も出ないまま、じっとしていた。

「アルタミラは……死んだのか」

「戦士よ、残念ながら。王も王妃もお亡くなりじゃ」

神妙なバールの声のあとに、ブラツキーが鼻をすするのが聞こえる。

ルシータは、だが、力強く宣言した。

「二人の子、ライレーン王女が生きているわ。ダーク王に捕らえられている。レギオン、一緒にライレーン王女を救いましょう。闇の権力を倒して」

それでも、レギオンは顔を覆ったままである。

やがて彼は、絞り出すように言った。

「おれはアルタミラに裏切られて、もうブライトキングダムにはいられないと思った。彼女が王妃となったその日、おれは国を捨てたんだ。……いまさらおれに、光の戦士の資格など」

「あるわ。その右手のあざが証拠よ。その車輪のあざ。それにこれを見て」

そう言うところルシータは、黄金色に輝く剣を差し出した。

「これはあなたの剣よ。ディエゴだったあなたの剣に稲妻が落ち、光の剣になった——」

横から、ベルナデットもひょいと顔を出し、

「天使ソワールからの贈り物よ」

もう森には闇が訪れ、焚き木の火だけが真っ赤に燃えてあたりを明るく照らしている。

「光の剣……」

ためらいながらもそれを手に取ったレギオンを見て、ルシータの心にも熱い炎が立った。

「レギオン、あなたは『金の車輪』なの。あとひとり、『銀の車輪』を捜さねばならないわ。わたしたち三人が力を合わせてこそ、光は取り戻せるのよ」

バールがウインクしながら口をはさみ、

「どうだね。そろそろその荷車から降りて、小屋へ入らんかね。老骨に寒さはこたえるわい。温かい檸檬酒があるんじゃ、皆でどうかのう」

「あ、あの、ちょっと」

ブラツキーが何か言いたそうだ。

「あの……オレも関わらせてくれないか、その、ブライトキングダムの復活に。街に帰ったって何にもない。それより今の話を聞いて、オレも王様やアルタミラ様のために何かしたいんだ。オレは早足だし、早耳だ。きっと役に立ってみせる」

一瞬、ベルナデットとバールは顔を見合わせ、それから二人同時にルシータを見た。

ルシータはひとつに括った亜麻色の髪を後へはじくと、少しはにかんだように、

「昼間のあんたの話を聞いて、黙っていたのは悪かったわ。ブライトキングダムがなくなつて、皆が笑わなくなつたっていうあんたの考えは正しいと、わたしも思う。」

—— 一緒に手伝つて」

こうして五人は、樹木に包まれたバールの小屋に入ってしまった。

12・二つの王国

北の地には、かつて、光と闇を支配する強大な王国が存在した。

だがその王国を治めるアルファード王が、二人の息子を分け隔てなく愛したため後継者をひとりに決められず、光と闇をそれぞれ分けて統治させることにした。

すなわち、闇を統治する権利を思慮深い兄のヘンザーへ、光を統治する権利を公明正大な弟のルスセルクスへ与えたのである。

こうしてできあがった『ダークキングダム闇の王国』と『ブライトキングダム光の王国』の兄弟国において、二人の王はそれぞれ「ダーク王」「ブライト王」と呼ばれ、父王の下で定かなもとバランスを保ってきた光と闇は個々の勢力として、解き放たれた鳥のように羽ばたき始めた。

とはいえ、兄弟王は多くの守るべき条約を結び、互いをよい意味で牽制しあっていたこうと努力を惜しまなかったので、しばらくは平和が続いていたのである。

ダークキングダムの王妃フレデリカが、ブライトキングダムのひとりの絵師と恋におち、追い詰められて自害するまでは――。

ダーク王ヘンザーの狂気はここから始まり、その歪曲した闘争心ゆえに、ついにブライトキングダムを暗黒の力で攻め滅ぼしてしまったのだった。

今もまだ、王の心に王妃の最期の声がよみがえる。

「あなた、許してください。わたくしはもう、この国で生きていくことはできないのです。」

あなたは強いお方、闇の重さにも耐えられるでしょう。闇を愛することもできるでしょう。

けれどわたくしには耐えられなかったのです。わたくしには、光をくれるこの人が必要でした。

たとえ今、あなたに追い詰められこのような最期を遂げることになっても、闇の中で生き続けることはできません……

さようなら、あなた。どうか許してください。そしてどうか、アリーナにも——」

静まり返った宮殿の玉座にいたる廊下に、ずらりと闇の兵士たちが居並んでいる。

かつてはブライトキングダム^{ドム}の王の間でもあったその高い天井の窓からは、もはや一筋の光も入っては来ない。

それどころか闇はますます濃くなって、この国を支配しているようであった。

今、この闇の王は、四人の賢者を両横にはべらせ、陰鬱として玉座についていた。

数ヶ月前、賢者から光の封印が解かれたことを知らされたからである。

かつては自らも賢人であったはずの王の鼻から上の顔は、黒光りする異様な鉄仮面で覆われ、どんよりと濁った瞳がそこからのぞいていた。

「王よ、お感じになりますか……我らの目の届かぬところで、光が身をよじっているのを」

「王女ライレーンの目覚めを、光の精霊どもが誘っているのです」

「光の精霊によって王女の眠りが覚めるとき、光もまた完全にかつての力を取り戻し、逆に力の弱まったこのダークキングダムを飲み込んでしまおうでしょう」

「その前に何としても、我々が王女の眠りを解き、王女を屈服させねばなりません。そして光の妖精たちを闇の支配下におかねば」

賢者たちは、頭からすっぽりと包まれた黒づくめの身を奇妙にくねらせながら、口々にそう進言した。

そのとき広間の燭台の炎が、ひとりの男の入場を告げるかのようにふわりと揺れた。

黒マントに全身黒の装束。

いかつい肩章までもが黒であるが、その上にかかる髪は見事な赤毛である。

彼は優美な姿勢でまっすぐに玉座へ向かうと、王の前でひざまずいた。

13・闇の王女

「ハラートか」

物憂げな、それでいて威圧感のある重厚な声が王の口から発せられ、戦士は、「は」とさらに低頭した。

「どうだ、我が戦隊長。言うことがあるかね」

すると彼は微動だにせず、ただ淡々と申し述べた。

「じつは今日、グラナダルで我が部下が数名、何者かに斬られましてございます。さらに、激しい雷雨の後に光の精霊の気配が――」

おおおーっ、と賢者たちが声を立て、まるでカラスを思わせる声で騒ぎ出す。

ダーク王は、しかし、彼らを見捨てるかのごとく、戦隊長に言った。

「もしや、光を導く者があらわれたか。ハラートよ、光の攻勢が我が王国に及ぶか及ぶまいかは、おまえにかかっておる。心してかかるように」

王の胸の上で、三日月型のブローチが剣（きん）のようにぎらりと光ったのが、ハラートにも見えた。

「ははっ！」

すでに本性を露にし、鋭いくちばしを大きく開け、頭の黒い羽根を立てながら、興奮状態で議論を続けるカラスの精霊たち――これが四人の賢者の正体である――と、その間で、やはり物憂げに王座の肘についた腕を曲げ、その手に顎を寄せたままのダーク王を残し、ハラートは退出した。

玉座の間を出て、私室に至る長い廊下を歩きながら、ハライトは今日いた街、グラナダルのことを思い返していた。

（あの街には剣士が多い。だが、誰も彼も……女でさえ喧嘩っ早く野蛮で、それこそ光の精霊と関係を持っているような人間は見当たらなかった——）

しかし、部下が殺られ、光の精霊の残した波動があった。

（いや、やはり見過ごしたのだ）

それからふと、酒場で会った女剣闘士のことを思い出した。剣闘士というだけあって、さすがに強い目をした女性だった。

亜麻色の長い髪を後ろでひとつにした顔の輪郭は、誰かを思い出させるようでもあったが……。

そのときハライトは、自分を見つめる厳しい視線に気づき、足を止めた。

瞳を伏せたまま、声をかける。

「わたしに御用でしょうか、アーリーナ王女」

たった今通り過ぎた柱の影から、長身の乙女が姿をあらわした。黒髪を美しく結い上げ、黒いドレスと宝石に実を包んだ美姫である。

ハライトを見つめる目はぱちりと大きく、白い陶器の肌に血のように鮮やかな小さめの唇が際立つ。

が、その声は決然として、なぜか蔑みみづさえはらんでいるようだった。

「お父さまはおまえを頼りにしているけど……どう？ 光の力を抑えることができて？」

「わかりません。やってみなければ」

そのとたん、蔑みは怒気に変わった。王女の白い^{じだ}耳朵が赤く染まる。

「——わたしが気づかないとも思っているの、ハラート。おまえの目には、迷いがあるわ。お父さまはごまかせても、わたしはごまかせないわよ」

「迷いありません」

「嘘……！ おまえはいつも迷ってる。まるで今、自分がどこに立っているかさえ、わからないように」

「わたしは闇の戦士。ダーク王にお仕えすることに迷いなどありません」

アリーナ王女の感情に流されることなく、戦士は言った。

「そう……おまえは命令されることしか知らないのね。だったら、わたしが命令してあげる。わたしの目を見なさい！」

王女は彼の前に立つと、顎を上げ、ぐっと挑むような瞳を向けた。ハラートの睫毛が上がり、水のように澄んだ青い瞳が王女のそれと合う。

冷たい火花がぶつかり合い、まるで「かちり」と音がしたようであつた。

たちまちにして、アリーナの瞳が折れる。

今しがた怒りに燃えあがっていた瞳は、もう潤んでいた。

（ハラート……！）

声にならない声が喉もとまで出て、また沈んでいく。

「失礼します」

アリーナがすぐろつとする前に、戦士はそう一言だけ言つと、彼女の脇をすつと通り過ぎていった。

何にも決して、心動かされなかったかのように。

（ああ、ハラート——！）

アリーナの胸は爆発しそうだった。

（わたしは知っているわ……十年前、お父さまがブライトキングダムを攻め滅ぼしたときからおまえが変わったのを。なぜ？ 何があったの？ わたしにそれを教えて）

ハラートは自分の想いを知っている。

それなのに無理に冷たい態度をとつて、アリーナを苦しめる。

ついにアリーナの頬を涙が伝い落ちた。

「おまえはずつと昔からわたしの側にいた……わたしを守ってくれていた。」

たとえそれが、お父さまの命令であつたとしても——わたしは嬉しかった」

広い廊下にはもう、誰の気配もしなかった。

14・銀色の光

自室に帰ろうとして、ハライトは考えを変えた。

そのまままっすぐさらに廊下をゆき、螺旋階段を上って、この城でもっとも高いところへ出た。

高いところ——といっても、そこから見渡せるのは、薄暗いダークキングダム森ばかりだ。

かつて、そこがブライトキングダム森であったころは、風が通り、水が流れ、おそらく光り満ち輝いていたであろうが。

空には灰色の雲が重く垂れ込め、ときどき真っ黒な雲が渦を巻く間を稲光が走る。

ブライトキングダムが滅び去り、光と闇の均衡が破られてから、この国の空は晴れたことがないのであった。

ハライトは左手を目の上に当てると、しばしそうしていた。

すると、遠い日の記憶がまぶたの奥に浮かんできた。

それは母の記憶である。

——「ハライト、これをおまえにあげるよ」

——「ペンダント？……車輪だ。わあ、光にきらきら輝いて、きれいだね」

——「そう、銀の車輪——。おまえは、大きくなったら光を救う戦士になるの。これはその印なのだよ」

——「光を救う、って？」

——「今から何年かしたら、光は闇の中に沈むのよ。おまえはとうさまと同じ、闇の戦士の鎧を着て戦うだろうけど……かあさまの国を滅ぼすために」

——「ぼくはそんなことしないよ！ かあさまの光の国を滅ぼす

なんて、絶対にしない！」

——「いい子ね、ハラート……」

そう言って自分を抱き締めたときの母の悲しそうな瞳を、ハラートは忘れられはしなかった。

きっと今の自分の瞳は、母の悲しさをそのまま映しているに違いない。

そうして『予言』どおり、本当に光が闇に滅ぼされてしまったとき、ハラートは愕然としたのだ。

同時に、母の言ったことが日に日に心の中に^{おり}澱のように沈んでいくのが感じられた。

『光を救う戦士になる——』

（けれど、わたしはダークキングダムの戦士だ。王の信頼も厚い戦隊長だ。それにわたしは、アリーナを……）

森の瘴^{しづ}気が銀色のもやと化して、高い木々の上にまとわりついてるのが見えた。

彼は首の鎖をたぐりよせ、懷から銀の車輪を取り出すと、手の中で転がした。

——どちらを選ぶべきなのか。闇の戦隊長か、光の戦士か。

（わたしはダークキングダムの人間だ。しかしわたしの体の半分には、ブライトキングダムの血が流れている——）

「いったいいつから、世界はこんな風になってしまったんだろう……
……いったいいつから、日の光が射さなくなってしまったのか。空は怒りに満ち、森が死につつある……これは誰のせいなのか」

認めたくない真実。

——『おまえはいつも迷ってる。まるで今、自分がどこに立っているかさえ、わからないように』

（アリーナは何もかも見通している。そのとおりだ、わたしは……）
ハラートは力なく頭を振った。
やはり結論はでない。

ペンダントを服の中に戻したとき——突然の強い光が、頭上からハラートを照らした。

「な……！」

咄嗟に手で目を覆ったハラートは、今度は胸に焼けつくような熱さを感じ、あわてて黒服の前を開くと胸をはだけた。

愕然としないではいらなかった。

自分の胸に、車輪のペンダントヘッドが銀色に光りながらのめり込んでゆくではないか。

あつという間にそれは消え、胸にはただ、車輪のあざだけが残った。

『ハラート、ハラート——』

啞然としていると、天空から降り注ぐように、エコーする美しい声が響いてきたのだった。

はっとして見上げた天上からは、光が小さな無数の水玉になってゆつくりと自分の方へ降ってくる。

『そなたに光の剣を与えます。銀の光がその身に集うよう——』

なんと、光の玉は、ハライトの腰の剣に集中するように降ってくるのであった。

そしてハライトは、いつしかその剣がまばゆいばかりの光を放っているのに気づき、うろたえた。

いつの間にか、あたりは元の薄暗さに戻っている。

（……夢か？ いや、しかし——）

ハライトはおのれの剣を見た。

夢ではない証拠に、それは闇の中で、不似合いなほどの光を放っている。

銀色に輝いているのだ。

さらに胸のあざを見ると、まるで銀糸を縫い込んだように、それがちかりと光るのがわかった。

『グラナダルへ行きなさい。バールの森へ——』

頭の中で、あの美しい声がし、ハライトは思わず頭を抱え、膝をつく。

心が決まったわけではなかった。

ただひとつだけ、はつきりとしていことがある。

もう闇の国にはいられない。

光はダーク王の国に存在するわけにはいかぬのだ。

——『おまえは、大きくなったら光を救う戦士になるの……』

今再び、母の声が心の中に響いた。

15・水晶に映る影

「ねええ……パール。パールったらあ」

今日は外はよく晴れて、空気のおいしい一日である。

にもかかわらず、小さなランプが灯されたきりの薄暗い小屋の中で、パールは先ほどから水晶玉とにらめっこをしているのであった。ときおり呪文を唱えては水晶をのぞきこみ、首を横に振りながら青息吐息している。

側ではルシータとベルナデットが見守っていたが、ベルナデットがついに辛抱切れてぐずり出した。

「ねえ、さつきから、なあんにも映らないわよう？」

「しっ！ 静かにしやつ。もうひとりの戦士、『銀の車輪』を捜しておるのじゃから」

それでも妖精は口を尖らせる。

「ソワールは何にも答えてくれないの？ 彼女にもわからないのかな？」

「ベルナデット、パールが集中できないわ。大人しく見てて」

ルシータに諭され、ちよつと肩をすくめて、やっと黙ったベルナデットである。

「水晶というのはの、ずいぶんと気まぐれなんじゃ。……どうも気に入らんことがあるらしいわい」

パールのしかめつらの横で、ふと嬉しそうにベルナデットがルシータに小声でささやいた。

「あなた、水晶に映ったのよ、ルシータ。王様や王妃様や、ライレイン王女様と一緒に」

「わたしが？」

「うん。まだ少女だった」

ルシータは目を丸くした。

少女の自分が、影のように水晶の中に映っていたのかと思うと、不思議な感じがする。それと同時に、自分も懐かしい人たちを見たいと思い、「姉さま……」とつぶやいてみる。

と、そのとき、水晶が白く煙りはじめた。

「おおっ！ 映る、映るぞい……」

水晶の中には、懐かしいアルタミラの姿が映っていた。

まだ王妃になる前の、初々しい姉の姿が。彼女は誰かにやさしく話しかけている様子で、ルシータはそれが自分にだとわかったし、そのときの場面がありありと浮かんでいた。

あのとき、姉さまはわたしの問いに答えてくれていたのだ。

——「どうして王様のところへ行くの？ 姉さまは、レギオンが好きなんでしょう？」

——「そうよ、レギオンを愛してるわ。だから行くの」

——「どうして？ わたし、姉さまはレギオンと結婚してほしい。わたしたちから離れていけないで」

——「ねえ、聞いて、ルシータ。姉さまは光の天使に会ったのよ。天使は言ったわ、レギオンは光を救う戦士になるって」

——「レギオンが？ 光を救う戦士？」

——「そうよ。そしてわたしは光の王妃になって、王女を産むの。レギオンが守ってくれるはずの、王女を」——

ルシータは、両手を握り締めないではいらなかった。

「そうか……そうだったんだ」

「何か気づいたの？ ルシータ」

さっと立ち上がり、「レギオンはどこ？」

バールが言った。

「泉じゃよ」 目は水晶を睨んだままだ。「二人とも、体を洗っているのさ」

そしてルシータが戸口へ走りだそうとした瞬間、今度は裏返ったバールの声が部屋中に響いた。

「これをごらん、ルシータ……！」

水晶の中に、きらめくたくさんの赤い糸が舞っていた。

やがてそれは人の髪となり、後ろ姿のその人物の虚像がくるりと回って顔を見せた。

「この男……！ あのときの戦士だわ、ダークキングダムの男……なぜ彼が？」

『——『銀の車輪』は目覚めました』

水晶から、ついにあの美しい声が聞こえてきた。

『ルシータ、彼を仲間として迎えなさい。彼はもうじきここへあらわれるでしょう』

ルシータも、バールも、ベルナデットも——三人とも啞然としたまま動けなかった。

水晶の中の『銀の車輪』は、あの日ルシータが見たままの悲しみをたたえた目をして、どこか森の中を進んでいる。

黒い闇のような衣装に、さらなる悲しみを包み込んで。

16・別れのペンダント

一方レギオンとブラツキーの二人は、泉で体を清めてからさっぱりと髭まで剃って、新しい衣装に着替えていた。

光が泉にまつすぐに差し込んで水底を照らし、鏡のような水面には二人の姿がくっきりと映っている。

黒くてかたい髪質のブラツキーはより若く見え、髭のなくなった顎は細くてつるりとしていた。

そして濃い金色の巻き毛も豊かな頭髪を後ろで束ねたレギオンは見違えるばかりに清潔感漂う好男子に変身している。

精悍な肉体はそのままだが、剣闘士としての獰猛さは影を潜め、かわりに戦士としての威厳を取り戻しているかのようにであった。

冷たい泉の水でしばった手ぬぐいを髭剃りあとにあてがいながら、ブラツキーがうきうきと言った。

「いやあ、死神ディエゴとこうしてられるなんてな。仲間に自慢したいや」

「その名前はよせ」

上機嫌のブラツキーに対し、レギオンはそうでもないらしい。

「何が何だか……まだわけがわからん」

ブラツキーは、丸い目をわざと大きくすると、

「なぜさ？ あんたは『金の車輪』とかいう光の戦士なんだ。だから闇を倒して光を救わなきゃならない」

「『金の車輪』か。たいそうなことだな」

レギオンは、右手の甲のあざを見ながらつぶやいた。

「アルタミラがないのに、光を取り戻して何になる」

すると、まるで金糸が縫い込まれているかのように車輪のあざが

きらりと光り、それはレギオンに、そのあざがどうやってついたのかを思い出させた。

（——あれは別れの夜だった。アルタミラはおれのところへやってきた……）

「レギオン、これを持っていて。わたしだと思って」

「ペンダント？」

「そう。金の車輪……よ」

「こんなものはどうでもいい、アルタミラ、なぜ王のところへ行くんだ？ おれを愛しているというのは……おれだけを愛していると言ったのは、嘘だったのか？！」

「いいえ、違うわ。あなたを愛しています。だからあなたに託すのよ、わたしたちの未来を」

「どういうことだ。わからない」

「——覚えていて。どこにいても、わたしはあなたを愛しています」

（……アルタミラが去ったあと、おれはアルタミラを、王妃という地位に目がくらんだ裏切り者だと決めつけた。

結局は口先だけの愛だったのだと、はらわたが煮え繰り返る思いだった。

だからペンダントを投げつけたのだ、思いきり）

そのとき壁に当たった車輪が勢いよくはね返り、レギオンの右手の甲に張りつくと、輝き出した。

「?!」

レギオンが驚く間もなく、それは彼の右手の中に吸い込まれるように消えていった。

そうしてあとにはくつきりと、車輪のあざが残ったのである。

「ディエゴ、おい、ディエゴ」

体を揺すぶられて、彼ははっと我に返った。

ブラツキーの手を払い、

「その名前で呼ぶなと言ったろう」

が、ブラツキーはレギオンの方を見ないまま、前方を指さした。

「さっきあそこをダークキングダムの兵隊が……そら！　今、木の影に見えた」

言われて目を凝らす。

そして、自分でもそれを認めるやいなや、レギオンは剣を取り上げ駆け出した。

ブラツキーが抑えた声で言い添える。

「オレ、ティアナに知らせてくるぜ……！」

そして彼も、自慢の早足で小屋へ向かって駆け出した。

17・『金の車輪』『銀の車輪』

自分に向かつて走ってくる男の気配には気づいていたが、いきなり剣を差し出されるとは、ハライトも思っていなかった。

馬が大きくいなないて立ち上がり、ハライトはもう少しで投げ出されるところであった。

「おい、降りろ。ダークキングダムの兵士め。大人しくおれと勝負するんだな」

相手の言葉はまさしく挑発であつたが、ハライトは素直に馬を降り、男と向き合う。

そして言つた。

「ここは、バールの森か？」

男はにやりとすると、「ほう、あんたか」と言い、いったん剣を引いた。

「おれを覚えているか？ 酒場で会つたろう——おまえが止めてくれないや、おれはあの女剣士にやられていたろうさ。まったく、あいつはたいしたやつだぜ」

ハライトが真つ先に思い出したのが、ルシートだつた。

強い目をしたあの女剣士——そして自分をダークキングダムの兵士だと言つたのが、この男だつたことを思い出した。

「だがあのとき君は、ダークキングダムに恨みがあるようには見えなかったが」

「ちよいと事情が変わつてね」

そう言つて、剣を身構える。

「ダークキングダムに恨みがあることを思い出したのさ……！」

いつ抜いたのか、ハラートの剣とレギオンの剣は、凄まじい音を立てて交差していた。

互いに離れ、距離をとる。

レギオンは思った。

（こいつ……女みたいな顔をしているくせに、なんて力だ。おれの剣を直に受けて、びくともしねえ）

「私怨では、わたしを倒せぬ」
闇の戦士が決然と言う。

レギオンは、それでもチツと舌打ちすると、剣をまたも豪快に振り上げた。

と、そのとき、レギオンの前からハラートの姿が消えた。
咄嗟に天を仰ぐ。

（違う、後ろだ！）

剣闘士の直感がレギオンを救った。

振り向きざまにハラートの一撃を薙ぐ。

（何てエ速さだ……）

レギオンの背を冷たい汗が滑り落ちた。

だがハラートにも相手の力量は伝わっていた。

（この男の読みは正確だ）

身をひるがえしつつ確信し、瞬時に次の攻撃を繰り出す。

光の剣と変じた武器は、以前にも増してハライトの手になじみ、まるで彼の意味そのもののように自由自在に軌跡を描いた。それでも相手を倒すことはできない。

レギオンにしても、光の剣と化したおのが武器は、重さすら感じないほど、すでに体の一部のように動いている。

結局、二人は互角のまま、森の落ち葉を巻き上げつつ、剣を交わし合った。

「やるな……だがそろそろ終わりにしようぜ」

「……いいだろう、来るがいい」

ついに二人が腹の底から気合に満ち満ちた声を上げ、森中の木々が震えたときだった。

「待つて——！　だめよ、レギオン……！」

ルシータの叫びが二人を止めた。

レギオンが相手の目を睨んだまま叫ぶ。

「なぜだ、ルシータ？！　こいつはダークキングダム of 戦士だぜ」

ルシータは二人の間に走り込み、自らの剣を鞘から抜いて、高く掲げた。

森の霊気が一瞬で吸い寄せられたようにルシータの剣に集まる。そして光も、風車のように剣を中心にして回り始めた。

「おお……」

その瞬間、レギオンとハライトの剣も光り始めたのだ。

レギオンの剣は、金色に。

ハライトの剣は、銀色に。

「聞いて、レギオン。彼が『銀の車輪』よ。わたしたちの仲間だわ」

ルシータの剣は、ますます、白く、明るく輝き出していた。

「これで二つの車輪がそろった——天使ソワール、あなたの導きに感謝します」

18・ソワールの予言

木の葉がさわさわと音を立て、さっきまでの凄まじい剣気が嘘のようであつた。

森には清浄な気が満ち、透明な鳥の聲がそこかしこから聞こえてくる。

ルシータは光の剣を下ろすと、肩で息をしている二人を見た。

たつた今、水晶の中で見た幻影の男が目の前にいる。

黒い衣装、ガーネットにも似た輝きを持つ赤い髪。

いくらか赤味を帯びた白い面差しは、思わず目を引かれるほど綺麗だ。

だが、ルシータがもっと驚いたのは、レギオンの変容である。

新しい木綿のブラウスに着替え、さっぱりと髭を剃ったその顔は、ルシータが憧れた戦士その人だったから。

ルシータの記憶どおり、レギオンの波打つ髪は光を反射してまさに太陽の色に輝き、彼の肩をゆったりと覆っていた。

「こいつが『銀の車輪』だと？ それはどういうことだ」

言葉だけは、相変わらず荒い。

「水晶に映つたの。間違はなく、彼が『銀の車輪』よ——ねえ、あなた。わたしはルシータ、彼はレギオン。あなたも天使ソワールの声を聞いたのね？」

赤毛の剣士は、しばし息を整えつつ無言でいたが、意を決したように、

「そうだ。美しい声を聞いた。グラナダルへ——バールの森へ行け

という声を」

すると、うつて変わった風にレギオンが手を差し出し、

「まあ悪かったな。おれはレギオン——おれと互角に張り合うとは、なかなかの剣の腕だ。仲良くやろうぜ」

と言った。

「こちらこそ、よろしく。わたしの名はハライト」

「ハライト、ね。もしよかったら、あなたのあざを見せてくれない？ あるでしょう、車輪のあざが」

握ったレギオンの手に車輪のあざがあるのを見たハライトは、はつと彼の顔を見上げた。

すると、「そういうわけだ」とても言いたげに、レギオンが眉を上げる。

ハライトは、詰襟のボタンをひとつずつはずすと、胸の上についた車輪のあざを見せた。

「わたしはペンダントを持っていた。母から貰った車輪のペンダントだ。それが——胸の中に吸い込まれていったんだ」

「おれもだ、おれもアルタミラからもらったペンダントが、この手の上に吸い込まれてあざになった」

「姉さまからもらったペンダント？」

「ああ」

そうしてレギオンがルシータにもまだ話していなかったあざのついた経緯いきわづらひを語るのを、ハライトはじつと聞いていたが、ふと思いついたように、

「アルタミラ？ アルタミラ王妃のことか？ レギオン、君はアルタミラ王妃と——」

それからルシータの顔を見た。

「そうか。どこかで見覚えのある顔だと思ったのだ、あのとき……。君は王妃の妹だったのか」

言うてから、ハライトの脳裏にあの闇の侵攻の日が浮かんだか、彼は顔を苦渋にゆがめた。

「わたしの母は予言していた。いつか闇が光を滅ぼすだろうと。そのときわたしは、父と同じ闇の兵士の服を着て戦うだろうと——。そしてあの日、本当にそうなってしまった日から、母の言葉がわたしの中で重くなっていたのだ。『おまえは光を救う戦士になる』……」

ルシータの胸は、驚きに鼓動し始めた。

「姉さまもそう言ったわ、『レギオンが光の戦士になる』って……！」

「アルタミラが?!」

ルシータはレギオンにうなずき返すと、

「姉さまは光の天使に会ったのよ。そして、こう告げられた——。

自分は光の王妃になって王女を産み、光の戦士になったレギオンが王女を守るって」

「わたしの母も、きっと光の天使に会ったのだ。そして予言を与えられた」

ルシータは吐息を吐いた。

「不思議な話ね……ということは、光の天使はハライトのお母様とアルタミラ姉さまにだけ、未来を予言していたってことか」

19・不吉な黒雲

「むろん、わしにも予言はあった」

その声に三人が振り向くと、そこには杖を携えたバールとベルナデット、ブラツキーの姿があった。

「闇の勢力が攻め入る直前じゃったがの」

杖をつきつき、バールが進み出る。

「もう少し早く知らせてくれておればの。だがそれも意味があったのかもしれない」

森を抜ける風に、ルシータの髪がそよいだ。

「要するに、今ここにわたしたちが集っているのは、偶然じゃないってことね。」

とにかく、これからのことを話しましょ。どうすれば闇を倒せるか、そしてライレーン王女を救い出せるか」

ベルナデットが、怖々ハラートの側へ近寄って、彼の赤毛の先をつついた。

「レギオンより、怖くない」と、失礼なことを言う。

「何だと？」

レギオンがぎろりと睨むと、

「ほら、それよ、それ……おっかないんだから」わざと大げさに身を引いた。

ブラツキーがここぞとばかり、

「そりゃ死神と呼ばれた男だからな。けど、オレはかっこいいと思うぜ」

と持ち上げたが、レギオンのうんざりとした顔つきは変わらない。

「男に誉められても、嬉しかねえよ」

「でもレギオン、見違えたわよ。そうやってると、昔のあんたみたい」

ルシータの一言で、ようやく機嫌を直したレギオンである。

こうして、いっぺんに大所帯となったバールの小屋には、全員はとも入りきれず、男三人はいったん街へと戻っていった。

ハライトはブラツキーの家——ルシータが連れて行かれた、例の鍛冶屋である——に泊まることにして。

行く途中、ブラツキーが空を指差し、「あの北の空を見なよ」と言った。

レギオンとハライトがそちらを見上げると、ハライトが塔の上から見たような瘴気しやうきうずまく暗雲が湧いているのが見えた。

「嫌な雲だな。俺が言うのも何だが、死神を運んできそうだぜ」

「このところ、だんだん広がっている気がするんだ。これも光と闇の戦いとの関係があるのかな？」

「おそらく」

ブラツキーの問いにハライトが答える。

「あの雲はダークキングダムを覆っている雲と同じ……」

光の封印が解かれ、それを警戒する闇の力が反発して、大きくなっているのだろう」

「じゃ、これからますます広がってゆくな。たしかにこのままじゃ、世界は闇になる」

あの雲の下に、日の光など射すはずもない。

ブラツキーが、ぶるつと身を震わせた。

「わたしたちに軍隊はないわ。だから思いきって城へ飛び込み、ダーク王と一騎討ちするしかないと思う」

三人は、また森に集まっていた。

よく実った葡萄のふさを口に運びながらルシータが考えを述べる
と、レギオンは肩をすくめ、

「無謀だな……まったく、おまえの考える策はいつも突飛すぎるぜ」
つい、本音を漏らした。

「あら、その突飛な策に負けたのは誰？」
すかさずルシータが反撃する。

「……ぐ。むむむ……」

言葉に詰まるレギオンを見てふふつと笑うと、ルシータはハラ
トの方に顔を向けた。

「ハラート、あなたの考えは？　ダークキングダムまで行ける？
ダーク王や闇の戦士に見つからないように」

ハラートはすでに黒服を脱いでいる。

今、彼の見事な赤い髪は、白いブラウスの上を流れていた。

「王や闇の賢人たちは、すでに光の解放に気づいていて、兵士をそ
こかしこに送っている。見つからずというのは難しいかもしれな
い。けれど……」

「けれど？」

「闇の力の結束は、急速に弱まっている。だから個々を叩けばたや
すいはずだ」

そう言うってから、ハラートは淡いブルーの瞳を上げた。

「二人に言うておかねばならないことがある。わたしは——わたし
はここへ来る前、闇の兵士の戦隊長をつとめていた」

「戦隊長……？！」

唖然としたルシータの横で、レギオンが自分たちにとって幸運だ
と思っているのか皮肉っているのか、どちらともとれる風に言った。
「ほう。戦隊長のおかげで、情報は筒抜けってわけか……ダーク王
には痛い、裏切り者だ」

ハライトの体の周りの空気が、一瞬、冷たく張り詰めたかに思え
た。

ルシータが咄嗟に言葉を継ぐ。

「それを言うなら、わたしだって裏切ってるわよ。よもや、サイラ
スの仇と手を組もうなんてね」

ハライトにウィンクすると、レギオンに向かって不敵に微笑んで
見せた。

「でも、あんたも一度、ブライトキングダムを捨てたんだったわよ
ね？」

「何だと？」

レギオンを制したルシータは、明るく二人に触れた。

「笑っちゃうわね。裏切り者同士のチームなんて。でもあんたたち
には車輪のあざがある——それだけで十分。選ばれし印を疑うよう
では、わたしに光の国を救う資格はないと思ってるわ」

そのとき、ハライトが初めて微笑んでルシータを見た。

「バールが言っていたよ。ルシータ、君は『もつとも明るい光』だ
と。そしてレギオンとわたしは、一対の車輪……」

「ああ、つまりそういうことだな」

レギオンがふてくされたように、ため息をつく。

「おれたちは、このじゃじゃ馬にかなわないってことだ」

「だれがじゃじゃ馬ですって？」

三人は、声を上げて笑った。

20・妖精のお気に入り

これから季節は冬へと向かう。

それゆえ、ダークキングダムのある北へ向かうのは、春が近くな
つてからにしようと三人で決めた。

まず彼らを取り掛かったのは、バールの小屋の近くに自分たちの
住む家を建てることだった。

ハラートは街が合わないらしく、レギオンですら、もう「ディエ
ゴの家」には戻る気がなくなっているらしい。

日に日に仲間意識を強くしていったブラツキーもこの計画には大
乗り気で、子供のようにはいしゃいでいるのだった。

「最初にルシータの家を建てよう。レディ・ファーストだからな」
ブラツキーは、うきうきとそう言ったが、ルシータは断った。

「いえ、まずハラートの小屋にしましょう。あんと一緒に、彼、
辛そうだから」

「え？」と眉をハの字に下げたブラツキーの背中を、パンと叩き、
「冗談よ。でも、彼には街より森の方がいいみたいなの。ねっ、お
願い。協力して」

もちろん、家と言ってもたいそうなものではない。

一冬を乗り切ればいいだけだ。

それに、誰も口には出さないが、ダーク王と対峙して生きて帰れ
る保証もない。

もとより戦士である三人は、これまでも命ぎりぎりのところで生
きてきて、いまさら特別な感傷があるわけでもなかったが――。

それより今は、ダークキングダムの情報が必要だ。

「ハライト、ダーク王は王女に危害を加えないかしら？」

無事にハライトの住む小屋が完成した日の夜、パールがお祝いにふるまってくれた秘蔵のハチミツ酒を飲みながら、ふと、ルシータが聞いた。

ハライトがひとり、やっと住めるだけの小さな小屋に、今全員が集まって賑やかしているのである。

石造りの、かろうじて暖炉と呼べるところには赤々とした火が燃えていた。

「王女様のご様子は、水晶にも映らないんじゃ。ただまぶしい光が見えるのみ――。」

『銀の車輪』よ、わしも知りたい。そなた、王女様を見たことはないか」

「そうよ、早く助けなくちゃらめ。王女様が死んじゃったら、あたしも死んじゃうんだからあ……」

ブラツキーと意気投合し、互いに酌をしながら飲んでいた妖精は、すでに酔っ払っている。

バンバンと、ブラツキーを叩き出した。

「ちょ……痛いじゃんかよ、ベルベル。やめてくれよオ」

それを見たレギオンは、杯を掲げ、

「おう、おまえら気が合ってるな。いいことだ」
愉快そうだ。

「違うの！」

すると妖精がいきなり立ち上がった。

「こいつはレギレギがいいんだって！ かんぺきに变よねっ」

「レ、レギレギ……?」

ちよつとルシータの頬がひくついた。

ベルナデットは、目をすわらせてルシータをぐつと見ると、指をさし「ルシルシでしょ」、「さらにパールをさし「バルバルでしょ」、最後にハラートまでさして、「ハラハラ!」。

それからついに叫んだ――

「ブラブラは、レギレギが好きなよう……!」

ブラツキーがベルナデットを締め上げる勢いで「ばらしやがったな!」と言うのと、レギオンが沸騰して怒鳴るのは、ほぼ同時だった。

「てめえら……出てけ! 頭冷やして来やがれ!」

「キヤーっ、怖いっ。助けて、ハラハラっ」

なぜかハラートに飛びついたとたん、ベルナデットの姿はふっと消えた。

「ほっほー。露に姿を変えおったわい。相変わらず、逃げ足の速い妖精じゃて。……ほれ、そこにおるわい」

するとハラートのブラウスの襟できらりと光った露がぶるりと震え、そこから小さな声がした。

――『あたしは、ハラハラがいいわ!』

21・王女を守る光

ようやくルシータの質問に、ハラートが答え始めた。
「パールも杖を抱えたまま、じっと聞いている。」

「アルタミラ王妃が斬られたとき、巨大な光の玉があらわれてライ
レーン王女を包んだそうだ。
ダーク王が王女をつかもうと手を伸ばしたが、光の膜に触れると
体中に痛みが走り、手を引かざるを得なかった。」

——それ以来、王女は光の膜に包まれたまま、玉座の下の隠し部
屋で眠っている。

誰も王女を光の膜から出せず、また目覚めさせることもできない。

この十年、闇の賢人たちが王女を目覚めさせる方法を試みてきた
が、みなその強い光に塵となって消えていき、昔十三人いた賢人も、
今は四人を残すのみとなっているんだ」

言いながらハラートの頭の中に、あのギアアギアというカラス
の鳴き声にも似た四賢人の声がよみがえっていた。

きつと彼らは、黙って消えてしまった闇の戦隊長を責めて、王の
側でまたひとしきり騒いだに違いない。

ハラートの瞳が翳^{かげ}る。

（——そう、自分は黙ってダークキングダムを出てしまった。アリ
ーナにも、何も言わずに）

アリーナ……ダーク王と前妃の娘であり、誇り高きダークキング

ダムの王女。

彼女は、美しく、しなやかで、強い。

数年前ハライトを、自分の守り役から戦隊長の地位にと、王に強く進言したのはアリーナだった。

ハライトとて気づいていた。

いつのころからか、アリーナが自分をただの守り役として以上に慕ってくれていたことを。

（だが、わたしの半身はブライトキングダムにある。

このペンダントの意味することが明らかにならぬ限り、わたしにはアリーナを幸せにすることができない）

彼女から薔薇のような微笑をかえされるたび、棘ある侮蔑の言葉とげを投げられるたび、どれほど心は痛んだことだろう！

何もかも、ダークキングダムもブライトキングダムも、自分自身さえ、消えてなくなってしまうばいいと願った夜が、どれほど続いたことか――。

「では、王女様に触れることはできぬのじゃな」

ほっとしたように、バールが言った。

「王女を目覚めさせる？ それが目的なの？ 殺すことじゃなく？」

ハライトは水の色で瞳でルシータを見ると、うなずいた。

「王女が光の力で目覚めると、すべての光の精霊たちの力が完全に復活すると言われている……何より王は、それを恐れているのだ。

闇の力で王女を目覚めさせたあとは、王女を従え光の精霊を支配する――これがダーク王の目的だから」

（――ああ、ライレーン！ 早くあなたを救い出してあげなければ）

ルシータが祈るようにそう思う横で、レギオンが唸った。

「まさに、闇も光も支配する気だな」

「それも闇のためだけにだろ？ そんなことになったら、世界は真っ暗になっちまう」

口を尖らせたブラツキーが同調するのを嫌そうな視線で見やりながら、以前、北の空の黒雲を見たとき自分も同じことを思ったのを、レギオンは思い出していた。

22・雪の塔

雪は灰色の雲から次々と落ちてくる。

数ヶ月前、まさにハラートが立っていた塔の上に、アリーナも立っていた。

降り積もる雪が、目の前の森ばかりでなく、この塔の上をもすっかり白く変えている。

兵士たちの間では、「若い戦隊長は光の封印が解かれたことで、怖気づいてさっさと逃げ出したのだ」と噂されていた。

だがアリーナには、彼が自分にさえ一言のわけも言わずにこの国を出て行ったことが信じられなかった。

「どうしてなの……ハラート？　なぜ、わたしを置いて？」

アリーナの胸に、ハラートを戦隊長にと強く推おしたことを後悔する気持ちが湧き上がっていた。

そのせいでハラートをねたむ者が多くいたことは事実だからだ。
ハラート
彼はそのことで、自分を恨んでいたのだろうか？

何も考えられなくなつて、アリーナは薔薇色の唇をきゅっと噛んだ。

「ここにおられましたのか、アリーナ王女」

そのとき、狡猾そうな高いトーンの声が背後から響き、アリーナははっとして体を硬直させた。

振り返る気はしなかったけれども、かろうじて顔だけを向ける。
するとそこには、一面真っ白い中に黒く不吉な細い影が立っていた。

影は、口の端を薄い笑みに歪めながらこちらを見ている。

「何の用？ サীগ」

サীগは「闇の神殿」に棲む、闇の魔術師だ。

闇の魔物を従える強い力はあるが、性格が尊大で、常に獲物を横取りしようと狙っているキツネのようなずる賢さが、アリーナは大嫌いだっただ。

そして何よりも、彼の目――

まるで盲目めしいのようなその瞳は、やや黄色を帯びた白色なのである。
見えているのかいないのか、わからないような視線を向けられるだけで、全身に怖気おそけが走った。

再び彼は、粘りつくような声で言った。

「王が捜しておられましたぞ。何でも、前戦隊長にかわってナビル將軍を任命したいとのこと……どうやらほかにも、アリーナ様にお話が」

（おまえのそのしゃべり方、いらいらするわ）

叫びたい苛立ちを押さえ、アリーナは毅然と魔術師を見返す。

「それよりも、サীগ。ハラートの行方はまだわからないの？ おまえともあろう者が、そんなこともつかめないなんて」

「これはこれは、アリーナ様」

サীগは大仰に礼を払った。

「大変申し訳ございません。どうしたことが、彼の姿は一向に見えないのです。魔物たちにも捜させてはありますが、いまだ情報はな

く、わたしの黒水晶にも、ただ強い光が映るのみ――

あるいはもう、彼はこの世にはいないのかもしれないかもしれませぬな」

「生きてるわ！」

今度こそ、アリーナは叫んだ。

「ハライトは生きている、わたしにはわかる！ 捜しなさい、何としても。いいわけは許さないわ！」

片方の眉を面白そうに上げると、サーグはより深くお辞儀をし、一歩退いてアリーナを通した。

溶けた雪が、黒いドレスに静かに沁み込んでゆく。

城の中に入り、だが体ばかりか心まで凍えてしまったように、アリーナは感じていた。

こんなにもはつきり、ハライトが生きているということを感じられるのに、確信は持てない。

ハライトの心まではつかめない自分が悔しかった。

微動だにしない兵隊の居並ぶ廊下を通り、玉座の間へ入る。

と、玉座の下にナビル将軍が立っているのが目に入った。

ナビル将軍は、アリーナから見れば父王と同じくらいの年齢で、しかしさすがに筋骨の隆々とした武人である。

たくわえたあごひげのせいか、顔も締まって見え、全身からは強いエネルギーを発しているようだった。

そのせいか、年よりは若く見える。

今、将軍は片手に兜を持ち、黒々とした甲冑に身を包んだまま、

こちらへ歩んでくるアリーナを悠然と見ているのだった。

「おお、アリーナか」

ダーク王が立ち上がってアリーナを迎える。

今日はめずらしく機嫌がいい様子だ。

「ナビルは今、リディアバランの町でひと働きしてきたところだ。
あの町の人間どもは、皆強く光の復活を願っていたらしい」

23・王女のさだめ

アリーナは將軍の前でとまり、腕組をして彼を見つめた。
ドレスに縫い込まれた胸元の血色の宝石が、まばゆく光る。

「そう、ご苦労様。捕虜をたくさん連れてきたの?」

ナビル將軍はていねいに頭を下げ、目を伏せたまま答えた。

「町ごと殲滅してございます、王女様」

そうして皮肉たつぷりに付け加えた。

「わたしはどこぞの若造とは違い、手ぬるいことは好きではありませんのでな」

かつとなったアリーナが反駁はんぱくしようと思ったとき、ダーク王が口を開いた。

「今後はナビルを戦隊長の任に命じる。それから、アリーナ——
おまえは將軍の妻になるのだ」

「えっ」と言っただけ、アリーナは絶句した。

「お父さま、それは……」

ナビル將軍がぎらぎらとした獣のまなざしでアリーナを見つめ、
まるで裸にされたような屈辱と羞恥にまみれながら、アリーナはか
ろうじてその場に立っていた。

「おまえは強い子を生まねばならん。——ハライトのことは、もう
忘れるのだ」

思わず眩暈がした肩を、ナビル將軍が支える。

「触らないでっ——。お父さま、わたしはハラートを……」
「ならん。式は一週間後だ。いいな、これは命令だぞ」

振り払ったはずの手が、再びアリーナの手首をとらえ、ナビル將軍は王女の手優しく口付けた。

「アリーナ王女……。わたしはあなたを大切にいたしますぞ。亡くなった妻、エイベリン以上に」

「子を生むのだ、アリーナ。わたしの継承者を。サーグの力を借りれば、子供は三ヶ月で生まれてくる。」

サーグは言った。子供が生まれれば闇の力も勢いを増し、その子がライレーン王女を目覚めさせるだろう、と」

（——サーグ！ あの魔術師が！）

悔し涙が頬を濡らし、アリーナはその場に立ち尽くした。

「……王よ。わたしはこれで失礼いたします。ではアリーナ王女、一週間後に」

そう告げると、ナビル將軍はくるりと踵を返し、玉座の間を出て行った。

ダーク王は、また玉座に座ると、身動きせずただうつむいているアリーナに言った。

「おまえは王女の務めを果たさねばならん。——いいか、よく聞くがいい。ハラートは、どうやら裏切ったらしい」

はっと、アリーナが顔を上げる。

「ハラートが？ 裏切ったですって？」

「そうだ。サーグの黒水晶に光が映るのは、あやつが光の手のうちに入ったからではないかと、賢人たちは言っておる」

物憂げに王は言い、ため息をついた。

「そんな……」

ハライトは、そんなにも疎^{うと}まれていたのだろうか。

誰も彼も、ハライトがいなくなったことを憂うどころか、好き勝手に悪い想像をして排除しようとしている。

「じゃあきつと、ハライトはひとりで探りに行ったのよ。もしかしたら、敵に捕まってしまったのかもしれない……」

お父さま、よく考えて。ハライトがお父さまやわたしを裏切るわけがないじゃないの？」

「アリーナよ。おまえは知らなかったのか？ ハライトの母親は、ブライトキングダムの人間だったのだぞ」

アリーナは小さく息を呑んだ。

「ブライトキングダムの……？」

「そうだ。だからやつが、母親のために敵側についてもおかしくはあるまい。」

——いや、もしかして我らは、今までやつにだまされておったのか」

うめぬ……と唸り出した王の、仮面の下が目が血走りはじめている。

アリーナは慌てて言葉を添えた。

「いいえ、そんなことは絶対にないわ！ お父さま、たとえハライトの親がどちらの国の人間だとしても、ハライトは——」

「もうよい。行くのだ」

ダーク王の背中に、びりつと炎が上がったようだった。

「お父さま！ わたしはナビルとは結婚しません！ あの男の妻になるくらいなら——」

「言っただけだ。勝手は許さん」

いまや仮面の下に狂気さえ漂よわせ、ダーク王は言った。

「おまえは父のために生きろ。いいな」

24・愛しい面影

すっかり打ちひしがれたアリーナが自室までもどつてくると、扉の前に魔術師サーグが薄い笑いを浮かべて立っていた。

アリーナは最大の努力をして、なお勝気を装うと、顔を上げ、サーグを無視した。

「アリーナ様。將軍との結婚がお嫌なのではありませんか？」
魔術師が言う。

「いいえ」

言葉は意外にも心を裏切つて、アリーナの口について出た。

「それが王女の務めなら、わたしは務めを果たします」

サーグはまたにっと笑い、

「なかなか立派なお心がけと存じますが——もしわたしと契約を結んでいただけるなら、將軍の子を産まずともよいようにしてさしあげましょう」

そしてアリーナの手を取り、口付ける。

その目が男の欲望に燃えているのを見たとき、アリーナの怒りと悲しみは頂点に達した。

「お父さまを裏切つて、悪魔と契約を結ぶくらいなら、死んだ方がましよ！」

部屋の扉を乱暴に閉めたあと、アリーナはベッドに伏せて泣いた。泣いて、泣いて……その間、浮かぶのは愛しいハライトの顔だけだ。

ここから逃げ出したい。

まるですべてが敵にまわってしまったかのような、この城から。

「ハラート、助けにきて、ハラート……わたしを守って」

そのときアリーナは、たったひとりの味方ともいえる乳母を思い出し、彼女に相談しようと思った。

侍女のいる居間に続く部屋の扉を開け、大声で命じた。

「ばあやを呼んでちょうだい、早く！」

緊迫したアリーナの様子に飛んできた乳母は、アリーナから事の顛末を聞くなり、

「おかawaiiそうな、おひいさま！」

と泣き崩れ、しばらく慎重に考えていたが、「やはり王様に考えなおしていただかなくては」と言い、部屋を出ていった。

翌日、少しの希望に切ない思いで目覚めたアリーナは、賢者のひとりがベッドの横に立っているのを見て飛び起きた。

いつもはもちろん、乳母や侍女たちがアリーナの目覚めを手伝ってくれるのに、これはどういうことだろう……。

恐ろしい予感は的中した。

黒いマントをすっぽり被った不吉そのものの賢者は、がさつく声でアリーナに告げたのだ。

乳母は昨夜、嘆願したその場で王の怒りの炎のために焼け死に、アリーナ付きの侍女たちは、全員ただちに森に追放されたと。

アリーナの悲鳴が部屋中に響き渡った。

気を失ったアリーナが目覚めたとき、今度はその側にサーグの姿があった。

心臓の鼓動が早くなるばかりで、声が出ない。
全身に汗がにじみ出るのがわかった。

「王女の務めを果たすと、はつきりおっしゃったわりには、お粗末な悪あがきでしたな」

魔術師は、隣のかつての侍女たちの控えの間を指さし、
「これから婚儀までの間、わたしに隣の間でアリーナ様を監視せよとの王からのご命令です。何なりと、お申し付けください」

サーグの顔を見ることができなかった。

アリーナの目に悔し涙が浮かび、それはこめかみを伝って流れた。

侍女たちは、瘴気に満ちた森を無事抜けられただろうか。

恐らく誰一人助かつてはいまい。

五体満足で追放されたとは思いがたいからだ。

父は裏切りには容赦ない。

母の裏切りのせいだ。

父を裏切った母。

そして、父と国と自分を裏切った、ハラート……。

目覚めてからずっと、母の形見であるルビーで作られた薔薇の指輪を手の中で転がし、考え続けていたアリーナは、ついに瞳を上げた。

まだ薄暗くはあったけれど、彼女にはわかったのだ、再び朝がきたと。

漆黒の中にきらめきを宿した瞳は、王女としての運命を受け入れる決意をしていた。

今、その瞳からひとすじの流れが伝う。

（――ハラート！ おまえのせいよ！）

一週間後、アリーナとナビル將軍の婚礼が、闇の神殿でござるかに執り行われた。

25・雪の中の旅立ち

結局、バールの小屋でも寝泊まり可能なルシータの小屋を建てるのが最後になったが、雪が積もる前に全員新しい住居に移ってくることができた。

もう森は真つ白で、まともには歩けない。

それでも六人は、森での生活を存分に楽しんでいた。

今、みんなはバールの小屋の外にいる。

昨夜の大雪もすっかりおさまり、よく晴れた朝だ。

「雪が反射して、まぶしい」

ベルナデットはすっかりハラートがお気に入りだ。ずっと側から離れない。

レギオンが聞いた。

「先日闇の軍勢に破壊されたりディアバランの町だが——何か情報はないか？」

早耳の異名にふさわしくブラツキーが答える。

「ああ、あそこはもとブライトキングダムの間が多く潜伏していたようなんだ。バールが封印を解いたことでみんながそれを思い出し、大騒ぎになったらしいぜ」

「そう、か」

眉をひそめ、ルシータが無念そうにつぶやいた。

「それで光の国の復興を願う声が大きくなって、ダーク王に見つかったのね——何てこと」

すると後ろで、バールがヒステリックに声を上げた。

「だからといって、ちょこちょこ封印を解く、というわけにはいか

んのじゃ。……しかし、せつかく救った命じゃったのにのう」

ベルナデットが、落ち込んだバールを「よしよし」と慰めだした。

そのとき、ルシータがレギオンを見て言った。

「他にもあるかもしれないわね。そんな町が」

「探すか？」

「いえ。むしろ、騒ぎが起こらないように忠告しなくちゃと思って、リディアバランの話が伝わってればいいんだけど」

肩をすくめると、レギオンは言った。

「どうせ冬の間は北へはいけないんだ。じっとしてると体がなまる、いつそ町々を巡ってみないか」

「そうね——いいかもしれない。ハラート、あなたは、どう？」

このところ、ハラートはよくぼんやりしている。

さすがに剣を握っているときは研ぎ澄まされたオーラを出しているが、こうやって雑談の場にいるときなどは、ひとりどこか別の世界へでも行ってしまうようだった。

「あ、ああ……。わたしは君たちについてゆく——どこへなりとも」

バールがうなずき、

「わしも賛成だね。たとえ戦いに参加できなくても、多くの人の気運が高まれば、ダーク王を倒す力にはなるじやろって」

一瞬、ハラートが顔を歪め、ルシータにはハラートが苦しんでいるということがわかってしまった。

ダーク王を倒すことを、彼はまだ迷っているのかもしれない——。

ふとレギオンの方を見ると、彼も神妙にハラートを見下ろしている。

おそらくレギオンも、自分と同じように、ハラートの迷いに気づいたのだろう。

ルシータにはレギオンが、まだハラートに対して完全に心を許しているふうには見えなかったが、それでも感情的にならず、まっすぐに闇を討とうとしている姿勢を見なおし始めていた。

けれどハラートがこの調子では、いつレギオンが爆発するかかわらない。

小屋を建ててしまつて、とりたててすることもない今、二人の気を紛らすためにも旅に出た方がいい。

そういつわけで、彼らはあえて雪の中を旅立つことになった。

26・ブライト村

ルシートたち一行は、行く先々の町や村で歓待を受けた。

もとブライトキングダムの人間とも多く出会い、ついて来たいと言う者も中にはいたが、大半は、自分たちの生活をしながらブライトキングダムの再興を祈り、それが叶った暁には家族ともども光の国へともどり、ライレーン王女を祝福したい、と言うのであった。

「ダークキングダムの攻撃には用心して。彼らはとても非情だと聞いているから」

残念なことに、西、南と回った最後の東の地方では、ダークキングダムの軍勢を恐れた住民が元ブライトキングダムの人間を追い出し、その人たちによる新しい村ができていたということだった。

だがその村がどこにあるのかについては誰もが口を閉ざし、ブラツキーが苦心して集めた情報で、やっとその村をつきとめることができた。

新しい村は、深い森の中にひっそりと作られていたのである。

村の名は『ブライト村』といい、セルディンという壮健で意思強固な男が長だった。

「ようこそ、同志よ。雪の中をよくぞ来られた。どうぞ心ゆくまでゆつくりご滞在ください」

そうしてひとりの娘を呼び、

「娘のクラウディアです。彼女に案内させましょう」
と言った。

父親は硬い黒髪をしていたが、クラウドディアは透き通るような金髪である。

年齢は、十七……ルシータの五歳年下であった。

彼女は、ルシータ、レギオン、ハライト、そしてブラツキーの前に出ると、スカートを軽く持ち上げておじぎをし、

「まずは、長老のところへご案内します。誰よりもあなた方に会いたがっているんです」

そう言って、春の花がほころぶように微笑んだ。

こうして五人は、長老が住んでいるという石造りの聖堂に向かって村を歩いていった。

光の国再興を願う彼らにとって、たとえ小さくとも聖堂を建てることは必要だったとクラウドディアは説明し、そこに長老が守り人として住むことになったのだと言った。

「教会の神父様みたいなもんだな」

ブラツキーが顔を赤らめているのは、どうやら寒さのせいではないらしい。

「ええ。長老は、ブライトキングダムのことを村の誰よりもよく記憶しているの。聖堂には一番ふさわしい番人でしょう？」

クラウドディアのふわりとした金髪に見とれているブラツキーを見て、ルシータとレギオンは目を合わせて笑った。

外に出ている村人たちが、クラウドディアと見知らぬ四人の旅人に気軽に挨拶をする。

即席にできあがった村とはいえ、ブライト村の住人たちは、もう何十年も一緒にいるかのような親しみを持ちあって過ごしているよ

うだった。

「クラウドディア……君たちは、君たちを追放した人間を恨んではないのか？」

唐突にハライトが口を開き、だがクラウドディアは振り返ると、
「いいえ」

と答えた。

「私たちは誰も恨んだりしません。私たちはみんな、ブライトキングダムの人間であることを、誇りに思っているのだもの」

ルシータは微笑んだ。

「それを聞いて、とても嬉しいわ。クラウドディア、ありがとう」

聖堂は、聖堂というよりは墓のようだった。

重々しい木の扉を開くと、中にひとりの老人が座っていた。

かなり高齢で、人間というより、水晶宮のドワーフのように見える。

27・長老と鎖帷子

「そなたたちが、光の戦士かね？」

ルシータは一步前へ出ると、

「はい。私はルシータです。そして彼らは、レギオン、ハライト。私たちは光の天使ソワールから光の剣を託され、闇を討つよう使命を授かりました」

「おお…… もしや、もしや、ルシータというのは…… あなたさまは長老のシワに埋もれていた目が見開かれた。

「あなたさまは、アルタミラ王妃のご姉妹……」

それを聞いたクラウドディアは、「あっ」と手を口に当てた。そして急いでひざまずく。

「ええ——でも、気になさらないでください。クラウドディアも…… さあ、立つて」

そうして皆が暖炉の前に座ると、クラウドディアが温めたお茶を配り、やがて聖堂の中にはくつろいだ空気が満ちた。

「ルシータ様。あなたさまがこうして生きておられたことは、民の喜びです。そして、あなたさまとこの二人の戦士が、ブライトキングダムを取り戻してくださる——」

長老はひととき熱心にしゃべり、それから部屋の隅にいていた長持ちから何かを取り出してきた。

「これを、お三方に」

「——これは！」

目の前に広げられたのは、立派な鎖帷子くさりかたびらだった。

ひとつは、金色の鋼。

ひとつは、銀色の鋼。

そして今ひとつは水晶できていて、透明な光を放って輝いている。

「これはブライトキングダムの記憶をなくしたわしの側に、置かれていたのです。いつの日か、これを使う人たちが、わしのところへやってくるだろうということは、漠然と感じておりましたが」

「あの……わたしでよかったら、その下に着る戦士の服を縫いましょうか？」

三人が鎖帷子をまとう横から、クラウドディアが遠慮がちにそう申し出た。

「あなたが？ ——ああ、ぜひお願いするわ！ この立派な戦帷子にふさわしい服をね」

「靴や革製品は、セルディンに頼むといいでしょう。彼は狩猟と皮なめしが得意だから」

長老もつきつきと言い、満足そうに三人を見上げる。

金色の鎖帷子はレギオンに、銀色の鎖帷子はハライトに、ぴったりだった。

ルシートも、水晶の鎖帷子を持ち上げてみる。

きらきらと、まるで宝飾品のように輝く石が、手に冷やりとした感触だ。

「ソワールの贈り物ね」

すると、ルシータのつぶやきに答えるように、帷子が厳かな光を放った。

ブライト村でのルシータたちの滞在は、ほぼ一月にも及んだ。

最後の日、彼らはセルディンやクラウディアから戦士の衣装一式を受け取ると、ついにバールの待つ森へ帰ることにした。

ここ数日、ブラツキーは大いに悩み、だがやはり、闇を倒す戦いに参加するという初心を貫くことにしたようだった。

レギオンが言う。

「だがなあ、ブラツキー。おまえは剣が遣えるわけじゃない。わざわざおれたちと来て、危険な目に遭うこともないんだぜ。

それより、おまえにふさわしい人生を送るべきだ。——クラウディアの側にいたいんだろう?」

ブラツキーは、思いつめた瞳で握った拳を震わせたが、

「いや。オレだって男だ。一度決めたことは、最後までやりぬく」
そう言い切った。

「ブラツキー、無理はしないで。レギオンの言うとおりよ。あなたの早耳は重宝だけど、これからは剣が要る。

もし何かのとき、あんたを助けてあげられるかわからない」

「足手まといにはならないって誓うよ」

ルシータの言葉に、ブラツキーは静かに反論した。

「オレも行かせてくれ」

「もしわたしたちが失敗したら——」

そのとき、それまで黙っていたハライトが口を開き、みな彼の方を振り向いた。

「もしわたしたちが失敗したら、闇の軍隊は必ずここにも攻めてくる。そのとき君は、セルディンやクラウディアのために戦うべきだ。君がわたしたちと行動を共にしていないからと言って、仲間ではないということではない」

「そうだ。共に闇を倒し、光の国の再興を目指す同志に変わりはないぜ」

ブラツキーはハライトと、ウインクするレギオンを見比べ、それからルシータを振り返った。

「ブラツキー、ここに残って」

微笑はやわらかだ。

「大丈夫。わたしたちは必ずダーク王を倒す。あんたにはその間、散らばったブライトキングダムの人々を、この村に集めて欲しいの。そして、ブライトキングダムが復活したら、彼らと一緒に来て」

少しの沈黙ののち、ブラツキーは言った。

「わかった」

そして明るく笑い、

「オレはここで、自分のやるべきことをやるよ」

それから順番に、三人の手を両手で握り締めた。

28・金色のレギオン

まだ雪は残っていたが、春は近づいている気配があった。
ルシータたち三人は、いよいよダークキングダムに向かって旅立つことにした。

「ほほう。馬子にも衣装とは、このことじゃな」
バールが三人を見て、にやにやと笑う。

クラウドディアの縫ってくれたレギオンとハライトの衣装の胸の部分には、車輪と葉がデザインされた刺繍がなされており、ルシータのそれには車輪のない二輪馬車と、それを守る光が、見事に刺繍されていた。

その上に、それぞれの鎖帷子とマントをつけ、光の剣を佩いたその姿は、どこから見ても立派な戦士だ。

「ハライトが素敵なのはわかっていたけど、レギオン、あなたってハンサムだったのね！」

浮かれたベルナデットが大げさに驚いてみせた。

「ベルナ、迷っちゃう！」

「何を迷うんじゃ？」

怪訝そうに片目を瞑りながら聞くバールに、ベルナデットはまた大きく目をむいて、
「もちろん、どっちの肩に乗っていくかよ。——ああ！どっちにしよう」

ルシータが慌てて中に入る。

「ちよっと待ってよ。ベルナデット、あんたも来る気？とめてよ、バール」

だがバールは涼しい顔である。

「ま、いいじゃないか。何かの役には立つだろうて……おお、ほれ、『金の車輪』もうまく見つけたろうが」

すると、『金の車輪』レギオンは言った。

「今ごろ気づくたあ、許せんね。ベルナさんよ、あんたの乗り物は、あっち」

その親指の先に『銀の車輪』ハラートがいる。

銀の光に包まれたかのような全身に、彼の赤毛が際立っている。

その端正な面立ち、彼の薄青い神秘的な瞳に見つめられれば、きつとどんな者も——男も女も、奇跡に出遭ったと思うに違いない。

（実際、こんなに美しい戦士はいないわね）

幸せそうな妖精の笑顔を見つつ、ルシータもハラートに感心したが、それでも気になったのはやはりレギオンだった。

今の彼に”死神”を見出すのはむづかしい。

『金の車輪』は金色の光を放ち、自らが輝いているように見えた。ハラートが月なら、レギオンは太陽だ。

（彼の波打つ金髪——姉さまは、あの髪に指をからめてキスしたのかしら？）

初めてルシータの心がうずいた。

「やっぱり、ルシータに乗っていく。だって、わたし、ルシータの守護妖精だもん」

ベルナデットの声に、ルシータははっと我に返った。

「自分で歩く、っていう選択はないのか？」

半分あきれたようにレギオンが言う。

「飛ぶっていう選択とか」

ハライトも乗ってきた。

「ないの。この羽根は、妖精の証拠についてるだけだから」

つんとして答えたベルナデットに、二人とも楽しそうに笑っている。

そのとき、バールがじっと自分を見つめているのに気づいて、ルシータはちよつときまぎした。

「何？ 何か変？」

ルシータが若い女性だということを配慮してか、クラウディアは、ルシータの衣装の襟ぐりと肩口のところに白いレースをつけてくれていた。

それがいつものルシータのイメージと少し違って、女性らしさがかもしだしてくれていたのである。

さらに水晶の鎖帷子は、武具というより胸元を飾る宝石そのもののように輝いている。

突然バールが、よよよと泣き崩れ、

「アルタミラ王妃に生き写しじゃ……のう、『金の車輪』。そなたもそうは思わぬかのう」

だがレギオンは、ルシータの方は見ず、軽い調子で答えた。

「いや。アルタミラはもっとエレガントだったからな。そんなふう
に男の格好をしたことなど、一度もない」

いつもなら取り合わない。

本当のことだ、笑って平然と受け流す。

だが今は、なぜかそれができなかった。

悔しさが口について出た。

「悪かったわね、こんな格好で！ でもこれがわたしよ！ 男顔負けの女剣士だわ——ほうつというて」

そして、涙まで出てきた自分に驚いて、ルシータは慌てて顔を背けた。

背中でレギオンが驚いた気配があり、ハライトの視線が自分の心をすべて見透かした気がした。

咄嗟にルシータは明るく振り返り、笑った。

「——さあ、出発しましょう。くだらないことを言ってる時間はないのよ。ダーク王を倒すんだから」

29・森の木漏れ日

数時間後、セルデインが贈ってくれた馬に乗り、彼らは北へ向かっていった。

低木の茂みを歩く速度で行きながら、ルシータはハラートに話しかけた。

「ハラート、ダークキングダムまで安全に行ける？　ダーク王や闇の兵隊たちに見つかからないように」

「なるべくならそうしたいところだが……すでにダーク王は光の封印が解かれたことを知っている」

「だから、むつかしいというわけか」

ハラートはうなずいた。

「おそらくあちこちに兵士を放っているはずだ。それに、サーグという闇の魔術師がいる。彼は厄介だぞ」

「というと？」

「サーグは闇の魔物を自在に操る力を持っているんだ。ダーク王でさえ、サーグの力は警戒していた」

「闇の魔物？」

ルシータの胸元で、露に姿を変えたベルナデットがぶると震える。

ハラートはうなずき、

「ああ。いろんな魔物がいる。ダークキングダムの闇の中では、邪悪な力を持つものが絶えず生まれてくるんだ。

たとえば、動物にとりつき、血や精気を吸ってしまう魔物。それから、人の欲望を見抜き、それをどんどん大きくさせて破滅に誘い込む魔物。人の思い出を利用して、幻覚で惑わせる魔物もいる。

サーグはそれらを、必要に応じて抑えたり、召集したりできるん

だ」

馬を走らせて三日目の午後、彼らは深い森へと入った。

まだ春が完全に来たとはいえない季節なのに、緑が濃く、いくすじもの木漏れ日が木々のこずえからまっすぐに射し込んでくる。

「美しい森ね……ここは、元ブライトキングダム？」

「うーん。なんか、懐かしい気がする。ベルナのルーツは、きっとここだわ」

今は姿をあらわして、ルシータの後ろで馬にまたがっているベルナデットである。

「だがもう少し進めばダークキングダムだ。そこからは壮絶な光景に変わる——言っておこう、ダークキングダムには生きた木などない。森に満ちた瘴気の中に長くいると、命の危険さえある」

「えへん」

そこでベルナデットが咳払いをし、

「みなさん、わたしが妖精だつてことを忘れてもらっちゃ困るわ。わたし、光のシールドが作れるのよ」

得意満面の笑みを見せる。

「ほー」

と、レギオン。

「素晴らしい。なぜ今まで黙ってたんだ？ 十分役に立つじゃないか」

妖精は肩をすくめ、

「だって今までシールドが必要だつたことがある？」

そして付け加えた。

「残念ながら、たいした力はないの。せいぜい水と空気を防げる程度」

「上出来、上出来。頼むわね……じゃあここらで休んでいく?」

ルシータの言葉に、皆馬を降り、最後の作戦を練ることにした。森を一気に抜けたら、そこはもうダーク王の居城なのだ。

(アリーナ——君はどうしている?)

狂気の王が、娘のアリーナにだけは愛情をそそでいることを、ハライトは知っていた。

それゆえアリーナも、父王の元を離れなかったのだ。

その王を、今から自分は仲間と共に、倒す。

ここまできても、ハライトには「自分の心に揺るぎはない」と言い切る自信がなかった。

自分はとつともなく情けない卑怯者であるという思いが、ハライトの苦悩を広げていた。

「思い出してきたわ、あのころのこと」

木の根に腰掛けていたルシータが、ふと睫毛を伏せた。

「わたし、よくアルタミラ姉さまと森へ来たっけ。幼いわたしが木の根につまづいて転びやしないかと、いつも手を握ってくれていた……とても優しい手だったわ」

レギオンは草の上に寝転がっている。

上から降ってくる木漏れ日に目を細めながら言った。

「おれが彼女と出会ったのも、森の中だった」

「王妃様と?」

「ああ。泉で水を飲んでいたおれの耳に、澄んだ美しい笑い声が聞こえた。その声に導かれるように行くと……彼女がいた。その側には多分、ルシータ、君がいたんだろうな。おれが近づくと、彼女は振り返ったんだ、長い黒髪に光を躍らせながら——そして微笑んだ、天使のように」

ルシータは黙っていた。

そんな昔からレギオンと会っていたということが、信じられない。その驚きは、レギオンの記憶の中に自分が残っていなかったことを悲しむことすら忘れさせた。

今も、レギオンの心に生きている、アルタミラ姉さまの笑顔。どのみち自分はその思い出には勝てない。

「遠い昔のことだ」

ルシータの沈黙の意味に気づいたようにレギオンは言って、自ら話を折ろうとした。

それをルシータはわざととめた。

辛くても、切なくても、なぜかこのまま話を続けたかったのだ。

「姉さまはあんたを愛していたわ、レギオン。わたし、あんたの記憶の中の姉さまを、もっと知りたい」

するとレギオンは、ルシータをじつと見た。

その瞳は困ったようであり、寂しそうでもある。

だが結局彼はごまかし笑いをし、手をあげて言った。

「やめよう。——おれはこれでも、デリケートなんだぜ」

30・森の中の小競り合い

「しっ！」

そのとき、ハラートが身を硬くして、皆に聞き耳を立てるよう合図した。

一瞬で緊迫する。

だが四人が立ち上がったときにはすでに、黒馬に乗った闇の兵士の集団が、そのまわりを取り囲んでいた。

かろうじてベルナデットだけは、露に姿を変えてどこかに消えたようだ。

三人は、とつさに鞘から抜いた剣を構えて対峙した。

隊長と思われる、黒兜をつけた男が進み出て問う。

「おまえたち、ここで何をしている」

そして、ハラートの赤毛に目を留めた。

「ほほう、これはこれは。もしや、ハラート戦隊長なのか？」

にやりと笑い、男は兜を脱ぐと、馬上で頭を軽く振った。

が、柔らかそうな黒髪は、汗に濡れた額や頬にへばりついてたまだ。

ハラートと同じくらいの年ごろのその男は、髭のないすっきりした細い顔をしていたが、目だけは鋭く光を放っていた。

「レゴラス——！」

その男は、かつてハラートのライバルとでもいうべき男だった。

ハライトにはそんな気はなくとも、レゴラスの方が常にハライトに対抗意識を燃やし、何かにつけて挑んできた。

ハライトがアリーナに推されて戦隊長の任についた日、レゴラスはハライトに、永久に消せない敗北感を植え付けられたのだった。

レギオンが闇の兵士に飛びかかろうとするのを、ルシータが制す。
「待つて！ まだ相手はわたしたちのことを敵だと思ってない。もう少し様子を見ましょ」

剣を下ろすと、ハライトはレゴラスの前に進み出た。

「レゴラス、聞いてくれ。今のままでは世界はだめになる。詳しいことは話せないが、どうか通してくれないか」

ふん、と鼻を鳴らすと、レゴラスは、

「どんな理由にせよ、おまえは黙ってダークキングダムから脱走したのだ。おまえはもう戦隊長でも何でもない。」

——そうだ、ハライト。いいことを教えてやろう。

アリーナ姫は、新しい戦隊長ナビル將軍と結婚したぞ。もうじき子も生まれる」

ハライトは、まるで雷に打たれたかのように直立し、その顔は見る見る色を失っていった。

さらにレゴラスは、馬から降りると剣を抜き、

「ハライト、決着をつけよう。今ならおまえを倒しても、おれの罪にはならん——おまえはただの脱走兵だからな！」

そうして振り上げた剣は、ルシータの剣にとめられた。

二人の剣から、光が飛び散る。

「くそつ、邪魔をするな！」

「やめて！ さっきハライトが言った通りよ、このままだと世界は

闇に包まれてしまう。わたしたちを通しなさい！」

「ほう」 レゴラスの瞳がきらりと光った。

「やはりおまえたちは、光の手先か」

そして闇の兵士たちに命じる。

「やれ！ こいつらを殺すのだ！」

一斉に馬を降りた兵士たちが剣を抜いて三人に迫ってきた。

彼らの剣は刃までも黒く、そこから時折、ぼおつと赤い炎が上がる——魔剣だ。

「おい、注意しろ！ あれに触れるなよ、どうやら火傷^{やけど}じゃすまないぜ！」

レギオンの声にルシータはうなずいたが、さっきから生気を失ったようなハラートが気になって仕方がない。

「ハラート、どうしたの？ しっかりしてよ！」

そう言う間にも、闇の兵士がルシータに斬りかかってきた。

ルシータは右に身をかわしながら、ハラートにわざと体を当てて叫ぶ。

「ぼんやりしないで！ 死にたいの？！ ——しっかりなさい、『銀の車輪』！」

と、ハラートにかかっていった二、三人の兵士が、いちどきに胴体を薙^ながれて倒れ伏した。

振り向いたルシータは、瞬時にして燃え上がったハラートの剣気を見たのだった。

彼のオーラと一緒に、剣までもが銀色に光りだしていた。

（オーケー。いつものハラートだわ）

レギオンといえば、彼はいつものごとく派手に立ちまわっている。

彼の手の中の剣も黄金に輝き、容赦ない音を立てながら、次々と相手を倒してゆくのだ。

リズミカルに、いかにも楽しそうに剣を振るうのが、彼流だ。

レギオンの力により、折れた魔剣が四方八方へと飛び散っていた。

「！」

ルシータの足元を狙い、レゴラスが剣を走らせた。

とっさに飛び上がり、それをよける。

それから地面に転がって、さっと立ち上がった。

「女と思って、馬鹿にしないでよっ」

ルシータの中で、女剣闘士の血が沸き立ったかのように、その動きがぐんと加速する。

光の剣は薄い青を帯びた輝きを放ちながら、空間を縦横無尽に走り出した。

その間合いに入った兵士は、ことごとく斬られ倒れてゆく。

「くそっ……」

まずは力の弱そうな女から、と考えたレゴラスは自分の読みがはずれたことに焦り、後ろを振り返った——と、そこにいたのは——

レゴラスは、その一瞬で、今までハライトに挑んできた自分が間違っていたことを知った。

ハライトの本気の殺気というものを、もしもつと前に見ていた
ら――

それ以上考える前に、レゴラスの頭は茂みの中に転がっていた。

31・ 白い流れ星

森に静寂はもどったものの、血の匂いがあたりに満ち、三人は休息の場所を変えるしかなかった。

ダークキングダム森に入る前に、一泊することにして。

「近くに池がある。体を洗おう」

「案外、綺麗好きなのね」

レギオンをからかったつもりはない。

だがいつもなら一言返してくるレギオンが、今は何も返してこなかった。

もうあたりは人の区別がつかぬ暗さである。

三人は共に池で体を洗い、焚き火をたいてそれを囲んだ。

黙々と夕食を取る間、元気なのはベルナデットだけである。

彼女はひとしきり、さっきの戦闘の凄さを物語り、それから炎に照らされているルシータに言った。

「ねえ、ルシータ。そうしてると、とっても綺麗」

「は？」と言って顔を上げると、ベルナデットがにこにこしている。

「だって、いつも髪を後ろで束ねてるでしょ？　そうやってほざいてると、綺麗だよ」

ルシータは濡れた髪を乾かそうと、櫛を入れつつ炎の前に座っていたのだ。

亜麻色の髪がゆるいウェーブを描いて胸の上を覆い、腰のあたりまで流れていた。

濡れているせいで、黒髪にも見える。

「つまらないこと、言わないで」

そう言いながらも、目はレギオンをちらりと見る。

彼は焚き火をはさんでルシータの前に座っていたが、先ほどから絶対に目を上げようとしなかった。

ハライトもだ。

ハライトも目線を落としたまま、一言も口をきかない。

理由はわかる。

さっきの闇の兵士から聞いた何かが、ハライトの心に引っかかっているのだ。

そしてレギオンは、彼が衝撃を受けたわけを追求すべきか迷っている――。

だが、レギオンの口から出た言葉はまったくルシータの予想を外れていた。

「今夜はもう休もう。明日は一気に森を抜けるぞ」

ハライトが顔を上げ、ルシータも驚きを隠さずレギオンを見た。

「おまえたちは先に休め。おれはやつらを見張っている。あとで、ハライト、おまえを起こすからな」

「あ……ああ。わかった」

ハライトは横になると、マントを被った。

「わたしも寝よう」と

言うなり妖精はまた露になって、どこかへ消えた。

「ルシータ。おまえも寝ろ」

やはり顔は見ないで言う。

ルシータは静かな声で返した。

「まだ髪が乾いてないの——レギオン、先に寝て」

炎の照りかえりが、レギオンの金髪に濃い陰影を作り、彼の顔をふちどっている。

まるで苦悩するような表情が浮かんで見えるのは、気のせいだろうか？

「ルシータ——」

いきなりレギオンが自分の名を呼び、ルシータはどきりとする。以前にはなかったことだ。

自分はどうしてしまったのだろうか？

「おれはなぜあるとき、ブライトキングダムを離れたんだろうな？何があっても、アルタミラの側を離れるべきじゃなかったのに。おれは、ブライト王を憎んだ。光の国がどうなろうと知ったことじゃない……と。」

だがおれは間違っていた。おれは、離れるべきじゃなかったんだ。そうして顔を上げ、彼は今夜初めてルシータの顔をしっかりと見た。

「ルシータ、君はおれの記憶の中のアルタミラにそっくりだ。あるとき、君はまだほんの少女だったのに」

（——どういふつもりで、そんなことを？）

ルシータがそう考えている間にレギオンは横になって、マントを被ってしまった。

「じゃあ悪いが、頼む……適当に起こしてくれ」

ルシータがため息をついて夜空を見上げると、白い星が流れて消えた。

32・王女の願い

サーグの黒水晶には、レゴラスら闇の兵士が戦っている光景は映ったが、相手はまばゆい光に包まれた影のようにしか見えなかった。その光の影たちは、闇の兵士とは比べ物にならないぐらい、強靱で速い。

「これは……」

それを見ていたナビル將軍も、声なくただ目を見開くばかりだ。レゴラスの、恐怖にゆがんだ表情のまま落とされた首が黒水晶の中に大きく映しだされると、將軍の怒りは爆発した。

「おのれっ、光の戦士め！ このナビルが討ちとつてくれよう。待っているがいい」

彼らは、昨日帰ってこなかったレゴラスの一小隊の行方をサーグの黒水晶で捜していて、事の顛末を知ったのだった。

「まずは、ダーク王にご報告を」

ナビルとは対照に、サーグが冷静に言った。

「それにこの光……これは以前、ハライトを捜していたときに映った光と似ている。もしかこの中に、あの男もいるやもしれませぬぞ」

「何だと？」

その言葉にナビルは目を光らせた。

そして小さく舌打ちすると、

「アリーナはまだ、やつを忘れてはおらんようだ。もうじき子も生まれるというのに」

とため息をつく。

サーグは、くつと抑えた笑いを喉の奥で立て、

「なるほど。心まで自分のものにしたいと言われるのですね」

白い瞳を大きく開いた。

「当然だ。アリーナはわたしの妻なのだぞ」

（――何をおっしゃる。あなたは毎晩、亡霊を抱いておいでだ）

心の中で嘲笑い、サーグは、彼自身は少しも気づいていないらしい日に日にやつれていくナビル將軍を見やる。

彼はやはり胸を張り、だが目の下には真っ黒なくまを作つて、にやりと口をゆがめた。

「もしもやつが光の戦士なら、必ずやおれが殺してやる。そして喜んでその首を妻に捧げよう」

そうして魔術師の棲家を退出していく後ろ姿を、サーグはうやうやしく礼を払いながら見送った。

それから闇の魔物を集めると、彼らに向かって命令した。

「光の戦士がダークキングダムの森に入ったら襲うのだ。皆殺しにしろ。だがやつらの光の剣には注意するのだ。あれに少しでも傷つけられれば塵になってしまうぞ」

ざわざわざわ……と、黒煙のような闇の魔物たちは魔術師の背後でしばらく漂っていたが、やがて命令を遂行すべく、だんだんと窓から空へ姿を消した。

一方、闇の神殿から城に戻ったナビルは、まっすぐアリーナの部

屋へ向かうと、ノックもせずに扉を開けた。

侍女たちが主人に気づいて、慌てて膝を折り、頭を下げた。

「何のご用ですか？ ノックもせずにいきなり入ってこられるとは」

臨月の体を白いドレスとガウンに包み、それでも以前にも増して美しくなったアリーナは、夫に対し、声を尖らせた。

だがそんなことには躊躇もせず、ナビルはアリーナの側へ寄ると、抱き締めようと両手を広げた。

アリーナはすつと身をかわすと、

「昼間はわたしに触れない約束でしょう。それより早く用件を言うて」

ナビルは眉を下げ「やれやれ」とつぶやくと、すぐ勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「アリーナ。ハライトを見つけたよ。彼は、やはり光の戦士になっていた。そしてこちらへ向かっている」

すでにナビルの頭の中で、ハライトは光の戦士に間違いないと確信されていた。

そしてそれを一刻も早く妻に知らせることで、アリーナの反応が見たかったのだ。

「何ですって？」

思った通り、アリーナの表情がこわばり、声が震えている。

その様子に満足を覚えつつ、ナビルは、

「今からわたしが行って倒してくる。君に最高のプレゼントができそうだな」

と言った。

「だめよ！」

そう叫ぶとアリーナはナビルの背にすがった。

「だめよ、殺さないで、ナビル。お願い……わたしが殺したいの。だから、ハラートを生きたまま連れて帰って」

ナビルは全身が溶け出す感覚に小さくうめくと、頭を後ろへそらし、目を閉じた。

今まで自分からは抱きついたことのないアリーナが、こうしてすがり、嘆願している。

——何という、快感！

ナビルはアリーナの手を取ると、口付けた。

「いいだろう。彼は生きたまま連れ帰ろう……ただし、君がわたしの目の前で、やつを串刺しにするといいことを約束してくれたら」

「約束するわ」

恍惚とした顔で、彼女は言った。

「ハラートを殺すこと——それだけが、わたしの願いなの」

ナビルはうなずくと、ただちに部屋を出ていった。

33・動き出す闇の魔物

朝からレギオンはルシータの顔を見ようとせせず、ハラートは一言もしゃべらない。

ルシータは、ひとり気を遣って明るく話しかけていたが、もう限界だった。

「何なのよ、あんたたち！ いい加減にして！」

森中に響くぐらい、大きな声だった。

「やる気がないなら、もどるといいわ！ こんなんで、ダーク王に勝てるわけない……」

何が”光の戦士”よ——もういい、ひとりで行くわ！」

そうして後ろにベルナデットを乗せたまま、馬を駆った。

「おい、ルシータ！」

レギオンの声もすでに届かない。

飛ぶように走っていつてしまった。

へまをした、というように頭に手をやり、レギオンは自身に悪態をついた。

「まったく、男二人が何をやってるんだ！ ——ああ、ちくしょう！」

横でハラートが深い息を継ぎ、力なく笑う。

「すまない。本当に情けない……ルシータは頑張ってくれているのに」

「ああ、おれも自分の弱さに辟易するさ。^{へきえき}ハラート、とにかくルシータに追いつこう」

それから二人とも懸命に馬を駆り、ルシータに追いつこうと試みたが、結局ダークキングダム森の入り口まで来てしまった。まわりには、誰の気配もしない。

「これは相当怒らせたらしいな。ルシータは、わたしたちを完全に見限ったようだ」

「……ったく。あいつ、本当にひとりでダーク王を討つ気か。信じられん」

さすがに二人も落胆を隠せず、その先を眺めやる。

そこからは線を引いたように、まったく世界が違っていた。緑の森はぶつくりと終わり、真つ黒な葉をつけた高い木々の森が、まるで洞窟の穴のように口を開けて続いているのである。

瘴気であるうか、煙のような白いもやも漂い、光も射さないその森は、まさに死の森だった。

「ルシータ！ おい、いるのか、ルシータ！」
だが返ってくる声はない。

ハラートが馬のひづめの跡を見つけ、
「ルシータの馬だ。森の中へ続いている」
と指差す。

「どうやらやつぱり、ひとりで行ったらしいな……まずいぞ、ベルナデットもないし。一気に駆け抜けるか」

しかしハラートは首を横に振ると、
「いや、ダークキングダムの馬でなければ持たない。瘴気にやられてしまうだろう」

——レギオン、これを」

そう言っただけから取り出したのは、薄いケープだった。

「これで鼻と口を覆うんだ。我々はここを通るとき、いつもこれを

使う。ただし、ここからは徒歩だがね」

「わかった……ルシータ、無理するな。無事でいてくれ」

レギオンはケープを受け取ると、しっかりと顔に巻きつけ、いよいよ二人は森に入ってしまった。

「ルシータ……。ほんとに気味悪い森ね。何にも見えないし」

ルシータたちを包むベルナデットのシールドは、ほのかに光っていたが、先を見とおす灯にはならない。

いやむしろ、手元ばかりが明るいために、かえって森の中が見えないのだった。

「ええ。走り抜けるなんて、とうてい無理だったわね。あんたのシールドがあつてよかった」

「でも、ねえ、ルシータあ……やっぱり二人を待った方がよくない？」

恐る恐るそう言うベルナデットに、だがルシータは返事をしなかった。

ずっと、心の中で怒っていたのである。

（——レギオンの馬鹿。ハラートの弱虫。あんたたちに光の戦士の資格なんてないわよ）

そのとき闇の中で、さらに濃い闇が動く気配がし、馬がいなくて前足を上げた。

「きゃああん……！」

「落ちないで、ベルナデット！」

とっさにベルナデットを引き上げなおしてから、すぐさま馬を降りたルシータは、剣を抜き身構えた。

「ベルナデット、わたしにシールドを！ あんたは入り口に引き返すのよ、早く！」

「ええっ?!」

「早くシールドを！」

「え——えいっ」

引き返せと言われて戸惑ったベルナデットだったが、言われたとおり、ひとまずルシータにシールドを張った。

ルシータの全身を薄い光が取り巻いたとき、すぐにルシータは馬の尻を叩いて、

「レギオンたちに知らせて！」

と叫んだ。

「……きゃん！ ルシ——」

見る見る光に包まれたルシータが遠ざかってゆく。

返事をする余裕もなく、ベルナデットは森の入り口に向かって走り出した馬にしがみつくなかった。

（——ルシータ、無事でいて！）

そう祈りながら。

34・懐かしい手

「ふーむ。女……か」

サーグは、黒水晶に映ったルシータを見てつぶやいた。

今、部屋の中で、先ほど放った闇の魔物たちの様子を見ていたのだが、魔物たちが取り囲んだせいでまぶしかった光がおさまり、光の戦士の姿がはっきりと黒水晶に映ったのだ。

そして彼は、もっと重要なことに気がついた。

「この女、もしかやアルタミラ王妃の妹か？」

サーグは、ブライト王とアルタミラの婚礼の日を思い出していた。たしか王妃の横に、頭に花の冠を載せて座っていたのが彼女だった。

二人が瓜ふたつだったことは、その席でも話題になった。

「名は……ルシータといったか」

そこで彼は大きく息を吸い込むと、心の中で魔物たちに命じ始めた。

『おまえたち。その女を殺すな。光の神殿におびき寄せるのだ。』
『思ひ出喰い』よ、おまえに任せよう』

それに応じる魔物たちの気配をとらえ、サーグは白目をむいてにっと笑った。

ルシータは光の剣を構えていたが、闇は一向に襲ってこなかった。もちろん姿が見えるわけではない。

だが、明らかに引いてゆく気配さえ感じるのだ。

不思議に思い目を凝らすと、暗い森の中、思った通り、黒い渦巻きが消滅していくのが見えた。

そしてその向こうからこちらへ歩いてくる人影――。

それが誰かを知ったルシータは、驚きのあまり凍りついた。

「サイラス?!」

それはまぎれもなく、ルシータの恩人サイラスだった。

大きな頭、頑丈そうな肩の輪郭が、闇の中にぼうつと浮かび上がる。

「ルシータ、早くこっちへ! そこは危険だぞ」

懐かしいその声に、涙さえ出そうになったルシータだが、サイラスは死んだのだ。

いぶかる気持ちが先にたったのは自然だった。

「サイラス――なぜ? なぜダークキングダムの森に?」

するとサイラスは優しい声音で、

「おまえを助けに来たんだよ……このままだと、おまえはこの森で死んでしまう。」

さあ、こっちへ来なさい。安全なところまで、わしが連れてゆく。そして片手を差し伸べたのだ。

ルシータは信じた。

サイラスは自分を助け、導くために来てくれたのだ。

ルシータは、ついに懐かしいサイラスの手を取り、導かれるままについていった。

サイラスの手は、記憶の通り肉厚で、だが身が震えるほどに冷たい。

やがて目の前に大きな、空に伸びるように尖った屋根のある建物が黒い輪郭を持って現れ、ルシータは思わず、

「ここは……？」

と聞いた。

「覚えていないかい？ 光の神殿だよ」

サイラスはそう答え、ルシータの手を握ったまま扉を開け中に入る。

「なぜ……なぜサイラスが知ってるの？」

そのとき、サイラスは振り返ってにやりと笑った。

まわりの闇がぐにやりとゆがみ、神殿の白い柱をよこぎっていくつもの黒い影が飛びまわるのをルシータは見た。

サイラスが頭から消えてゆき、つながれていた手からルシータの全身に闇が広がって、ルシータは悲鳴を上げて意識を失った。

35・アリーナの幻影

闇の中からベルナデットを乗せた馬が突然あらわれたとき、二人は両手をあげて何とか馬を止めた。

「レギオン、ハラート——ルシータが闇の魔物に襲われたわ!」

ベルナデットは息も乱れたまま、急いでそれを伝えた。

「何だつて?!」

二人は同時に叫び、森の奥を見やった。

「ベルナデット、わたしたちにもシールドを張ってくれ。レギオン、行こう!」

ルシータの名を呼びながら森を進む二人に、再び闇の魔物たちが集結し襲ってきたのは、間もなくである。

二人のまわりに闇が蠢き、不気味な声がかからも下からも響いてきた。

時々赤や黄色の目のようなものが光るが、それ以外に実体は見えず、二人は敵をつかめない。

抜き身の剣も力をみなぎらせて輝いてはいたが、斬りかかれないのではどうしようもない。

二人は背中あわせに立ち、闇に剣を向けながら、ただその奇怪な声を聞いていた。

「くそつ、どこからだ。どこから来る? ハラート、見えるか」

「いや、見えるはずはない。相手は闇だ」

「なんてこった。こりゃ絶対的に、不利だぞ!」

そのとき、ハラートが言った。

「——目を瞑って」

「何だと？」

「目を瞑るんだ、レギオン。感覚に頼れ。気配を感じるんだ」

「感覚だと？」

「やるんだ！」

それは無謀なようにも思えた。

しかしどのみち闇の中だ。

レギオンは腹を括った。

「よおし。……ハラート、おれに近寄るなよ。間違つてバツサリやりたくないからな」

そう言うのと、いつもの雄叫びを上げて、敵の気配に向かって斬り込んでいった。

あたり構わず振り回すレギオンの剣にふれて、闇の魔物たちは次々に鋭い声を上げて消滅していく。

ハラートは目を瞑ったままその場を動かず、ただ自分の身に迫ってくる気配を断ち切っていた。

その正確な剣により、闇は彼を覆うことができない。

ついに魔物たちは退散を決めたようだった。

悔しさに満ちた声を発しながら、ダークキングダムのある方角の空へと消えていった。

「怪我はないか、レギオン」

「ああ。多分な」

そのとき、前方に白い光が見えた。

その光に包まれて、ゆっくりと歩み寄ってくるのはまぎれもない——アリーナだった。

「アリーナ……」

彼女は変わらず美しかった。

胸元にドレープのある白いドレスも、その細腰を飾るダイヤモンドのサシェも、彼女自身の美にはかなわぬ。

結い上げられた黒髪はサイドのみまっすぐに垂れ、陶器のような肌をなぞっている。

彼女は口を開かず、だが恨めしい声ははつきりとハラートに届いた。

『ハラート。どうしてわたしを置いて出ていったの……一言の別れの言葉もなく』

「ハラート、あれは誰だ。知っているのか?！」

レギオンが問う。

が、ハラートは凍りついたまま、答えない。

彼女の瞳は、暗く、怒りに燃えていた。

『おまえは本当に冷たいのね。——待っていなさい、必ず、復讐するから』

アリーナの幻が消え去ったとき、ハラートはその場にくずおれた。

「アリーナは……アリーナは、わたしが光の戦士であることを知らない」

「アリーナ? ——そうか、ダークキングダムの王女だな」

レギオンも、ついにその名を思い出した。

苦悩に顔をゆがめつつ、ハラートはほとんどうごとのように言った。

「わたしは彼女を守ってきた、ずっと昔から。それがわたしの幸せ

でもあった。

……だから、どうしても、別れを告げられなかったのだ」

衝撃が、レギオンを打った。

今までこらえてきたハライトへの疑念が、もう抑えきれないほど膨れ上がる。

「ハライト、なぜいまさらそんなことをおれに話すんだ？ おまえは、おれたちが今からやろうとしていることをわかっているのか？ おれたちは闇を——ダーク王を討とうとしているんだぞ！」

36・魔眼の囚人

少しだけ、ハラートの目に正気がもどったようだった。

「わかつている」

その一言だけを、はつきりと発する。

だがレギオンは否定した。

「わかつている？ いや、おれにはそうは見えない。——無理だ。今のおまえに闇を討てるはずがない」

「レギオン、わたしは……」

「無理だ！」

とうとうレギオンは爆発し、ハラートを怒鳴りつけた。

「討てやしない！——なぜだ。なぜそんな生半可な気持ちでついてきた？ おまえに本当にダーク王が討てるのか？ 闇の王女を殺せるのか？」

体中をドロドロしたマグマが一気に伝い落ち、メツキをあっさりはがしてゆく。

ハラートに対し、レギオンの心はどす黒い悪意に渦巻いていった。

「闇の中で王女の幻を見て決心が揺らいだか、懐かしさで一杯か？！」

「答えろ、ハラート。おまえの心は今、どっちにある。闇か、光か？！」

「動揺したのは認める。だがそれは、光のために、君やルシータと共に戦おうというわたしの思いとは関係ない。」

わたしは『銀の車輪』だ。君と同じ、光の戦士だ……！」

「は！ おれは裏切り者と一緒にされたくはないぜ！ おまえは裏切り者だ。ダークキングダムに忠誠を誓っておきながら、あっさり裏切った。」

——そうだ、またおれたちを裏切らないという保証がどこにある？！」

まるで斬りかかってきそうなレギオンの勢いに、ハラートはあきらめたか、

「君はわたしを信じてはくれないんだな」とぼつりと言った。

「ああ」

もう感情を隠そうともせず、レギオンは後ろを向いた。

「ここからはひとりで行く。ついてくるな。だが、そうだな——おまえがその剣で闇の王女を斬ることができたら、そのときはおまえを信じてやるぜ」

言い放ち、レギオンはひとり歩き出した。

だがいくらかも行かないうち、ハラートの悲しみの矢が背中に突き刺さり、レギオンは結局自虐したのを知った。

感情を解放したことで、心は少しも楽にはならなかった。

むしろマグマがその地表にもっと醜い跡を残すように、レギオンの心に残ったのは、疑惑、不満、怒りといった暗い感情だけだった。

それはもちろん、彼自身の過去からも噴き上がってきた。

「真実、誠意、偽りのない愛——そんなものがどこにある？ 誰もが簡単に裏切ってゆく世の中で、どうやったらそれが見つかるのか」

るのだ。

約束も誓いも、すべて無意味だ。すべてむなしい——信じる方が馬鹿なのか？

それなら愛など、口にしなけりやいい……あのときの思いは何だったのだ。

愛しているという一言を、おれは信じたのに」

一足ごとに闇が覆い被さってくるような気がし、事実、体は重くなっていく。

もう自分がどこにいるのかわからない、何をするためにこんなところにいるのかも。

レギオンはついに膝をつき、あまりの息苦しさにうめき始めた。頭の中がぐるぐると回り、視界にはもう何も入らない。

そのとき、レギオンは強烈な視線を感じ、顔を上げた。

——目。

大きな二つの目だ。

それは黒い鉄仮面からのぞく、血走った恐ろしい眼であった。

『——レギオンよ……』

「うっ！」

その轟くような声はレギオンの能をえぐり、剣を貫くような痛みを彼に与えた。

『——見つけたぞ、『金の車輪』。おまえの心の闇が、わたしを引き寄せたのだ。』

おまえの心は闇そのもの。不安と、怒りと、疑念が渦巻いているな……。

さあ、思い出せ、思い出すのだ。おまえを裏切った者は誰だ。おまえから幸せを奪った者は誰だったのだ」

レギオンの意識が過去へとさかのぼる。

そこには、命をかけてブライト王に仕える光の戦士である自分がいた。

それを共に見ているかのように、ダーク王の声が響く。

『おまえは忠実にやつに仕えた。だがその報酬は何だったのだ……金の車輪』よ、思い出せ』

レギオンは頭を抱えたまま、搾り出すようにうめいた。

「略奪……だ。王はおれからアルタミラを奪った」

『そして女はおまえを裏切った』

レギオンの中で、笑顔のアルタミラが、まるで鏡を割ったように音を立てて粉々に砕け散った。

「なぜだ、アルタミラ！ おれだけを愛していたのに！

——王妃の地位に目がくらんだ、嘘つきめ！」

低く、残酷に、ダーク王が笑ったようだった。

『なぜ裏切り者たちのために戦う？ おまえを苦しめ嘲笑った者たちを、今度はおまえが苦しめてやろうとは思わぬか。』

——我が戦士になれ。闇の戦士となって、やつらを見返すのだ。復讐をしよう。わたしが力を貸してやる。さあ、ここへ来るかい、レギオン』

37・疑惑

「あつ、ハラート、無事?!」

呆然と立ち尽くすハラートを見つけ、ベルナデットが声をかけた。
「黒い影がたくさん空に飛び上がって消えていくのが見えたから…
…ねえ、大丈夫? レギオンとルシータはどこ?」

ハラートは我に返ると、

「すまない、ベルナデット。実は、レギオンを怒らせてしまった。
彼はひとりで行ってしまったよ。」

それより、ルシータを捜そう。きつとうまく魔物から逃れている
さ」

「任せて!」

驚いたことに、ベルナデットは自信たっぷりだ。

「まだルシータのシールドは消えてない。だから居場所を感じるこ
とができるの」

さすがに目を丸くし、ハラートは聞いた。

「じゃレギオンの居場所もわかるのか? わたしがもしいなくなっ
ても、わたしの居場所も?」

すると妖精はうなずき、

「わかるわ。シールドが消えてない限りね。シールドは時間がたて
ば消えちゃうの。でもまる一日はもつよ」

えへんと、鼻の頭を上げた。

「ベルナデット、すぐにルシータの居場所を教えてくれ。とにかく、
今バラバラなのはまずい」

と、そのとき、ハラートの耳はかすかな物音をとらえ、すぐに、
それはたくさんの馬がこちらへ向かっているのだと悟った。

「闇の兵隊だ。急ごう」

「でも、ルシータはそっちの方向にいるわ」

「そうか」

少し考え、ハラートは木の上を見上げる。

「行き過ぎるまで、隠れていよう。ベルナデット、君は露になって」
わかったわ、とうなずくと、妖精は姿を消した。

ハラートも身軽に木の枝に飛びつくと、体を振ってくりと木の上に上がり、真っ黒な葉の茂みに素早く身を隠した。

やがてその木の下を、黒光りのする鎧をつけた闇の兵隊たちが二十騎ほど通り過ぎていき、それがナビル將軍率いる精鋭部隊だということがハラートにはわかった。

そう、かつて自分が率いていた部隊を、ナビル將軍が率いているのだ。

（アリーナとナビル將軍が？ アリーナが子を生む？ —— いったいなぜ、そんな話になっているのだ）

馬のひづめの音が完全に遠のくまで、ハラートは漠然とそのことを繰り返し考えていた。

いかにナビルがすぐれた將軍であろうとも、父王ほどの年齢ではないか。

あのダーク王が最愛のアリーナのことを無視してまで、婚礼をすすめたとは思いがたい。

（それともそうしなければならないほど、闇側は不利になっているということか…… アリーナを犠牲にして？ ）

いや、ナビル將軍との結婚をアリーナ本人が望んだのではないと、誰が言い切れよう。

アリーナは裏切った自分に復讐するために、彼と結婚したのかも

しない。

いずれにしろ、今のハライトには現実を受け入れるしかないのだ
った。

あれこれと言える立場ではない。

「ハライト、もう行っちゃったわよ」

見るといつのまにかハライトの横に、半透明のベルナデットがい
た。

そうだ。

今自分がしなければならぬのは、ルシータとレギオンを見つけ、
ダーク王を倒すことだ。

「よし、じゃあ行こう」

そうして二人は木を降りると、闇の兵隊がやって来た道を進み始
めた。

38・光の手、闇の手

ラッパが盛大に吹き鳴らされている。

今日はブライト王とアルタミラの婚儀だ。

光の神殿は花々で飾られ、高く伸びた白い神殿の柱が支える天井を、光の天使たちが舞っている。

そして純白に輝くブライト王とアルタミラが厳かに進む両脇を、たくさんの人と光の妖精が埋め尽くし、見守っていた。

ルシータは小さな花冠をつけ手にもブーケを持って、アルタミラの横に付き添い進む。

よく似た横顔の二人に、誰もが愛情を持って微笑み、おじぎをした。

やがて司祭が二人を夫婦と認め、神殿の鐘が打ち鳴らされると、また高々とラッパが響き皆が歓喜に沸く。

聖なる光は、いつそう輝きを増し明るく人々の頭上に降り注いだ。

そのときであった。

いきなり暗黒があらわれたのだ。

ブライト王の兄であるダーク王は、まるですべての光を吸い込むかのごとく深遠な闇を引きずってあらわれた。

その横には、王妃フレリカと、まだ十二歳の少女ではあるが王女アリーナが並んで歩いている。

彼らがたった今ブライト王とアルタミラが光に包まれて進んだ絨毯^{ベットの}の上を歩く間、観衆は息を詰めていた。

真っ黒な闇と、温度を奪う冷たさ。

それらをダーク王ひとりが強く放っている。

ついに玉座に座るブライト王の前にたどりついたとき、誰もが凍りついて静まり返る中、ブライト王は笑みをたたえて立ち上がった。そうして階段を下りると、光は闇の手を握って言った。

——ようこそと。

ルシータは目覚めた。

だが上を見ても下を見ても、真っ暗だ。

さらに体が宙を浮いているような感じさえる。

（何？　ここはどこ？）

するといきなり目の前に大きな輝く球体があらわれた。

ルシータが思わず手を目の前にして光を遮ると、その球体はゆっくりと下へ沈んでいった。

そして見下ろす位置にきたとき、球体の周囲から闇が広がり、それは次第に光を包んでいった。

大きな闇が広げた暗黒のベールの下で、だが光は輝きを失ってはいない。

闇からこぼれるようにきらきらとした光が星屑のように光り、まるでそれはバールの小屋を思い起こさせた。

（——なんてきれいなもの！　光がこぼれたり、透けたり……闇はまるでビロードのようだわ）

この不思議な空間で、光と闇は互いを引き立てあって存在してい

るのだった。

どちらが欠けても、この美しさを作り出すことはできない。

『ルシータ——』

そのとき、聞き覚えのある美しい声がした。

（ソワール？ ソワールね）

『ルシータ、あなたは光を導く者……どんな光を導けばいいのか、わかりますね？』

ルシータはうなずいた。

（ええ、たぶん）

『その光とは、光にとっても闇にとっても光であるべき光——』

（けれどわからない、その方法が）

『見つけてご覧なさい。あなたなら、きっと——』

（待つて！ どうすればいいの？ どこに救いの道はあるの？ 教えて、ソワール。教えて……）

またその球体は、闇をまとったままきらきらと回転をはじめ、今度は高く上がっていった。

どんどん、高く上がり、ルシータのまわりの闇が濃くなってゆく。

そしてそれは点になり、夜空の星となった——。

39・魔術師サーグの罠

今度こそ、ルシータは目覚め、自分がかつて光の神殿だった廃墟に倒れているのを悟った。

——そう、ここはブライト王とアルタミラ姉さまが結婚式を上げた場所。

そうして今見た夢を思い返した。

「光にとつても闇にとつても光であるべき光——。それは何？

……闇は光を包んでいた。光は闇を際立たせていた。

光のまぶしさも、闇の暗さも、どちらも美しかったわ——つまり」

「おまえが光を導く者か——ルシータ」

そのとき神殿の奥の闇から皮肉るような笑いを含んだ高い男の声がした。

ルシータが目を凝らすと、暗黒からぼうつと浮かび出るように、頭からつま先まで、黒い毛皮に身を包んだ背の高い瘦身の男が姿をあらわした。

男の周囲に薄っすらと青い光が見えた。

ルシータ自身も、まだベルナデットのシールドに包まれ、ほのかに光っている。

だが男のそれは放射するように放たれていて、ちゃちなシールドなんかではないのが一目でわかった。

「魔術師サーグね」

立ち上がったルシータがそう言うと、サーグは白い瞳を面白そうに見開き、

「ほう、わたしを知っているのか」と言った。

「おまえもどうやら、わたしを知っているようだわね——卑怯なやり方で、わたしをここに連れてきたのはあんたね」

するとサーグは愉快そうに笑い、

「あれは”思ヒ出喰イ”という魔物でな。おまえの記憶の一部を喰って、おまえが心許しそうな人間を探り、その姿を借りたのだ」

「なぜわたしを殺さないの？」

「おまえこそ、なぜかかってこない。遠慮するな、さあ」

サーグの言葉が終わるまでに、ルシータは走り出していた。が、横に薙いだ光の剣は、サーグの体を素通りした。

（しまった——こいつ！ 実体がないんだ。これは幻……）

「ルシータ、アルタミラ王妃の妹よ。おまえをこのまま王のもとへ連れて行こう。」

おまえなら、ライレーン王女を目覚めさせることもできるだろう。ただし、その前に、おまえに闇の力を授けねばならないがね」

「なんですって、闇の力？！」

あつというまにルシータの体が宙に浮いた。

見ると、サーグと同じ青い光が全身を包んでいるではないか。さらに金縛りにあつたように、指一本動かなくなつた。

「下ろして！ 卑怯者っ！」

もがくルシートに向かい、また嫌味な声が飛んできた。

「そうそう、後の二人だが、さすが光の戦士、闇の魔物たちではまったく歯が立たなかった。」

が、二人の様子ははつきりと見ることができたよ——やはり、ハライトは光の戦士だったのだな」

「そうよっ。わたしたちが必ず闇を倒す。ダーク王を倒して見せるから覚悟なさい！」

「無理だな。二人は仲違いしたぞ。もう一緒にはいない」

「……?! ど、どういうことよっ」

「金髪の男は、ひとり城へ向かった。もうじき、我らの仲間となる……」

「何ですって、レギオンが——」

サーグは、急にいらだって言った。

「くそう、何かがじやまをしているな。おまえをこれ以上、持ち上げることができん」

そのとき、神殿の中が白く輝いた。

40・光の中のアルタミラ

サーグの背後、神殿の最奥から、まっすぐな強い光が照らし、サーグの幻影は短い悲鳴を上げ一瞬にして掻き消えた。

浮かんでいたルシータも、どおっと下へ落ち、臀部でんぶをしたたかに打ち付けてうなる。

そのとき、その光の中から声がしたのだ。

天使ソワールではない、懐かしい声が。

『——ルシータ、よく帰ってきたわね』

「アルタミラ姉さま?!」

アルタミラの顔を見ようと、ルシータはまぶしさにも目を細めて懸命に光の中を見たが、ぼんやりと透けた輪郭しか見えない。

でもそこに、たしかにアルタミラはいて、笑いかけながら両手を広げたのだった。

「姉さまっ」

「ルシータっ!」

「ルシータ、無事か?!」

と、そこへベルナデットとハライトが飛び込んできて、光は一瞬にして消え去った。

気がつけばもとの暗闇の中で、ルシータは呆然と座っていた。

「大丈夫か、ルシータ?」

「ハライト……ベルナデット。わたし、今、姉さまに助けてもらっ

たのよ」

「姉さまって、アルタミラ王妃様？」

「そう。サーグに城へ連れていかれそうになって——そしたら、姉さまが強い光で魔術師を追いつめてくれたの」

「サーグが?! やつがここに来たのか？」

ルシータは首を横に振った。

「ううん、幻影だった。だけど、手も足も出なかったわ……それに、やつにわたしのことを知られてしまったし」

それから、はっとしたように顔を上げた。

「そうだ、レギオン……! ハライト、あんたたちケンカしたんですって? レギオンは城へ向かったって——もうじき我らの仲間になるってサーグは言ってたわ。助けにいかなきゃ」

「ルシータ、サーグは君の何を知ったんだ？」

ルシータが慌てて立ち上がるうとするのを、ハライトがとめた。

ルシータは肩をすくめると、

「わたしが王妃の妹だったこと。わたしになら、ライレーン王女を目覚めさせることができるだろうって」

それを聞いたハライトは深刻な表情になり、「君の身が危ない」

と、つぶやくように言ったが、ルシータは笑い飛ばしつつ立ち上がる。

「大丈夫。わたしが必要なら殺されることはないから。それに今度こそ、あんな真似させない」

空中で、ただジタバタあがいていた自分の姿を想像するだに屈辱だ。

(あの魔術師、絶対に許さない)

ルシータは唇を噛んだ。

そしてハライトを振り向くと、

「ダーク城へ急ぎましょう。ハライト、案内して
するとハライトが、

「いや、行くのは君も知っているブライト城だ」
と言った。

「ブライト城？」

ハライトがうなづく。

「新ダーク城と呼ばれていてね。今はかつてブライト城だった城が、
ダーク王の居城になっているんだ。

ライレーン王女がいつ目覚めてもいいように、王も側近もみな新
ダーク城で待機しているというわけだ。

だが光が滅んだといっても、あの城ではダーク王の力が弱るらしい。

それで時々、王はダーク城に帰ってリフレッシュしているんだ」

「……そうなの。でも、レギオンはダーク城に向かったんじゃない？」

「レギオンの居所なら、ベルナにおまかせっ」

ベルナデットが頭のアンテナを張り巡らせるように集中している
脇で、ルシータが「はあ？」という顔でいると、ハライトが言った。
「ベルナデットは、シールドを頼りにレギオンの居所がわかるんだ
よ。君をうまく見つけられたのも、彼女のお手柄なんだ」

ところが妖精は、頬に両手を当てるなり叫んだ。

「わかんない！ レギオンのシールドが消えちゃってる！」

「——（期待して損しちゃったじゃないよう） それは大変、何か
危険な目に遭ってるのかも。ハライト、とりあえずダーク城へ急ぎ

ましよう」

が、ハラーは、「いや」と首を横に振った。

「レギオンには、君がひとりで行ってしまったとき話してある。まさか、こんなふうにバラバラになるとは思わなかったから………こんな大切なことを話すのが、今になってすまない」

41・ 迷いのハラート

「いいのよ」

少しだけ、ルシータは大人びた表情を見せた。

「わたしたちも最初から、『道案内はハラートに』って任せきりにしてたから。」

だけどハラート、正直に言って——あなたにも迷いがあつたんでしょう？ 戦隊長だったという以外に、あなたが迷う理由が。今、そのわけを聞いておきたいの」

ハラートは一瞬顔を伏せ、だが観念したようにため息をついた。

「君はアリーナ王女を覚えているか？」

「アリーナ王女？——ええ。実を言うと、さっき夢を見て思い出したの。ここで行われた、ブライト王とアルタミラ姉さまの結婚式の夢」

「わたしは彼女を愛している。そして彼女はまだ、わたしが光の戦士であることを知らない」

そう言つて結んだハラートの口元は、かすかに震えた。

「彼女も？ 彼女もあなたを愛しているの？」

その質問に、ハラートは頭^{かぶり}を振り、

「わからない。但至少なくとも、好意を持ってくれているのは感じていた……だが彼女はわたしが国を出てから後、結婚したのだ。

父王ほどの年の男と」

「そういえば、あのレゴ……なんとかいう男がそんなこと言っていたわね。そのときあなたは雷に打たれたみたいだった」

ハライトは顔を上げ、瞳を向けた。
微笑んではいたが、薄青い瞳が寂しさをたたえている。

「ここを出ないか？ 歩きながら話そう」

相変わらず暗く、森は瘴気に満ちていた。

そんな中を進むのに、決して楽しい気分になる話題ではなかったが、ハライトはもう本心を隠そうともせず、とつとつと話し始めた。

二人はルシータの馬にまたがり、ベルナデットは半透明の空気のような状態で馬の尻の上に乗っている。

「わたしはずっと迷っていた。わたしの血の半分がブライトキングダムのものであるという意味、母がくれた車輪のペンダントの意味

わたしはこの世界が闇で支配されればいいとは思わない。ダーク王がブライト王を殺したことを正しいとは思えないのだ。

だがあの国にいる以上、わたしはダーク王の人形だった。そして光の天使の声を聞き、光の剣を授かったとき……そのときに、わたしは光の道を取らざるを得なくなった。

わかってほしい、わたしは王やアーリーナを裏切りたくはなかった。そうしなければならなかっただけなんだ」

「ということは、ハライト。今でもあなたはダーク王を斬りたくはないわけね。けれど、光は甦らせるのが正しいと思ってる——

わたしね、さっき闇に包まれる光の星を見たの。綺麗だった。光も闇も、どちらもお互いを引き立てあっていたわ」

『つまり、こうね——光があるから闇は存在する。光も闇も必要なの』

後ろからベルナデットが口を出し、ハラートも珍しく声高に言った。

「そうだ。まさにそうなんだ、ルシータ。できるなら戦うことなしに、ダーク王やブライト王の前王……アルファード王の治世に戻すことだ」

『アルファード王？』

「アルファード王は、かつてひとりで闇と光を統べていた。だが二人の息子のどちらにも国を与えたくて、光と闇を分けてしまったんだ」

「でも、うまくダーク王を説得できるかしら？ 説得する前に、こっちが消されそう」

ついに森を抜けた。

目の前にはブライト城——いや、新ダーク城がそびえている。

「ダーク王に理解を求めるなら、まずアリーナを説得した方が早い。……もうわたしの言うことになど、耳を貸さぬかもしれぬが」

灰色の気配の中、三人を乗せ、シールドに包まれて薄く発光する馬が、前足を上げいなないた。

「抜け道がある。そこから城へ入れるが——先にレギオンを捜すか？」

ルシータは後から、ハラートの肩に手を添えた。

「レギオンを捜しましょう。……ハライト、もしダーク王を説得できなかったら、彼を討つわ。いいわね？」

ハライトが、一瞬息を詰めたのがわかった。

「……ああ」

赤い髪が後ろへ靡き、ルシータは彼が、涙を流したように思えた。
「そうしなければ、世界が救われないのなら」

三人は慎重に城のまわりを巡り始めた。

42・来襲

小一時間捜したが、レギオンの姿はどこにも見当たらなかった。

「まさか、あの白目の魔術師にかどわかされたんじゃないでしょうね」

「もしそうなら、サーグの棲家は闇の神殿だが」
ルシータは頭を抱えずにはいられない。

「ああ、もう！ レギオンの馬鹿……こんなときに、どこへ行っちゃったのよ！」

「すまない。わたしがしっかりしていれば」

どんよりとした空の灰色の雲の隙間から、刹那光る稲妻が見えた。そのときルシータは、もう春が来てもいいはずなのに、光のないダークキングダムに春は永遠に来ないのかもしれない、と思った。そしてこのままでは、いずれ世界中がそうなる――。

「ハラート、先にアリーナ王女に会いましょう。ダーク王を説得できれば戦いは避けられる。レギオンも無事に戻ってくるわ」

ハラートは少し考え、

「よし」

と言った。

「城に入ろう。こっちだ」

ところがそのとき、森からナビル將軍の一隊が出てきたのであった。

彼らは三人を見つけた。

逃げられない距離だ。

「しまった！ もう戻ってきたのか！」

ハラートが叫ぶ。

ルシータは素早く馬を降り、剣を抜き放って身構えた。

「ハラート、戦いましょう。あいつらを倒すしかないわ」

「それしかないようだ」

ハラートも馬を降りると、光の剣を鞘から抜いた。

銀色の光が鈍く光り、やがてハラートの剣気に応じてまばゆいほどに輝き出した。

「いたぞ！ あそこだ！」

ナビル將軍が指差し部下に命じる。

「ハラートは殺すな！ 生かしたまま捕らえろ！」

黒馬の大群が、二人めがけて走ってきた。

相手は二十騎、しかも選りすぐりの精鋭部隊である。

（まともに勝負したら、勝てない）

ルシータの勘がそう告げていた。

ハラートも同じことを思ったのか、ルシータに、

「走るんだ！ 抜け道へ走りながら戦え！」

そう叫ぶと、鮮やかに身をかわしつつ相手の攻撃を受け流して走る。

ルシータも後に続いた。

剣と剣、剣と鎧がぶつかりあって激しい音を立て、火花を散らす。

それでも二人は確実に抜け道に近づいていた。

「抜け道へ行く気だな。そうはさせんぞ——。バルフィム、セレシ

ユ、左へ回れ！ やつらの前方を防ぐのだ」

さすがにナビルに抜け目はない。

ハラートは、自分の前に回りこんできたセレシュの剣を、まともに胴に受けた。

「うっ！」

幸い鎖帷子が守ってくれたが、衝撃は大きい。

一瞬息が詰まって、リズムが乱れた。

そのわずかな隙を突いて、バルフィムの剣の柄が、ハラートの頭を後から直撃したのだった。

「ハラート……！」

残りの兵士がルシータに襲いかかったとき――

突如、闇が濃くなった。

そして森の中で感じたのと同じ魔物の気配を感じるや、ぶおおおおう…… という不気味な声があたりに響き始めた。

今はその魔物たちの姿がはっきりと見えた。

それらは人の形をとらず、まるで手の生えた真っ黒のカーペットのように、自在に空を飛びまわっている。

またある魔物は二本足で歩き回っており、毛むくじやらの巨人のようだ。

カーペットのような闇の魔物は、次々と兵士たちを包んでは飲み込んでしまうようで、また毛むくじやらの巨人は、まれにみる凶暴さで兵士を握りつぶし、むしゃむしゃと頭から食べてしまう。

（どうして？ どうしてやつら、兵士を殺しているの？）

そう思ったのはルシータだけではなかった。
ナビル將軍も青くなり、

「これはどういうことだ?!」
とうるたえている。

我先にと逃げ出した兵士たちは、あっけなく魔物たちに捕まり、
餌食となった。

そうしてついに、巨人はひとり残ったナビル將軍をその色のない
目で見、耳まで裂けた口を横に開いてにっと笑うと、野獣のような
腕を伸ばして將軍を捕食した。

頭から飲まれてゆくナビルの断末魔の声を聞きながら、ルシータ
はハライトの頬を叩いた。

「ハライト、ハライト！ 起きてよ、しっかりして」

『ルシータ、任せて』

露に姿を変えていたベルナデットが半透明の姿をあらわし、冷た
い露をハライトの臉にさっと塗る。

すると、ハライトの目がゆっくりと開いた。

「ハライト、大丈夫？ やつら、闇の魔物にやられてる。この間に
抜け道へ行くのよ。早く！」

こうして三人が無事抜け道へ入っていった後、何事もなかったか
のように静まり返る灰色の空の下には黒い毛皮をまとったサーグが
つっと立ち、妖しげな笑みを浮かべていた。

43・地下道を抜けて

「何があつた？」

城内への抜け道となつてゐる地下道で、くらくらす頭を手で支えながら、ハライトはルシータに聞いた。

ルシータは眉をひそめ、

「わからないわ。突然、闇の魔物たちが湧いて出て、なぜかわたしたちを襲わずに闇の兵士を襲つたの」

『お腹減つてたんじやないかなあ？』

暗い中、半透明のベルナデットはほとんど姿が見えない。

「そつかもね」

魔物が空腹を感じるとは思いがたいが、「食りたい」という欲求は持つだろう。

ルシータは、生半可な返事を妖精に返した。

「おかしい……何かが、変だ」

ハライトのつぶやきにも、ルシータはあまり考えず、明るく答えた。

「いいじゃない。望み通り、城の中へ入れそうなもの」

途中から、地下道の壁に灯かりがともしだしていた。

きつと城に入ったのだろう。

果たして地下道を抜けると、そこは大きな木のうろになつていて、まるで木から生まれるようにして三人は表へ出た。

『なんだか不思議な感じ』

「この抜け道は、元々ここがブライトキングダムだった頃からあつたようだ。アリーナが見つけたんだよ」

その後、勝手知つたるハライトは迷いなく城の中を進み、時々運

悪く出くわす兵士は、声を上げる前に倒されていった。

城の廊下は広く、天井は高い。

白亜の城は、たしかに闇の王には似つかわしくなかった。

「綺麗な城ね」

するとハライトはやや驚いたように、

「君はブライト城に来たことはなかったのか？」
と尋ねる。

「ないわ。いくら姉さまが王妃でも、わたしたち家族はただの民人だったから。」

——ダーク城も、このことのように豪華なのよね？」

「かつては」

用心深くまわりを見まわしながら、ハライトは言った。

「ダーク城は、もちろん、”黒”が基調だ。豪華さはこのこと変わらなかった——フレデリカ王妃が処刑されるまでは」

「フレデリカ王妃が、処刑？」

「そうだ。フレデリカ王妃は、まだブライトキングダムとダークキングダムが交流を持っていたころ、ブライトキングダムの絵師に自分の肖像画を描かせた。そしてそれがきっかけで、二人は恋に落ちたのだ」

広い廊下を曲がると、ぐっと狭くなった廊下が続いていた。

だがそこはひっそりと、薔薇の香が漂っている。

「王妃は、王妃の地位と娘のアリーナを捨て、絵師と二人で逃亡した。そしてダーク王の追っ手に追い詰められて、自害したんだ」

「自殺を……ひどい」

「そのときから、王の狂気は始まった。ブライトキングダムの人間

を憎み、ブライトキングダムそのものを疎ましく思うようになっていった。そしてそれは、ついに、幸せそうなブライト王への激しい妬みへと変わったんだ……」

ハライトはなぜかその先へ進もうとせず、足を止めたまま、奥にある部屋の扉を見つめている。

「……王の心に光が射さなくなったのは、自分自身の乱れた感情のせいだったのに、王は自分には光の妖精の加護がないからだと思い込むようになった。それで、ブライトキングダムを攻撃した」

何かの予感にあたりの空気が震えたようだった。
ハライトをうながすでもなく、ルシータも黙ってそこに立ち尽くす。

「今はダーク城は完全に打ち捨てられている。幽霊城だ。だが、かつて以前より闇の力が増しているのも間違いない。

——闇は際限なくどこまでも広がる。光は、遮られてしまうが」

そして言った。

「行こう。あれがアリーナの部屋だ」

44・震える薔薇

素早く部屋に身を滑り込ませたとき、そこに袖の長いゆったりした玉虫色シャンレーのドレスを着た後姿の女性が立っているのを見て、ルシータは一瞬固まった。

だが覚悟していたようなハラートは、静かに声をかけた。

「アリーナ」

ゆっくりと振り向いた美姫の瞳を、いろんな感情がよぎったのか、ドレスと同じ色の光がひらめく。

怒り、恨み、悲しみ、喜び——なおどうしようもない、想い。

「……おまえたちが来るのはわかっていたわ。待っていたのよ」

声の主の腹は大きく前にせりだしている。

ルシータは夢で見た少女との違和感を感じながら、何も言おうとしないハラートに代わって話し始めた。

「アリーナ王女、わたしはルシータ。光を導く使命を帯びています。わたしは光を甦らせるために来ました。ライレーン王女を目覚めさせるために——」

でもそのために闇を倒すという考えが、間違っていたことに気づいたのです。

戦いが避けられるならその方がいいと」

その言葉に、意外そうな顔をしたアリーナが口を利いた。

「戦いを避ける？ いまさら何を言うの……おまえたちが仕掛けた戦いじゃなくて？」

ルシータは一步前へ進み出ると、誠意を示そうとひざまずいた。そして、

「いいえ、王女様。この戦いは十年前に始まったのです——あなたの父上、ダーク王がブライト王を殺したときに。

わたしは光の神殿で、闇に包まれても内側から輝く光を見ました。戦いは無意味です。

光も闇も、共にあるべきです！」

「黙りなさい！ おまえたちの言うことなんか信じないわ！ みんな……表面だけ」

その目はハラートを睨み、冷たく燃えている。

「……わたしはおまえを許さないから、ハラート」

「わかっている。許してもらおうとは思っていない」

そう言うと、ハラートは両腕を広げた。

「だがもし君がダーク王を説得してくれたら、わたしたちの運命は変わる」

ハラートの言葉は臣下のそれではなく、アリーナ王女と対等だった。

ルシータには何となく奇妙に映ったが、二人に違和感はないようだ。

それほど二人は近かったといえる。

「どう変わるの？！ おまえが裏切り者であるということは変わらないわ！」

ハライトの全身から慈しみのオーラがあふれ、それらはすべてアリーナに向かって流れていった。

ルシータは、まるで岸边に立ってなすすべなく二人を見守っているような錯覚に襲われつつあった。

「聞いてくれ、アリーナ。わたしの心は今まで二つに引き裂かれていたんだ。光と闇、どちらかを選ぶしかない。

だがルシータが共存という道を示してくれた。

思い出してくれ、アルファード王の時代を。光と闇が、ひとつに統治されていたときを」

アリーナの真紅の薔薇の蕾を思わせる唇が薄く開かれ、動揺しているのが見て取れた。

ルシータは水に溺れる者を励ますように、小さく、だが強く声をかける。

「そう、共に生きるのよ、アリーナ王女」

「アリーナ、わたしにはたったひとつの希望の道だ。君にとっても……もし君が、わたしが君を愛していると同じように、わたしを愛してくれているなら」

「うぬぼれないで！」

王女の声は震えていた。

「うぬぼれないで……誰がおまえなど。わたしはダークキングダム
の王女よ。この国のために、お父さまのために生きるの。

もうすぐ子供も生まれるわ。おまえなど……」

「ナビル將軍の子か？」

陰鬱にハライトが問う。

「違うわ」

アリーナは唇を噛むと、あっさりと否定した。

「ナビルには指一本触れられてはいない。——お腹の子は、サーグの子よ」

45・契約

その答えには、ハラートもルシータも驚きを隠せなかった。

「なぜ……」

ハラートも言いよどみ、その先の言葉が出ない。

アリーナはふふ……と投げやりに笑うと、長い睫毛を伏せて自身の腹を見た。

「サーグと契約したの。ナビルは毎夜、エイベリンの亡霊を抱いているわ、わたしだと思って。……本当はサーグが死界から呼び戻した妻だとも知らずに。」

サーグはわたしの体内に闇の魔物を入れたの——そう、これは魔物。人間の子なんかじゃない。

そしてこの子が生まれたとき、サーグを後見人にするという条件を、わたしは受け入れたのよ」

「な……！ それは実質、サーグがこの国の実権を握るということではないか！」

するとアリーナはその黒い瞳に涙をいっぱいあふれさせた。

「どうでもよかったのよ！ わたしには光も闇も、どうだっていい

ハラート、おまえがいない世界なんて！」

その瞬間、アリーナがハラートに飛びかかり、長い袖に隠れて見えなかった短剣を振り上げた。

白い指に、薔薇を彫ったルビーの指輪が光る。

だがハラートは王女の手からそれをもぎ取ると、彼女を抱き寄せ、力強く抱き締めた。

アリーナはハラートの胸に顔を埋め、泣いた。

「……ハラート、おまえが憎いわ。おまえを、殺してやろうと思ったのに」

するとハラートは、アリーナの頭に頬を寄せつつ囁く。

「アリーナ、わたしは君と共に生きたい、光と闇のある世界で」

『うつつ……よかったわね、ハラート。幸せになって』

ルシータの左肩からベルナデットの声がして、ルシータは半ばあきれたように言った。

「あんた、いたの？ でもまだハッピー・エンドってわけにはいかない……ダーク王を説得しなきゃ」

そのとき、部屋に風が吹き込んできたようだった。

天蓋が揺れている。

それを感じてぎくりと身をこわばらせ、アリーナは押し殺した声で言った。

「わたしから離れて、ハラート……もう遅いの。手遅れよ」

「アリーナ？」

「そうだ。王女から離れてもらおう」

いつのまにか、魔術師サーグが黒い影のように立ち、三人を見ていた。

そしていつもの狡猾そうな声で、楽しげに言った。

「ルシータ、また会ったな。今日のわたしは幻ではないぞ。さあ、かかってくるがいい」

ルシートは露骨に顔をしかめ、

「つまらない挑発にはもう乗らないわよ。それより、あんたの企みはすべて読めたわ。

本当の裏切り者が誰かということもね……。

さつき、魔物たちを使ってナビル將軍たちを殺したのも、あんたでしょう？

子供が生まれたら、彼は邪魔なものね」

「それはアリーナ王女との契約の一部でもある」

サーグは口の端を上げた。

「つまり正確には、わたしとアリーナ王女がしくんだことなのだ。そして契約によれば、ここでハラートは死ぬことになる……」

「やめて！」

アリーナが声を上げ、ハラートの前に立って両手を広げた。

「やめて、サーグ。子供は生むわ。お父さまのあと、王位を継がせればいい。だからわたしとハラートを、もう放っておいて」

「おやおや、何を言い出すかと思えば」

まるで小さな子をあやすように、サーグは白い瞳を大きく開き、優しい口調になる。

「あなたには王母としていてもらわねば。——さあ、そこをどいて」

あの不気味な魔物の声と共に、三人を取り囲む部屋の壁にまるでしみが浮き出るようにして、黒い影が広がっていった。

その影がたくさんの鋭い爪を持った手のようになってあちこちから飛び出してくる。

ハラートはとっさにアリーナを脇にやり、光の剣を抜いた。もちろんルシートもすでに抜いている。

だが魔物たちの狙いは、ハライトひとりのようだった。
魔物はハライトを頭から飲み込もうと狙っているのだ。いや、足
元からか。

「ハライト、逃げてっ！」

アリーナの悲鳴が響いた。

46・追いつめられて

サーグは白い瞳をしばたかせながら、口元に不遜な笑みさえ浮かべて闇の魔物を操っていた。

彼のまわりにまた強い青い光が輝き、それは渦を巻くように動いている。

闇の魔物は光の剣に斬られると一瞬で消滅したが、後から後から、きりがない。

ルシータは剣を差し上げ、

「天使ソワール！」

と叫んだ。

策があつたわけではない。

追い詰められた行為だ。

だがサーグの顔色が変わった。

「天使ソワール、加護を——！ わたしたちに加護を！」

そのとたん、ルシータの剣が目もくらむ光を放ち出した。

そしてそれは、風車の羽のようにゆっくりと回り出す。

光の洪水が部屋を満たし、魔物はいつせいに消滅した。

「ギヤアアアアッ！ ——目が、目が……っ」

サーグが顔を覆つてのたうつ。

そのときハライトが一気に飛び出し、サーグの胸を貫いた。

サーグは血の流れる白い目がかつと見開いてハライトを見た。その目は無念にあふれている。

「おのれ……」

しかし次の瞬間、サーグは勝ち誇ったように、にーっと笑い、

「また会おう……ぞ」

魂がふつと抜けた人形のように崩れ落ちた。
マリオネット

ルシータの剣の放つ光がおさまり、部屋が元の明るさに戻ったとき、恋人たちはしっかりと抱き合ったが、サーグの口から一匹の黒^く蜥蜴^{りょかげ}が這い出てきたのには誰も気づかなかった。

黒蜥蜴は素早く床を伝うと、アリーナの足元へ這っていった。

「ルシータってば、すごかったわねえ」

聖なる光がこの場を浄化したのか、やっとベルナデットが実体をあらわしたようだ。

「あんたねええ……」

ルシータはうんざり気味に頭をかく。

「何のためについてきたのよ？ 肝心なときには隠れてるだけだなんて」

「だって、わたしには闇の魔物と戦うなんてこと、できないもん」
ベルナデットが口を尖らせたそのとき、アリーナが悲鳴を上げた。

アリーナは何かから逃げようと、だが大きな腹にバランスを崩して、ベッドの上に倒れ込んだ。

「アリーナ、どうしたんだ？！ アリーナ！」

アリーナは両足をばたつかせながらのけぞって絶叫し続け、ハラートにもなすべがない。

「もしかして、生まれるの？！」

ベルナデットが不安そうに言うと、ルシータもはっとして、

「そうかも！ —— ハラート、子供が生まれるのよ！」

と言って、側へ飛んでいった。

「王女様、落ち着いて！ 大丈夫ですから……」

ところが――。

『そうではない』

ルシータもハライトも、ぎょっとした。

アリーナの声ではない。

男の――いや、悪魔の声だ。

くるりとこちらを向いたアリーナは、サーグと同じ、白い目だった。

『わたしは死んではないぞ。ここにいる。この腹に宿った子と共に、もう一度生まれるのだ。そしてこの王国を支配する。最強の、闇の王国をつくってやる』

そう言うてにたりと口をゆがめ、アリーナはまたふっと意識を失った。

「サーグが……何てこと」

ルシータが呆然とつぶやく側で、ハライトがアリーナをしっかりと抱き締めた。

昼間も暗いダークキングダムでも、夜がきたことはわかる。

アリーナの侍女たちはおろか、この城からすべて人が消えてしまったような人気のなさは、それでもルシータたちにとっては好都合だった。

アリーナが目を覚まし、自分の腹にサーグが宿ったことを知って

いるのかいないのか、淡々と城の状況を話し出した。

ダーク王は今、兵の半分を率いてダーク城に帰っていること、サ
ーグの報告により、ハライトやルシータがこの城にくることはわか
っていたので侍女たちも遠ざけたこと――。

そして言った。

「残念だけど、今のお父さまに戦いをやめろというのは無理だと思
うわ。光と闇が平和に暮らすなんて、お父さまの頭にはあるはずも
ない――

お父さまはもう、昔のお父さまじゃないというのがよくわかった
の。

あなたたちの言うとおり、アルファード王の治世に戻るのが正し
いのだとしたら……お父さまを倒して」

47・ 悲しみの夜明け

「ねえ、ルシータぁ……なんか、寂しいわね」

王女の隣の部屋に移ってベッドに寝転がっていると、ベルナデットがため息混じりに言った。

先ほど王女は言ったのだ。

「ルシータ、あなたは隣の部屋で休んで頂戴。——ハラート、今夜は側にいてくれるわね？」
と。

「いいなあ。わたしも恋人が欲しいなあ……あ、そういえば、レギオンはどうしてるのかしら？ 無事かな？」

実はルシータは、さっきからずっとそのことを考えているのだっ
た。

おかげで目が冴えて眠れない。

（ほんとにどこにいるの？ サークの言ったことが気になるわ……
まさかほんとに闇の仲間になってるんじゃないわよね？）

「ベルナデット、もう一度やってみて。ほんとにレギオンの居所は
わからない？」

「うーん………はあ。だめ。やっぱり、シールドは消えてるわ」

（どうしちゃったのよ。まさか、このままもう会えないなんて……）

「ルシータぁ。明日はどうするの？ せっかくお城に来たんだから、
ライレーン王女様が眠ってる部屋まで行ってみましょうよ」

「玉座の下にあるっていう部屋ね。玉座の間には兵隊が大勢いるらしいし、四人の賢者も守っているらしいけど、アリーナ王女に頼めばいけるかもしれないわね」

「そこで運よく王女様が目覚めたら、もう戦いはなくなるんでしょう？」

ルシータは、はっとした。

もしそうになったら、頭に血の上ったダーク王は、一方的に攻めるしかないと考えるだろう。

仲良く共存、どころじゃなくなる。

アリーナ王女はああ言ったけれど、できるならダーク王を説得してもらいたい。

そして目覚めた光が闇を滅ぼしたとしたら、せっかくハラートと幸せに生きていこうとしているアリーナの運命も変わってしまうかもしれない。

「やっぱりだめ。先にダーク王に会わなければ」

「でもうまく会えると思う？ 簡単には会ってはくれないよ」

「そうね……」

（レギオン、どこにいるの？ トライアングル 光の戦士が欠けていてはどうにもならないわ）

そして眠りに引き込まれながら、付け加えた。

（姉さま、レギオンを守って）

夢にまで見た戦士のかたわらに寄り添いながら、アリーナはそつと声をかけた。

「ハラート、眠っているの？」

するとハラートは顔を動かし、

「いや、眠れない。君がこんなに近くにいて、眠れるものか」
と答え、アリーナと瞳を合わせた。

灯されたランプの明かりが二人の瞳の中できらりと踊る。

「サーグがわたしの中にいるの」

その言葉にハラートは身を硬くしないではいられない。

アリーナは続けて言った。

「夜明けがきたら、わたしを殺して」

ついに飛び起きると、ハラートはアリーナの腕をつかんで声を荒げた。

「何を言うんだ——アリーナ、あきらめてはだめだ。今は未来を考えよう、幸せな未来を」

「静かにして、サーグに気取られる」

そう言いつつ、彼女は唇に指を当てる。

「サーグをよみがえらせてはだめ。せつかく取り戻した光を、真の闇に支配させないで。」

あいつは最強の闇の力を集めてわたしの中に送り込んだの。そして今は自らもそこにいる。

もうすぐ——彼が闇の子供と一緒に生まれたら、それはサーグ自身なの。簡単にひねり殺せる赤ん坊なんかじゃないのよ。

だから彼を殺せるのは今しかない。

……ハラート、あなたにしかできないわ。わたしを殺して」

「できない！ できるわけがない！」

「やって。わたしが自害しても闇の子供は死なないの。サーグはちゃんとそこまで読んでいたわ。」

闇の子供を殺すには、わたしが生きているうちにあなたの剣に突かれること」

ハラートは絶句した。

「——悪魔め！」

涙が睫毛をぬらした。

やがて、いつもなら射さないはずの夜明けの光が薄っすらとあたりを染め、しっかりと抱き合っていた二人は、光の中でもう一度見つめあっていた。

「光が……ライレーン王女の目覚めが近いのかしら？」

ハラートはにっこりと微笑む。

アリーナはハラートの髪に指を絡めて、それからその手を頬に当てた。

「あなたの髪、好きよ。——愛してる、ハラート」

「アリーナ」

涙は昨夜から乾いてはいない。

「使命を果たしたら、必ずわたしもゆく。待っていてくれ」

そうしてアリーナの額に優しく口付けると、身を起こし——光の剣を抜いた。

48・新たな敵

ルシータとベルナデットは、空気を切裂くような悲鳴に飛び起きた。

直感でアリーナの部屋の扉を開け——その光景に凍りつく。

天蓋の下、ベッドに横たわるアリーナの腹に、ハラートが光の剣を突き立てていたのだ。

光の剣は、まばゆい銀色の光を放って王女の体を包んでいる。王女はこときれていたが、血はまったく流れていなかった。

「ハラート……なぜ？　なぜアリーナ王女を？」

ハラートは涙で光る目を向け、絞り出すように、
「何も聞かないでくれ……ルシータ、ダーク城へ出発しよう」と言った。

ハラートが剣を王女の体から抜かないのを見て、ベルナデットが聞く。

「ハラート、光の剣は」

するとハラートは静かに答えた。

「——抜けないんだ。」

あの光の剣が、彼女を邪悪なものから守ってくれる。だからいいんだ、行こう」

彼らはまた木のうろから抜け道を通り、城の外に出た。
そして首尾よく見つけた馬に乗ると、再び森の中へと入る。

もう闇の魔術師サーグもいない。
彼らは安全に森を抜け、ダーク城へと馬を駆った。

その途中に、サーグの棲家だった闇の神殿が、堂々たる風に建っていた。

黒光りする石を堅固に積み上げた、横に広い長方形の神殿である。

「あの最後の悲鳴は――」

ハラートが悲しげに言った。

「アリーナじゃない。サーグだ。光の剣に貫かれたサーグが上げたのだ……」

そして胸に下げた薔薇の指輪を手に、しばらくそれを見つめている。

ルシータはハラートの後ろに座っていたが、彼がアリーナの指輪をネックレスにして首にかけているのに気づいていた。

「辛かったわね。でも、だからこそ、光を取り戻し、光と闇の美しい世界をつくらなくては」

そのとき、一本の矢が、きわどいところを飛んできて地面に突き立った。

振り向くと、鎧兜をつけた闇の兵士が一騎、こちらへ迫ってくる。

「ルシータ、つかまれ！」

ハラートはとっさに馬を走らせると、闇の神殿へと向かった。

ルシータがハラートにつかまりつつ後ろを振り向くと、相手もまたすぐに追ってくる。

「来るわ！」

神殿の後ろ側へ回り込むと、二人は馬を降り、剣を抜いて相手を待った。

そして黒馬が突っ込んできたとき、剣を振り上げたが、そこには誰も乗っていない。

「?!」

ふいに後ろから飛びかかってきた男に、ルシータは押し倒されてしまった。

手から剣が飛ぶ。

男が鞘から剣を抜き、振り上げるのが見えた。

が、それより速く、ハライトが男の胸に剣を叩き込んだ——かに見えたが、相手は振り上げた剣を素早く戻して受け止めたのだった。さらにハライトの剣を弾き返すと、再びルシータの方を向いた。

（やるわね!）

とつさに地面をえぐり取り、ルシータは兵士の顔に土くれを投げつける。

相手がひるんだ一瞬の隙に男の体をはねのけると、落ちている剣めがけて走り、一回転して立ち上がった。

闇の兵士が黒い兜の下からにやりと笑い、

「なかなかやるな」

と顔についた土をぬぐう。

間髪いれず、背後から斬りかかるハライトに対峙し、剣を合わせた。

すさまじい音があたりを震わせ、二人の男は斬りあいを続けた。そこへルシータも飛び込んでゆき、今度はルシータとの応酬になる。

男の腕はたいしたものだった。

ルシータとハライト二人を相手にして、ひけをとらない。

だが剣を合わせているうち、ルシータは妙な感覚になってきた。

（もしかして、この剣――）

「レギオン?! あんたなの?!」

「何だって?!」

ハラートが驚く。

すると男は身を翻し、神殿の中へと駆け込んでいった。

「レギオンだって? レギオンがなぜ、我々を襲うんだ」
肩で息をしながら、ルシータは言った。

「きつと、サーグよ。サーグの妖術かなんかにかけられてしまったんだわ……ハラート、行きましょう。追わなきゃ」

49・幻の蝶

神殿の中は、陰湿な空気かと思いきや、深紅のカーペットが敷かれ、豪華なカーテンが吊られていた。

そして薬草の香りか、決して悪くないにおいが漂っている。奥にはドアがいくつかあり、部屋があるようだった。

「どこへ行ったのかしら？」

「ルシータ、君は奥を捜してくれ。わたしはこっちを捜す。本当にレギオンなのかどうか、確かめなくては」
「わかった」

さつそくルシータは、ドアを調べてみたがどれも鍵がかかっていて開かない。

ひとつだけ、湿った音を立てて開くドアがあった。
ゆっくりと中へ入る。

と、その部屋は物がなく、円形で、思った以上に広い。
壁はぐるり磨かれた黒曜石でできており、床には星のような象形文字が大きく描かれている。

そしてその中央には、何かの石が乗ったテーブルがあった。

ルシータの左側には大きな肘掛け椅子が置かれ、その肘には赤ビロードの長衣ロブがかけられているのも目に入った。

「ここは……？」

「ここは、サーグが呪術を行っていた部屋よ——」

ルシータの問いに答える声がし、ルシータは慌ててあたりを見回

した。

その声は間違いなく、アルタミラだ。

「姉さま？　姉さま、どこに？」

『ここよ』

振り返ると、ルシータの後ろに光に包まれたアルタミラの幻が立っていた。

その顔や全身の輪郭は、光に溶け込んでいてはつきりしない。ただいつものように、彼女が優しく微笑んでルシータを見つめているのはわかった。

「姉さま、レギオンを守りに来たの？　あれはやっぱり、レギオンでしょう？」

『そう、あれはレギオン。闇にとりつかれてしまった可哀相な人』

そう哀しそうに言って、アルタミラはテーブルの上の石を指差した。

真っ白の、だが何の変哲もなさそうな石である。

『あれは元は光の神殿にあったものの。』光の石『よ——ルシータ、剣を掲げてごらんなさいな』

アルタミラに言われたとおり、ルシータが光の剣を高く掲げると、また光が集まり出した。

そして次の瞬間、剣の集めた光が鋭い光線となって『光の石』に反射したのだ。

すると『光の石』は、それ自体が輝き出したではないか。

きらきらと、まわりの壁に星屑のように光を映している。

「姉さま、これって……」

不思議と気持ちがおぼつとし、現実と夢の区別さえつかなくなり
そう、ルシータは呆然とした。

『この光こそが、聖なるブライトキングダム之光。この光で、すべ
ての闇を打ち払うことができるわ。』

——ルシータ、その赤いローブを着て。

今、レギオンをここへ導きます。

あなたが彼の闇を払うのよ——』

一方ハラートは、神殿の階段の影にレギオンを見つけていた。

「レギオン、わたしだ。わからないか？ ルシータもいる。君は闇
の力に操られているんだ」

するとレギオンは兜の下でにやっと笑い、

「闇の力に操られている、だと？ いや、違うね。」

おれにはちゃんとわかつている、おまえがハラートだってことは
な。それに、おまえのような裏切り者を許すわけにはいかんってこ
とも。

だいたい光がどうなろうと、おれにはどうでもよかったってこと
に気づいたのさ。

おれはブライト王を憎む。ダーク王こそ、真の王だ……！」

「本気か、レギオン！」

二人は火花を散らしながら互角に戦い、だが季節はずれの蝶に集
中力をそがれたレギオンが、ついにハラートに追い込まれた。

「くそつ。何だってこんなところに蝶がいるんだ」

そしてハラートを振り切って、ルシータのいる部屋へと飛び込ん

だ。

後に続いて飛び込もうとしたハライトの目の前で扉は閉じ、それ
きり押しても引いても開かなかった。

50・愛の夢

部屋に入ったとたん、まばゆい光がレギオンの目を射た。あまりのまぶしさに、まともに顔を上げられないほどだ。

そんな中で彼は、なぜか自分の心から、ハラートに対するむき出しの敵意がすつと消えていくのを感じていた。

光の中にルシータの顔が浮かぶような気さえし、懐かしさと正義の心が、憎しみに代わって胸を占め始めていた。

（ここはどこだ、この光は——？ おれは……おれは、何をしたんだ？ おれはハラートを殺そうとしていたのか？ ああ、何ということだ）

レギオンはため息をついて、すっかり重くなった兜を脱いだ。そこからこぼれ出た金髪が光に照らされて輝く。

『——レギオン！』

そのとき、懐かしい声がした。

『レギオン！』

「アルタミラ？！ アルタミラか？ ——いや、違う。アルタミラであるはずはない、彼女は死んだ」

『レギオン——しっかりするのです。光の戦士、レギオン』

レギオンはうろたえ、頭を抱えた。

「やめてくれ、アルタミラ……もう、君を忘れない」

「わたしはここにいるわ、レギオン」

その声に振り向くと、そこにはまばゆい光に浮かび上がるように、赤いローブをまとい、ヴェールを頭にかけたアルタミラが立っていた。

彼女の笑顔も、美しさも、昔のままだ。

「アルタミラ、本当に君なのか？」

「——そうよ。そしてあなたは、『金の車輪』。負けてはだめよ」
そうして差し伸べられた彼女の両手を、レギオンはつかんで顔を埋める。

「わたしを許して、レギオン。あなたを愛しているわ。あなたを想わない日は一日もなかったのよ」

「おれもだ。おれも忘れられなかった。愛している、この命、懸けて」

レギオンは顔を上げた。

そしてアルタミラの瞳に真実を見た。

「おれを許してくれるか？ 君を捨てて、ブライトキングダムを出た、このおれを」

「……ええ。だから負けないで。闇の力なんかに負けてはだめよ。あなたはもつと強い。光はきつと、取り戻せるわ」

『光の石』はますます強く輝き、あたりを幻想へといざなう。それに流されまいとするかのごとく、レギオンがふと聞いた。

「なぜ君はここにいるんだ……今、おれの前に？ 君は幻か？」

すると、アルタミラはレギオンの手をそつと握り返し、

「そうね、幻かもしれないわ。でもわたしはわたし。」

あの遠い日に二人で見た森の木漏れ日のように、わたしは変わらないの。

いつまでも、あなたの中で生きているから」

そう言った。

不思議なことに、レギオンの持っていた剣が再び金色に輝き出していた。

レギオンはそれをしっかりと見、

「おれにとつての光は君だ。」

ようやくわかった。一度失った光も、再び輝き出すことができる――。

もう大丈夫だ、アルタミラ。おれは君のために闇と戦う。そして光を取り戻して見せる」

どんどんと、光は増していく。

もう互いの影しか見えない。

「迷わないで」

「迷わない」

「信じて」

「信じよう——きっと」

光は最大限^{マックス}となり、一瞬にして闇に変わった。

51・生まれ出るもの

「レギオン、レギオンったらあ」

聞いたような声で目を薄く開けると、ラベンダー色の頭を揺らしているベルナデットの姿が見えた。

そして次に、ハラートの赤毛。

「大丈夫かい、レギオン」

レギオンは、ようやくはつと飛び起きた。

「……アルタミラは?! 今までここにいたのに」

妖精があきれたように言った。

「やだー。何言ってるの。しっかりしてよ、レギオン」

まだぼかんとしているレギオンに向かって、ハラートも言う。

「レギオン、すまなかった。もうわたしの心に迷いはない。共に闇を倒し、光を取り戻そう」

それを聞いたレギオンは、「ハラート」と意気込み、がばりと頭を下げた。

「おれの方こそ、すまん。おれはもう少しでおまえを殺すところだった。」

おれはあのととき、おまえと別れてから、ダーク王の魔に囚われてしまったのだ。そしてダーク城へ呼び寄せられた。心を読まれ、闇の王に忠誠を誓わされたのだ。

だがここで、不思議な光とアルタミラに救われた――

ハラート、許してくれ。おれは、信じることを忘れていた」

ハラートは何も言わず、微笑んでレギオンに片手を差し出す。

レギオンもそれをしっかりと握り返し、友情は復活したようだった。

「この『光の石』は、持って行きましょう。光の神殿がよみがえったら、元に戻さなきゃ」

その声に、レギオンはまたまた、はっとなる。

「ルシータ！」

部屋の真ん中に、ルシータが立っていた。
手には白い石を持ち、相変わらず勇ましい女戦士の姿だ。

ルシータはレギオンの方を見ると、
「まさか、わたしを忘れていたっていうんじゃないわよね、レギオン？」

皮肉たつぷりに言う。

そして近づいて、レギオンの肩をばしりと打った。

「色々あったんだから——あんたがダーク王と遊んでる間に」
「す、すまん。面目ない」

それを見て、ルシータとハライトは目を合わせ笑う。

ハライトもまだ空元気なのだろうが、少なくとも先ほどの対戦でカンが戻り、いくらか気が楽になったようだ。

ハライトにしてみれば、アリーナの死を無駄にするわけにはいくまい。

もしかしたら、今三人の中で一番強くダーク王を倒したいと思っているのは、彼かもしれない。

「ともあれ、これで三人そろったわ。さあ、行くわよ——いざ、ダーク城へ！」

ルシータは、この神殿のどこかで、アルタミラが微笑んでいるような気がしていた。

胸の中にははっきりと、レギオンへの思いが残っている。

自分もまた、あの光に酔ったのかもしれない。
けれど、しっかりと彼への気持ちを確認できた。

たとえば、レギオンがアルタミラの幻を見ていたのだとしても。
たとえば、自分がアルタミラの気持ちを代弁していたのだとしても。

人を愛するということは、自分の中でもうひとりの自分が生まれるということ。

ルシータも、自分の中でもうひとりの自分が生まれたことを知った。

（でも、この気持ちは秘めておこう——柄じゃないもの）
そう、ちょっと笑ってごまかしてしまおう……。

きつと今まで以上にレギオンは、アルタミラへの愛を強くしたところだろう。

それに自分が勝てるとは思わない。

ハラートとアリーナ王女の愛。

レギオンとアルタミラ姉さまの愛。

いずれの愛も報われなかったけれど——

（なんて大きな愛かしら）

今から自分が出向くのは戦場だ。

四人の愛から勇気をもらえれば、それでいい。

ルシータはそう思った。

52・ダーク王独白

ダーク城の空には風雲渦巻き、稲光がしていた。

ダーク王はひとり窓辺に立ってそれを見ている。
彼の胸中には、相変わらず深い闇が蠢いていた。

(……この世は闇だ。
さつりく
殺戮に満ち、欺瞞ぎまんに満ちている。

愛など存在せぬ、慈悲など存在せぬ。
真実は覆い隠せ、正義は退けよ——世界は闇で満たされるのだ。
それが正しい。

力は利用するためにある。
善は裏切られるためにある。
だましあい、ののしりあうがいい……。

それこそが、生きる力となるだろう。
我が王国が、輝く糧となるだろう。

世界の終わりまで、果てることなく続けるがいい。

武器を持て、戦うことを忘れてはならぬ。
権威は勝者に与えられ、死は敗者に与えられる。
殺しあえ。

血が情熱を呼び覚ますだろう。

闇の中では恐れるものなどない。

したたかな者、ひっそりと動くがいい——愚かな者も、また。
闇は我らの味方だ。

誰も光など、望んではおらぬ。
そう、この世に光などいらぬのだ。

聞いているか、ブライト……。

おまえは何を信じたのだ？

おまえの希望の光など、すぐに消えるぞ。

我が王国に齒向かう光は打ち砕く。

おまえが未来を託した者たちを、粉々に打ち砕いてやる。

思い知るがいい、ブライト……)

ヘキンザーは、自分がアルファード王の第一子であり、いずれ父の王国を継ぐ者であるという自覚を、いつもどんなときも忘れたことはなかった。

王国を治めるのに必要なのは、あらゆる対策を練るための知識と、感情を交えない冷徹な判断力であり、ヘキンザーは自分にそれが備わっていることを感謝していた。

それゆえ、弟のルクセルクスが勉強を怠け、下々の者たちと楽しそうに笑っているのも、一向に関知しなかったのである。

むしろその気楽さ、幼さを鼻先で笑い、それでも言葉だけは兄らしく、優しく接した。

「兄上、人が楽しく暮らしていくには何が一番必要だと思われますか？」

ある日、まだ青年のルクセルクスが、本を読んでいるヘキンザーに質問してきた。

彼は若者らしく艶々した頬をして、はきはきと言った。

「わたしは、”希望”だと思うのです」

「”希望”だと？」

「はい。光と希望があれば、人々は笑って暮らしてゆけるのではないでしょうか」

そのきらきらした笑顔に、ヘキンザーは怒鳴りつけたい思いをこらえると言った。

「おまえは間違っているよ、ルクセルクス。一番必要なのは、強い力だ」

「強い……力、ですか」

きよとんとしてる。

「そうとも。強い力がなくては、人は幸せには生きられない。強い力に守ってもらい、自らも強い力で進む。

——そのために、”国”があるのではないかね？」

敬愛する兄にそう言われ、ルクセルクスは下を向いてしまった。

「そうでしょうか……たしかに、兄上のおっしゃることは正しいと思います。わたしももう一度、考えてみます」

しょんぼりと去ってゆくルクセルクスの背中を、ふん、と見やりながら、ヘキンザーはまた難解な書に目を戻した。

アルファード王は、ヘキンザーの聡明さを愛した。

だが王のもっとも愛したのは、実はルクセルクスの素直さであったということを、ヘキンザーは知らなかった。

もう命が長くないことを悟ったアルファード王が、ヘキンザーへ引き継ぐはずであった王国を二つに分け、ルクセルクスにもひとつの王国を継がせると決めたとき、ヘキンザーは啞然としないではいられなかった。

（——何たることであろう！ 父はこのヘキンザーとルクセルクスを、同等に扱うのか？）

だがヘキンザーは従順な姿勢を崩さず、むしろ笑顔で弟ルクセルクスに握手を求めると、ゆっくり静かに言った。

「ルクセルクスよ。これからは互いに王となるな。共に手を取って強い国を作ろうぞ」

ルクセルクスも喜んでその手を握り、

「はい、兄上。どうぞよろしくお願いします。」「^{ダークキングダム}闇の国」は兄上に
ぴったりです。兄上こそ、闇の王にふさわしい——永遠に尊敬して
おります」

（——自分は光の王にふさわしいと言うか、ルクセルクスめ！）

戴冠式の日、ありとあらゆる人々の賞賛を一身に集めながら光り輝いていた弟、ルクセルクス。

それはヘキンザーの胸に、決して忘れることのないであろう屈辱を植え付けた。

（希望だと？ 希望など、すぐに消える）

彼は無意識に、黒手袋の拳を強く握り締めていた。

まるで自身が握りつぶそうとするかのごとくに。

こうして、光と闇は分け隔てられ、ダーク王ヘキンザーの苦悩も始まったのである。

53・闇との対決

とりもなおさず、ダーク王は、この苦悩から解放されたいと願い続けてきたのである。

それがブライトキングダムを滅ぼす際、一番の機動力となったのは事実だ。

だが、弟ルクセルクスがこの世界からいなくなっても、苦悩は終わらない。

（なぜだ?!）

やはり光の王女が眠り続け、妖精の加護を得られぬゆえか。

それとももっとどこかにあるというのだろうか、”強い力”が…。

そのとき、ダーク王は、城が騒がしくなっているのを直感で悟った。

（来たな）

鉄仮面の下の血走った眼が大きく見開かれる。

外では相変わらず稲光がし、遠雷が空を震わせていた。

強い風が、ダーク王の黒いマントをひるがえらせ、漆黒の髪を吹き上げたとき――

扉が大きく開かれた。

ほとんど真つ白な目くらむ光が一瞬にして走り、ダーク王は両

腕で目を覆った。

おそらく、この強過ぎる光のせいで、闇の兵士たちもことごとく戦意喪失し、あっさり引いたに違いない。

「うぬぬ……」

さすがのダーク王も低くうならずにはいらなかった。

この光。

いったい何が光っているというのか。

ライレーン王女は、まだ目覚めてはいないはずだが……。

「ダーク王、わたしたちはいよいよここへ来たわ!」

凜とした女の声が届いた。

「わたしはブライト王妃の妹、ルシータ。光を導く者よ。

ダーク王、あなたに提案します。戦いを放棄し、前王の治世に戻すことを。

光と闇が、未来永劫、共にあるように!」

「それは無理な提案だな。強いものが力で統治するのが理だ。いんち我が王国に欠けているものは、力で奪う」

「だから妖精の加護を奪おうとしたの? それで奪えたの? 何も変わらないじゃないの。奪うことでは何も解決しないわよ!」

「何を小癪しつぎくな」

ダーク王は、怒りにぎらぎらと目を光らせた。

「小娘の癖に、何がわかる」

そしてぎつと指をさす。

「そこにいる男どもを見る。そいつらは裏切り者だ。だがわたしはそれを許そう。裏切りは、世の常だからだ。

むしろわたしが許せないのは、ルシータ、おまえのような偽善者

どもよ。

偽善が何を救う？ 何を生み出すのだ？ ますます深い悪を呼んでいるのは、おまえらの方ではないか」

「偽善なんかじゃない、わたしは心からそう信じてる。戦いは正義じゃない、悪よ！」

「そうだ」

レギオンも言った。

「おれも信じている。愛と勇気と正義の心を」

「ダーク王！ アリーナもそれを信じて死んでいった。よみがえらせた光を守って欲しいと――」

かつての腹心ハライトの言葉に、ダーク王の怒りが煮えたぎる。

「ぐぬぬ……アリーナを、アリーナをどうしたのだ。おまえがアリーナを殺したのか」

「そうだ。わたしがアリーナを斬った」

ハライトの赤毛が風に流れ、今初めてそのことを聞いたレギオンは、絶句して彼を見つめた。

それに気づいたルシータが、そっとレギオンの腕に触れる。

「わたしがアリーナを斬った。愛ゆえに。真実の愛ゆえに」

「おのれえ……！」

ダーク王の背後の闇が高波のように持ち上がったかに見えた。それでもルシータは、恐れることなく言い放った。

「もうサーグもナビル將軍もいないわ！ ダーク王、降伏なさい！」

54・魔剣の炎

闇の中に光がある。

そのことに気づけば、救いは必ず見つかる。

だが気づけなければ、苦悩は続いてゆくのだ――。

『光の石』の白い光は弱まることなく全員を照らし出し、今にもダーク城全体を輝かせそうであった。

ダーク王はついに自らの剣を抜いた。

ダークソード 暗黒魔剣の赤黒い焰ほむろがごおつと立ち上る。

それは白い聖なる光をぐにやりとゆがめ、ダーク王のまわりに真っ黒い渦をつくり始めた。

ダーク王を中心に、漆黒の闇が広がってゆく。

それは見る間に巨大な渦となり、風を起こした。

雷鳴、稲光、激しい風。

それらを堂々と背負い、暗黒魔剣を握ったダーク王がすくと立ち、三人は息を吞んでその光景を見つめた。

「『金の車輪』『銀の車輪』、そして光を導く者よ……

おまえたちもやつと同じだ。つまらぬものを信じおって。

真の恐怖を見せてやる。すなわちそれが、もつとも強い力であり、真実そのものなのだということを思い知るがいい」

そう言うと、飛びかかるように光に向かって突進した。

とつさにレギオンとハライトの二人が前へ出て剣をかざす。
だが暗黒魔剣の威力は凄まじく、レギオンの光の剣はかるうじてそれを弾いたものの、ハライトの剣は真中から折れてしまった。

「くそっ、やはり普通の剣ではだめか……！」

「ハライト、下がって！ 他の武器をさがして！」

代わって前に出たルシータは、『光の石』をハライトに放つてよこすと、鮮やかに打って出る。

ダーク王の足元を狙ったが、彼は素早く暗黒魔剣を戻してそれをさえぎった。

魔剣の炎がルシータを襲うように広がる。

とつさに上体をそらしよけたものの、髪の手が焦げるにおいがぱつと立ち上り、ルシータは唾を飲み込んだ。

（熱いなんてもんじゃない……一瞬で焼かれる！）

「どうだ。この剣はブライト王の首をはね、おまえの姉を灰にしたダーク・ソードだ。」

——おまえも灰にしてやろう、ルシータ」

「ルシータ、どけ！」

そのときレギオンが叫んで上から振りかぶった。

「だめ……レギオン！」

ダーク王が真横に剣を薙ぐ。

炎が円を描いて燃え立ち、レギオンの金色の鎖帷子を撫でた瞬間、シャアッ！ という鋭い音がして、レギオンの胸の下から切り離された鎖帷子がぱらりと落ちた。

「レギオンっ！」

ルシータが警告の声を上げるより早く、ダーク王がレギオンの無

防備になった胸を狙って突く。

それでも寸でのところでよけたレギオンは、痛いとおもえるほどの熱さを胸に感じてうなった。

だがダーク王はそれで許したわけではない。

レギオンの前に仁王立ちになると、剣を高く持ち上げた。

そのとき、ダーク王めがけて飛んできた槍が、間一髪レギオンを救った。

間合いを崩されて、ダーク王は舌打ちしてその方を見る。

壁にX字に立てかけてあった槍の一本をハライトが投げたのだと知るや、憎悪を顔にみなぎらせた。

「いいだろう、ハライト、まずはおまえからだ。おまえを魔剣の餌食にしてくれるわ」

ハライトはもう一本の槍を握ると、ぐいと耳の横につけ、狙いを定めてダーク王めがけて再び投げる。

槍はまっすぐに飛んだ。

「おおおおお……！」

だがダーク王が暗黒魔剣の切っ先を槍に向けたそのとき、槍の鋭い刃先とそれが合って空中で静止したかのごとき槍は、次の瞬間炎を上げて燃え、灰になって落ちた。

暗黒魔剣のパワーは、すなわちダーク王の気迫である。

「何てこと……」

正直、ルシータは力の差を感じていた。
はつきり言って、なすすべがない。

このままでは三人ともやられてしまうのは必至だ。

ルシータはまた自らの剣を上にし差し伸べた。

「光の天使ソワール、我らに光の加護を！」
だが今度は剣が光らない。

「加護を……ソワール！」
願いは聞き入れられなかった。

55・命をかけて

次第に狂気を滲ませつつ、王は剣を振るった。

暗黒魔剣から飛び散る炎が、もはや周囲をも燃やし始めている。吹きすさぶ風が、ますます炎を煽った。

三人はやつとの思いで応戦しつつ、だがほとんど受けにまわっている状態だった。

――攻めることができない。

ダーク王の弱点がつかめないのだ。

すでに『光の石』の光も失せ、こうしている間にも周囲の炎の熱さと魔剣への恐怖が、三人の気力と体力を奪ってゆく。

『光の石』と光の剣だけで、この恐ろしい闇の王を倒せると思っていた甘さを悔やんでも、後の祭りだ。

轟々と燃え盛る炎を背負いつつ、ダーク王はますます剛毅になり、暗黒魔剣はすべてを破壊する勢いで打ち下ろされてゆく。

ダーク王の鉄仮面の下の目はぎらぎらと輝き、それは、三人以外が存在しない誰かを睨みつけているようでもあった。

始終うわごとのように、口の中で呪いの言葉を吐いているのが離れていても聞こえてくるのである。

三人はとにかく魔剣から逃れて、それぞれ離れた柱の影に身を隠した。

「冗談じゃないぜ」

レギオンが額の汗を振り払うようにぬぐい、齒軋りする。

「こんなところで焼け死んでたまるか」

かと言って、あの荒れ狂う魔人を倒すどころか、止める手立ても思いつかない。

ルシータにはもう、自分たちが犠牲になるより他に勝てる道はないと思えなかった。

このまま狂気の王を炎の中に引き止め、共連れに死ぬ――。

「ルシータ、君はライレーン王女のところへ行け」

ハラートがさつと側へ来てそう言ったとき、だが二人とも自分と同じことを考えていたのだとルシータは悟った。

レギオンを見ると、彼も「そうしろ」と言うようにうなずいたのだ。

ルシータは、ハラートの腕をつかんで首を横に振った。

「だめよ、わたしだけ……わたしも戦うわ！」

だがハラートは、ルシータのその手をそつとつかむと、続けて言った。

「わたしたちは”戦士”だ。だが君は違う。『光を導く者』――君は光の復興に必要なんだ」

それを聞いていたレギオンも声を押し殺し、叫ぶ。

「そうだ、ルシータ、行け！」

「嫌よ！」

ついにルシータは大声で叫んだ。

「わたしも戦士よ！ 最後まで戦うわ！」

そのときダーク王の魔剣が、ルシータとハラートの隠れている柱

を引き裂くように振り下ろされ、二人は左右に飛びのいた。

柱がガラガラと音を立てて崩れ、そこに魔人のごとく衝き立つダーク王が見えた。

「行け——！ ルシータっ！」

レギオンの声が聞こえたとき、ハラートが持っていた『光の石』を投げてきた。

「ルシータ、これを——無事に王女を目覚めさせてくれ！」

とつさに手を出し、『光の石』をしっかりとつかみ取る。

そしてルシータは、二人がうなずきあい、ダーク王に向かって突進していくのを見たのだった。

「だめよ、やめて——！ レギオン、ハラートっ！ ……」

その瞬間、再び手の中で『光の石』が輝き出し、ルシータの視界は閉ざされた。

ダーク王の恐ろしいなり声が聞こえた瞬間、何かがふわりと体を包む感じがし、そのまま上か下かもわからない状態のまま、ルシータの耳から炎の燃え上がる音が遠ざかっていった。

56・灰の中の車輪

「ルシータ、ルシータ」

ベナデットの呼ぶ声に薄っすらと目を開けると、森の木が瞳に映った。

瞼の上ののった露を払いのけ、ルシータは身を起こす。
あたりは、夜が明けたばかりのような明るさだった。

「ルシータ、大丈夫？」

「……ベルナデット、ここは？ わたし、どうなったの？」

「ダーク城近くの森よ。ここまで飛ばされてきたのよ」
それからはつとした。

「レギオンたちは？ 二人はどうなったの？！」

ベルナデットはラベンダー色の頭をかしげ、困ったような顔をした。

「わからない」

そのときルシータは、自分の服がぼろぼろに焼け焦げ、ひどい状態であることに気づいた。

きつと、どこもかしこも煤で真つ黒^{すす}だろう。

だが今はそんなことよりも、二人の身が心配だ。

「わからないって、どういうこと？」

ベルナデットの背後に、ダーク城が見えた。

山上にそびえる黒のダーク城。

夜明けの光の中、煤けた感じがする。

「——嘘っ。レギオン……ハラート！」

「ルシータっ！」

思わず走り出そうとしたルシータを、ベルナデットが止めた。
妖精は涙を浮かべ、

「ルシータにはやる必要があるでしょ?! 早く王女様のところに行かなきゃ——二人のためにも」

だがルシータは断固として言った。

「行けない。だって、わたしはあの二人と行くんですもの」
そうしてダーク城に向かって、駆け出した。

昨夜、三人で上った道を、ルシータはひとりで上がってゆく。
だが体力がかなり消耗して、自分でも嫌になるくらい足が動かない。
い。

一歩一歩が辛い。

(レギオン、ハラート、お願いだから生きていて。死なないで)

涙があふれ、前がよく見えなくなった。

つまづいて滑り落ちそうになり、岩をつかむ。

(——信じない。二人が死んだなんて、絶対に信じない)

城の入り口は何の変わりもなかった。

が、城のまわりは言うに及ばず、城内にも人影はない。

すでにダーク王の引き連れてきた兵士たちは、逃げた後のようだった。

ルシータは急いでダーク王と対峙した部屋へと、階段を駆け上がっていった。

上へ行くにつれ、焼け焦げた臭いが強く鼻につく。

そしてついに真っ黒に焼け落ちた扉の中へ進むと、あたりを見回し凍りついた。

何もない。

何もかも焼けてしまった。

二人の名を呼ぶのは虚しかった。

どこにも隠れていないのは一目瞭然だからだ。

ルシータは墨と灰の中を呆然と歩いた。

昨夜、稲光が見えていた窓からは、今は薄ら明るい夜明けの空が見えている。

そのとき、埋もれた灰の中に、きらりと光るものを見つけたルシータは、思わず駆け寄った。

それはレギオンの光の剣だった。

慌てて灰の中から引き抜き、自分の服の裾でこすると、剣は変わらぬ輝きを見せた。

目を転じると、すぐ側にはダーク王の鉄仮面が落ちている。

三人とも、骨も残っていなかった。

強い炎に焼かれた骸は完全に灰となり、すでに風が運び去ったのだろう。

「レギオン……嘘、嘘でしょう？」

と、そこに、ルシータは意外なものを見つけたのだ。

それは、二つの車輪——金と銀の車輪の印だった。

57・いのちの鼓動

車輪の印。

それは二人の体の中に入っていたというペンダント・ヘッドだろうか。

涙を拭い、ルシータはそれを手に取った。

そうしてそれぞれ、右手と左手に握り締めてみる。
すると――

「鼓動している?!」

そう、二つの車輪が、たしかに鼓動を伝えてきたのである。
ルシータの心臓も高鳴った。

「レギオン、ハラート……もしかして」

そのとたん、二つの車輪から金色と銀色の光が広がったかと思うと、その光の中に二人が姿をあらわした。
間違いなく、生きた、レギオンとハラートが。

「レギオン！ ハラート！」

二人とも放心しているようにしばし頭を抱えたり、振ったりしていたが、すぐにルシータに気づいた。

「ルシータ……？」

「そつよ！ ……ああ！」

嬉しすぎて言葉が出ない。

ルシータは二人に飛びついた。

ハラートを優しく抱き、レギオンを見つめる。

「……二人とも、許さないわ。こんなに心配させて」

そしてレギオンの胸に顔を埋める。

「よかった、よかったわ。生きていてくれて……ありがとう、レギオン」

「ああ」と小さくつぶやくと、レギオンもルシータを抱き締め返し、その頭に唇を寄せた。

「レギオン」

ハラートが手を差し出す。

その手を固く握りながら、共に命を懸けた戦士と祝福を分かち合う喜びが全身に広がるのを、レギオンは感じていた。

ダーク王が去り、急に春が来たようであった。

三人と妖精ひとりは一気揚々と森を抜け、ブライト城へ戻る。

すでにダーク城でのできごととは伝わっていたらしく、もう闇の兵士はただの一兵も見かけなかった。

だが城のまわりには呆けたようなダークキングダムに住人たちが大勢集まっていた。

彼らは皆、黒か灰色の服を着て、まるでパレードを見物するように、ルシータたちの通る道の脇にひしめいている。

「これからは彼らにもきつと、明るい日々が訪れるだろう」

馬上のハラートはそう言い、ほとんど嫣然と微笑んで見せた。

「そうね」

とルシータも言い、レギオンと目を合わせる。

「ライレーン王女が目覚めたら、ブラツキーにも知らせてあげなく

「ちゃ」

「ああ、そうだな……あいつ、クラウドディアにつまぐ告白できたかな」

うふふ、とルシータが笑った。

と、ベルナデットが空を指差し、叫んだ。

「あれ見て！ カラスが四羽、飛んでくわ」

やみがらす
「闇鳥の賢者だ」

ハラートが言う。

「ライレーン王女がよみがえり、光の力が復活したら、きっと消えてなくなるだろう」

四人はブライト城へ入ると、まっすぐに玉座の間へ向かった。

以前とは違い、天窓から射し込んだ光が広間中に満ち、ハラートは思わず感嘆の声を漏らさずにはいられない。

「なんて明るいんだ。まるで光が踊っているようだ」

今は座る者のいない玉座をレギオンとハラートがのけると、はたしてその下へ続く階段があらわれた。

レギオンはごくりと喉を鳴らし、ベルナデットが「わあ……」と声を上げる。

ルシータが言った。

「行きましよう。王女が待っているわ」

そうしてついに、光の王女の眠る地下室へと下りていった。

58・王女の目覚め

地下室はなんと、草原になっていた。

明るい光がずっと満ちているせいなのだろうか。

そしてあまりにもまぶしい球体が宙に浮いており、その下には白い小さな花々が敷き詰められたように咲いている。

その浮遊する球体は、ルシータが光の神殿で見た光の球体とそっくりだった。

「これは……これが光の王女か？」

レギオンが戸惑ったように言った。

ハラートはうなずき、

「だが誰も、どうやって彼女を目覚めさせればいいのか、知らない」

ルシータは一步前へ出ると、思い切って言った。

「ライレーン王女様。わたしはルシータです。あなたのお母さまの妹です。」

ダーク王は去りました。どうか、お目覚めください——」

すると、目を覆つまぶしさがだんだんと落ち、光の幕の中に眠っているライレーン王女が姿をあらわし始めた。

もう少女にまで成長した王女は、全身を自らの長い髪に覆われて眠っている。

アルタミラの面影を呈し、だがその髪は天使ソワールを思わせる、光り輝くプラチナ・ブロンドだった。

だが完全に光がおさまり、王女の体が白い花の上に横たわっても王女は目覚めなかった。

安らかな寝息を立てて眠ったままだ。

「どうしよう？ どうやったら、彼女は目覚めるのかしら？」

ルシータは、そつと王女の額にキスしてみる。

「だめだわ。ね、レギオンやってみて」

「いや、おれは無理だ」

「何慌ててるのよ。アルタミラ姉さまがそれを望んでるかもしれないじゃない。さあ」

「む……」

観念したレギオンが、やはり王女の額に口付けたが、やはり王女は目覚めない。

ハラートもやってみた。

だめだった――。

「うーむ。肝心の王女が目覚めてくれないければ、どうにもならないな」

レギオンも腕を組んでため息をつく。

「みなさん、わたしを忘れてるわよ」

そのときベルナデットがえへん、と鼻をこすった。

そして意外そうな顔をした三人の真ん中を通ると、王女の瞼に露をひと塗りする。

「お目覚めください、王女様。光の妖精たちが、王女様を待っています」

すると何ということだろう！

ライレーン王女が、ぱっちりと目を開いたのだ。

綺麗なライトグリーンの瞳——森の色の瞳は、ルシータ似だ。

「おおっ！」

三人は声を上げた。

まるで人形のように愛らしい王女は、上半身を花の上に起こし、四人を見つめた。

そしてにっこりと笑うと、鈴を転がしたような声で言った。

「おはよう、みなさん」

59・光をまとって

王女は立ち上がると、ルシータの前に進んだ。

ルシータはひざまずくと、深く頭を下げる。

「あなたはルシータね。わたしの親愛なるおばさま」

そしてルシータの頬にキスをした。

それからレギオンの前に進み、ルシータと同じく礼を払うレギオンに、

「あなたはレギオン。『金の車輪』でしょ。よく来てくれました。

これからわたしが大きくなるまで、光の国をお任せします」

「えっ」

これにはみんな同時に声を上げた。

「ちょ……ちょっとお待ちください、王女様。おれにはとてもそんな役目は」

戸惑うレギオンに王女は十歳とは思えぬ態度で言う。

「あなたでなければだめなのです、レギオン。あなたはお母さまが愛した人だから。」

——それから、ハラート。『銀の車輪』」

今度はハラートの方へ近づいた。

「あなたは闇の国の王になります。闇はあなたとあなたのお妃様のもとで、人々に安らかな夜をプレゼントするでしょう」

今度は誰も声を上げなかった。

声すら出せないほど、驚いたからである。
からうじてベルナデットが聞いた。

「ハラートのお妃様？ それはどなたですか？」

「それは」

ライレーン王女がにっこりと微笑む。

「今から迎えに行きましょう」

そうして両手を広げて、歌うように言った。

「さあ、光の妖精の皆さん。お目覚めなさいな。わたしと一緒に春の歌を歌いましょう」

すると草原のあちこちから、ダーク王に閉じ込められ、眠っていた妖精たちが飛び出した。

「王女様」

「ライレーン王女様」

「おはようございます」

何人かの羽のある妖精が、光のヴェールのような衣装を持って飛んできた。

王女はそれを着ると、楽しげに歌いながら、地下室の階段を上がつてゆく。

ルシータたちも、光の妖精たちも、みな王女の後続いた。

王女は止まることなく城の中を進んでゆく。

「これってもしか……ハラート、王女様はまさか」

ルシータの言葉にハラートも動揺を隠し切れない様子だ。

「そんな、まさか……」

「どうした？ どういうことだ？」

レギオンだけが、ピンとはこないようだ。

王女はついに、ある部屋の前で止まった。

「ここよ。ここにいますわ」

それはアリーナの部屋だった。

ルシータとハライトが顔をあわせる間に、王女は光の妖精を従えてすたすたと部屋に入ってゆく。

そこには銀色に輝く光に包まれ、腹を剣に貫かれたままのアリーナが横たわっていた。

60・復活の式典

その姿に、レギオンはショックを受けたようである。

「こ、これは！ 何てこった！」

顔色を変えた。

「でも、見て！ 彼女、変わってるわ……お腹が」

ルシータの言うとおり、アリーナの腹は平坦だった。

あんなにも膨れていたのに、今はその名残もない。

王女はアリーナに近づくとベッドの上に上がり、剣の柄を握った。そして皆の方を見て、にっこりとし、

「このひとは、銀の光に守られて眠っているだけ。この剣は悪いものだけを斬ったのよ。」

——さあ、起きて」

するりとアリーナの腹から剣を抜いた。

アリーナの瞼が動き、瞳が開かれたときのハライトの喜びはどんな言葉でも表わせないだろう。

「アリーナ！」

「ハライト！」

二人がしっかりと抱き合うさまを、ルシータも感激で胸つまらせながら見守った。

「よかった、よかったわ。本当によかった」

「ねえ、あれを見て、ルシータ。光があんなに」

ベルナデットの声に窓の外を見ると、さんざめく光が空いっぱい

に踊っていた。

あんなに立ち込めていた森の瘴気も消え、木々の上を妖精たちが舞っている。

青い空、風が吹き、世界はまさに生まれ変わったのだ。

「よかったな、ルシータ」

レギオンの声に振り返ったルシータは、その瞳の温かさに涙しそ
うになった。

かろうじて微笑を返すと、ひとりで部屋を出た。

それから一ヶ月後、ブライトキングダムにはたくさんの人々が戻
ってきて、今日は王女の復活祝いと執政レギオンのお披露目だ。

闇の新王ハートと王妃アリーナの結婚式および戴冠式は一週間
前に行われている。

もちろん、今日のこの式典には主席で招かれていた。

「ルシータ、もう用意はできた？」

ルシータの部屋にベルナデットが顔を出し、状況を聞いた。

「う……ん。もうちょっと」

と、ルシータの姿を見たベルナデットは、思わず手を口に当てて
叫んだ。

「わあ！ ルシータ、綺麗！」

白いドレスは身にぴったりと添い、胸元のドレープと胸の下で結
ばれた真紅のリボン、そして指が隠れる長いフリルの袖が、ルシー
タをずいぶんとエレガントに見せていた。

さらに深い緑の瞳と同じ、エメラルドのペンダントが胸元を飾っ
て、首のラインを美しく強調している。

綺麗に編みこまれた長い亜麻色の髪が背中を流れ、銀の頭飾りが光っていた。

よたよたと後から入ってきたパールも、感激に声を上げた。

「おお！ アルタミラ王妃様に生き写しじゃ！」

「もうそれは言わないで。わたしは姉さまじゃないんだし」

決して気分を損ねたふうな言い方ではなかったが、もうこれからはアルタミラの影から抜け出したいと思っていたので、はっきりとそう言っておいた。

「おお、そうじゃった。もちろん——ルシータ、おまえさんは綺麗な娘じゃよ」

「ところで、レギオンには会った？」

ベルナデットがパールに聞く。

「ああ。あれもなかなかじゃ。最初に会ったところは、ちと野蛮じやったのにおう」

そして思い出したように、ルシータに言った。

「そうじゃ。レギオンがの、今日式典が終わったら、光の神殿で会いたいと言っておったぞ」

「光の神殿で？」

ルシータの心に、不安と期待が混ざり合った複雑な感情がよぎる。
もしも自分の心を問い詰められたら——
あの神聖な場所で、嘘は言えない。

最終回 真実の瞳

ライレーン王女はこの上なく愛らしく、国民はみな心から王女の復活を喜んだ。

新しい闇の王と王妃の美しさは評判となり、二つの国の親交を期待する声も高まった。

そしてブライトキングダムの新執政レギオンもまた、好意を持って人々に迎え入れられた。

彼は威風堂々とし、武術に優れていて人々に親切だったからである。

ルシータもライレーン王女の叔母として上座に座っていたが、ブライトキングダムばかりかダークキングダムでも、彼女が『光を導く者』としてこの世界をよみがえらせた英雄であると知られていた。彼女こそ、今日のこの笑顔に包まれた幸せをもたらした女神だと言っ者も大勢いて、ルシータの姿に人々は拍手喝采を送った。

「居心地が悪いわ」

皆に手を振りながらもルシータは尻をもそもぞさせ、隣にいるバールに小声でささやく。

するとバールはすまして答えた。

「なに、剣を握っていると思えばいいんじゃないよ。それなら慣れておるうが」

こうして華やかな式典も終わり、ルシータは森の中を歩いて光の神殿へ向かった。

あのととき闇の魔物が襲ってきた森はすっかり光を取り戻し、心地好い風も通っている。

神殿も修復され、『光の石』は元通りここへ戻された。
今はバールを始め、光の魔女や魔法使いたちがここを守っている
のだ。

だが今は誰もいなかった。

「レギオン？」

ルシータがひっそりと彼の名を呼ぶ。

答える者がなくままに、ルシータは奥へと進んだ。

その長い距離を行きながら、ルシータはまたブライト王とアルタ
ミラの婚礼を思い出していた。

（姉さまは、どんな気持ちでここをブライト王と歩いたのかしら？
たくさんの祝福を受けて——）

最奥の聖壇に、『光の石』が置かれている。

それを懐かしい気持ちで見ているとき、

「ルシータ」

と、呼ぶ声がした。

レギオンだった。

しっかりと織り生地のオリーブ色のローブをまとい、戦士とい
う猛々しさは影を潜めている。

金色の巻き毛が肩の上で踊っていた。

「呼び出してすまん。何か……久しぶりだな」

遠慮がちに言うレギオンに、ルシータも言葉少なに返す。

「ええ。お互い、忙しかったから」

それから、ちょっと冷やかすように言った。

「結構似合っているじゃない？ 執政様」

レギオンは頭を掻くと、

「君も……似合ってる。なかなかエレガントだ」

そしてルシータのいるところまで進み、『光の石』を見た。

「この石が、おれに夢を見せてくれたんだ。アルタミラの夢を」
レギオンは、ふっとルシータに視線を移し、言った。

「あれは、君だったんだな」

ルシータの胸がはつと動き、エメラルドのペンダントが光をひらめかせた。

「ハラートに聞いたのさ。おれはアルタミラの幻を見たのだと思っていたが――

あのときの彼女の瞳、それはたしかに海の色ではなかった。

君と同じ、深い森の色――

ルシータ、あれは君の言葉だ。そしておれはそこに真実を感じた」

そう言っただけレギオンは、またルシータの瞳を覗き込んだ。

ルシータは動くことができなかった。

彼の瞳にとらえられてしまったからだ。

レギオンは言った。

「だから、今おれも真実を言おう。

――ルシータ……愛している、この命、懸けて」

光は昇り、一日を明るく照らす。

人々に希望と活気を与え、愛を育んでゆきながら。

そして闇が迫ると、人々は家路に着いて体を休めるのだ。

安息と平和に感謝の祈りを捧げ、また明日へと希望をつないでゆくために。

『……人が楽しく暮らしていくには何が一番必要だと思われますか？
わたしは、”希望”だと思います。』

光と希望があれば、人々は笑って暮らしてゆけるのではないでしようか——』

『光の国の物語 - 車輪の戦士たち -』 ・ 完

最終回 真実の瞳（後書き）

お読みいただいております。m (_ _) m
結構たいへんでした。というのが感想です。

映像は浮かぶのに、語彙力が不足していてファンタジーの世界を描ききれませんでした。

本当に拙いお話にお付き合いくださいまして、心から感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0056f/>

光の国の物語 -車輪の戦士たち-

2010年10月12日05時34分発行